
魔法少女リリカルなのは～悪役面の主人公～

フランとレミリア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは〜悪役面の主人公〜

【Nコード】

N4567T

【作者名】

フランとレミリア

【あらすじ】

俺の名前はベルフェゴール。

何？厨二？

気にすんな。

実際に俺体がガンダムベルフェゴールになってるのだから……………

てか追加武装なんぞこれ？

まあ死ぬ確率が低くなるからいいか

高町なのは？

ああ……やっぱり死ぬ確率高いわ。

プロフィール（前書き）

6 / 27

更新です（＾Ｏ＾）／

プロフィール

名称

ガンダムベルフェゴール

G u n d a m B e l p h e g o r

型式番号 G B - 9 7 0 0

所属 高町家

頭頂高 2 0 0 ?

重量 1 7 0 ?

装甲材質

ルナ・チタニウム合金

V P S 装甲

武装

大出力ビームサーベル

ヒートワイヤー

ストライククロー×2

(ダブル)ソニック・スマッシュ砲

バスターソード

追加武装

ビームシールド×3

(V字アンテナの中心と両腕に装備)

エナジーウィング

(コードギアスのランスロットと紅蓮に装備されてた物の赤黒い色のバージョン)

GNドライブ×2

追加システム

EXAMシステム

後期追加武装

頭部ビームシールド 陽電子リフレクター

追加機能

ハイパージャマー

第1話（前書き）

7 / 20 修正完了

第1話

気が付いたらガンダムだった。

うん、意味分かん。

てか俺はなんでガンダムなんだ？

しかも俺の好きなMSのガンダムベルフェゴールじゃないか！！

何？マニアック過ぎて分かん？

そんなのggって調べな！！

多分載ってる……………と思う。

しかも今俺は恐らく森の中にいる。

ここがどこだか分らない。

それに俺の記憶が中途半端だ。

思い出せるのが自分が元が人間で性別は男、そしてオタクという人種だったという事だけ

まあそれより俺のスペックを調べるべきだな……………

じゃないと何かあつた時に対処できない。

とりあえず空飛んでみるか。

おお！？なんか翼が…………… ってエナジーウィングじゃん！

これコードギアスのやつじゃん。

しかもなんか緑色の粒子が…………… ってこれGN粒子か？

って事はだ、俺の動力源はGNドライブか？

やべ……………ハイスペックだ。

元々ガンダムベルフエゴール自体が接近戦に特化してて中に乗るパイロットが死んでしまうくらいにハイスペックだしな……………

こんなの誰と戦う為のスペックなんだよ……………

てかこの両腕に付いてる装備って何だ？

エネルギーをまわしてみるか……………うお！ビームシールドか！？

いやマジハイスペックだわこの体。

なんか額にもエネルギーがまわせるっぽい。

もしかしてこれもビームシールドか？

何この鉄壁の守り……………マジ何と戦わせられんの俺？

段々不安になってきた。

ん？なんか剣が落ちてる……………ってバスターソード？

決してバイク便してる金髪のじゃないぞ？

ちゃんと漫画版のバスターソードだ。

てかなんでここにこれがあるんだ？

まあいいか。

とりあえずこの森を出よう。

そして人のいる所に行こう。

何か分かるかもしれないしな。

俺はエナジーウィングを展開して空を飛んで森を出た。

しばらく飛ぶと町が見えて来たので無用な混乱を避ける為に地上に降りて町に近付いた。

町は俺の知る文化レベル、平成時代の町だった

しかし俺は町に入らずに物陰に隠れた。

何故かって？

それは今の俺の姿にある。

だって

俺ガンダムベルフェゴールなんだもん。

絶対国家権力呼ばれちゃうよ……………

てか俺人間になれないのかねえ？

うーん……………無理っぽいね（笑）

なんで俺ベルフェゴールなの？

ベルフェゴールって結構顔こわいから絶対国家権力呼ばれる。

しかも俺ベルフェゴールだから体でかくて隠れる所が少ない。
泣）

とりあえず隠れながら移動するしかない。

気が付いたら公園に着いた。

ここまで来るのに時間がかかってもう日が沈んじゃってるよ……………

ん？公園に誰がいる？

しかも泣いてる？

よく見ると栗色の髪の小さな女の子だ。

……………ほっとけない。

俺は自分がベルフェゴールである事を忘れて近寄った。

そして

泣いてる女の子の頭を撫でた。

すると女の子は顔上げて……………

もつと泣いた。

え？何！？俺のせい！？

……………そういえば俺ベルフェゴールだったわ（笑）

怖いわなこの顔

俺はかなりショックだったがそれでも少女を撫で続けた。

それで泣き止むなら俺の心の傷なんて気にならん！

……………てのは嘘だが泣いてる女の子をそのままにするのはどうか
と思うし……………

結局その少女が泣き止んだのは10分後だった。

「……………ありがとうございますなの……………」

その少女は恐る恐る俺にお礼を言ってきた。

俺はゆっくり少女に分かるように頷いた。

すると少女はニッコリとまるで花が咲くような笑顔を俺に見せてくれた。

とりあえず警戒を解いてくれたっぽいので俺は少女に話し掛けてみようとしたが

俺喋れんかった。

俺今機械の体だから喋れない！

だってガンダムに口無いもん！

思わず頭を抱え込んでしまいそうになるのを抑え込んで少女を見ると

「えっと……………わたしのなまえは”たかまち　なのは”です」

舌つ足らずの声で自己紹介してくれた。

俺は声が出ない為頷いて固まった。

” たかまち ” ？

どっかで聞いたぞ？

” たかまち なのは ” ？

” 高町 なのは ” ？

マジかよ……

どうやら俺はリリカルでマジカルな世界にこのベルフェゴールの体で降り立ったみたいだ。

とりあえず俺がこの時点で思った事は

生き残れるかな………

自分の保身でした。

第2話（前書き）

7 / 20 修正完了

第2話

あれから5年たった。

時間飛び過ぎ？

いやマジあんまし進展なかったよ？

まあ語るとしたらなのはが俺を高町家につれて帰った時の事だ。

〈5年前〉

あの後俺の名前と行くところが無い事をなのはに伝える事になんとか成功した俺はなのはに連れられてある一軒の人気の無い家に着いた。

（名前は覚えてないからとりあえずベルフェゴールって名乗った）

そこがどこだかはだいたい見当は付いていたが、とりあえずなのは
の出口を見るとなのはは

「ここがわたしのおうちのの………ただとおとさんがけがして
ていまはだれもいないの………だからなのはいい子にして
なきゃいけないの………」舌っ足らずの声で寂しそうにそう言う。

ちょっとイライラしてきた。

なんでこんな小さな女の子を一人にできんの？

その精神が理解できんな！

俺は再び泣きそうになっているなのはの頭を優しく撫でた。

「ふえ？………なのはえらい？いい子になれてる？」

なのはは恐る恐るそんな事を聞いてくる。

だから俺は肯定の意味を込めて大きく頷いた。

「…………グスツ…………ふえ…………ん！」

なのは俺に抱き付いて泣き出してしまった。

俺の体は金属でゴツゴツしていて痛そうだが、なのはは離れようとし
ない。

よほど一人が寂しかったのだろう。

そう思いなのはの頭を撫でていると

「なのはから離れる！化け物！！」

そんな声が聞こえてきた。

その声に驚いたなのはが俺から離れて俺の後ろを凝視する。

俺もその視線につられて振り返るとそこには……………シスコ
ン
がいた。

まずい。

非常にまずい。

確かこのシスコン兄貴は常識では計り知れないレベルの剣の使い手だっけ？

あんまし覚えてないけど確かそうだ。

そんな事考えていると

「おにいちゃん！ベルフェゴールさんはいいひとだよー！」

なのはがシスコン兄貴にそう言った。

「早くそいつから離れるなのは！そんな得体の知れない奴なんかの近くにいろな！なのはは良い子なんだから俺の言ってる言葉は分かるよな！？」

しかしシスコン兄貴はなのはにそんな事を言う。

「おにいちゃん……………」

なのははまた泣き出しそうになってる。

そろそろ俺怒ってもいいよな？

なんだよあいつ！

大人しく聞いてりゃ人の事化け物扱いしてさ！

まあそれは俺自身も悪役っぽい面してることに自覚してるからそれは仕方ないとしてもだ。

なのは泣かせるのは頂けない。

てかお前なのは兄貴だろうがよ！

なのは泣かせるなんて何考えてんのさ！

俺はそれが許せなくてバスターソードを握り直す。

それを見たシスコンはどこからか二振りの小太刀を取り出して構えた。

正直言つて剣で勝てる気はしない。

隣にいるなのはを見るとさらに泣きそうな雰囲気になっている。

こんな小さな女の子を泣かせる兄貴がいてたまるか！！

そう思い俺はバスターソードを構えた。

「……………ふっ！」

先に動いたとはシスコン。

かなり速い速度で距離を詰めてくる。

俺はなのはを巻き込まないように前に出た。

そしてこっちに近づいてくるシスコンにバスターソードを振り下ろす。

「甘い！」

そして気が付くといつの間にか俺の背後にシスコンがいて、俺の背中を斬りつけた。

「くっ！」

しかしシスコンが思っていた以上に俺の体は堅いらしく、傷一つ付けられない。

俺は反撃として振り向きざまにバスターソードを振り抜いた。

しかしやはりと言うべきか、俺の振る剣は当たらない。

俺とシスコン、どちらにも決め手が欠けてしまっていて膠着状態が続く。

しかし、俺は見てしまった。

なのはが泣いている所を……

俺はバスターソードを下ろした。

それを見ていたシスコンが怒って攻撃来たが所詮は小太刀程度では傷付かないのでそれを俺は無視してなのはの下に向かう。

なのはは泣いて赤く腫れた目をしていた。

俺は謝罪の意味を込めて頭を撫でる。

そこまできてやっとシスコンは状況が分かったらしい。

構えていた小太刀を下ろして俺に謝ってきた。

俺は首を振り、なのはの方に首を向けて合図を送る。

俺の言いたい事が分かったのかシスコンはなのはに謝っていた。

しばらくして高町家の残り二人が帰ってきた。

最初は俺の姿に驚いていたけどなのはとシスコンが大丈夫と説得してくれたおかげでなんとかなり、そして、なのはから俺の行くところが無い事を高町家のみんなに伝えるとあっさりと俺の居住が認められた。

~~~~~

く現在く

今現在なのはは小学校3年生だ。

多分俺の予想が正しければそろそろ無印が始まる頃である。

俺はそう思いながらなのはの眠る部屋へ行く。

朝食ができたから呼んできて欲しいとなのはの母親である桃子さん

から頼まれたからだ。

これは俺にとってすでに毎日の日課になっている。

その理由としてはなのはの服装が寝相でどんなに乱れていたとしても詰まるところ機械の体である俺には関係ない。

てかそれ以前に幼女に欲情するほど俺は落ちぶれちゃいない。

そう思いつつなのはの部屋をノックする。

返事がない。

もう一度ノックする。

やっぱり返事がない。

仕方なく俺はなのはの部屋に入る。

するとなのはのベッドから手が見出ており、その手の先には携帯が握られていた。

恐らく携帯のアラームを寝ぼけたまま止めてまた眠ってしまったようだ。

とりあえず俺はいつものように布団の膨らんだ部分を揺する。

しかし

「……………うつん……………」

そう言うだけで起きてこない。

俺は何度も揺すった。

しかしなのはは起きてくれない。

仕方がないので俺は布団を勢いよく取った。

「にゃあ！」

するとなのはは驚いて目を覚ました。

布団を勢いよく取ったせいかパジャマのボタンが外れて見えちゃいけない肌色な部分が見えていたりしてかなり乱れてるが気にしない。

「……………朝から激し過ぎるの……」

聞きようによつてはかなりきわどい言い方だが俺は気にしない。

俺は用意してあったなのはの制服を渡して部屋を出た。

流石に着替えを覗く趣味は無い。

前に一度なのはが

「ベルフェゴールさんなら見てもいいよ？」

そう言うてなのはが頬を赤く染めた時があつたが、その時に親バカとシスコンにO H A N A H Iさせられた。

ああ親バカつてのはなのはの父親の士郎さんね。

仕事中の怪我が原因で入院してなのはを寂しがらせるきっかけ作った張本人。

まあそれがきっかけで今まで勤めてた仕事をやめたらいいんだけどね。

まあなのはを寂しがらせるくらいならそのほうが断然良い。

最初に会ったときはいきなり小太刀で斬りかかれたけど、桃子さんの素敵な笑顔で助かった。

あの時から桃子さんに逆らえる気がしねえ。

そんな事考えていたらなのはが部屋から出てきた。

見ると制服のリボンが曲がってたので直しておく。

なのはは

「ありがとう!」

と笑顔で言ってくるが………毎回俺がリボン直してるような気がするな………

まあ気を取り直して居間に向かって歩こうとすると

「あのねベルさん?私昨日変な夢を見たの」

そんな事言ってきた。

（ベルさんってのは俺の愛称。なのはが考えた）

ふんふん、それで？

「なんか男の子が怪物と戦ってたの」

何iiiiiiiiiiii!!

つつ事は……………無印スタート？

### 第3話（前書き）

7 / 20 修正完了

### 第3話

どうやら無印がスタートしたようです。

なのはが夢の中で見たのは恐らく淫獣ユーノ。

とうとうこの日がきたか……………。

俺はそう思いながらテーブルを拭く。

ん？なんでテーブルなんか拭いてるかって？

それは……………

俺が翠屋で働いてるからだよ。

まあ飯はもらってないがただで住まわせてもらっわけにもいかない  
ので翠屋でウェイターやってます。

始めたばかりの時は客に驚かれたけど今では悪面ロボットがウエイターをするケーキの美味しいお店として人気が出てる。

てか悪面ロボットって何だよ……

妙に凹むわ。

「ベルさ〜ん！8番ご指名ですよ〜！」

は〜い！って桃子さん！

ここそういうお店じゃないですからね！

そんなこんなで時間は過ぎて現在は夜。

割と今日も忙しかったよ。

しかも最近俺に対する”ご指名”が多くなってる。

まあ小さな男の子とかならまだ頷けるんだが最近は妙に女性が多い。

しかも仕事に疲れた感じの……

まあそれで……………その女性から注文を取ろうとするといつも愚痴が先に聞かされて長くなる。

そしてある程度話聞いてたらなんか俺も同情しちゃってその女性の頭を撫でる。

女性俺に抱きついて号泣。

すっきりしたところでオーダー入ります。

という流れが最近定着化しつつある。

しかもそのおかげか知らんが売上がUPしちゃってる摩訶不思議現象。

まあ要するに最近忙しいって事だ。

まあ今俺が考えている事とは全く関係ない事何だけどね。

何を考えているのかと言うと……………

実は夕食時になのはがフェレットを狩って……じゃなかった飼っても良いかってみんなに聞いてきたんだよ。

みんなは自分で世話をして翠屋に連れて来ないならという条件でOKを出した。

そしてその夜。

なのはが家を飛び出した。

もちろん家出じゃない。

魔法少女リリカルなのはが始まるのだ。

俺が考えていたのはこの作品に介入するべきなのかという事？

ぶっちゃけ原作介入なんてどうでもいいんだがなのはが傷付けられるのは正直同じ屋根の下で住んでる者としていただけない。

それに俺がいる事によって何かしら変わった事がある可能性すらあるのだ。

そう思うと心配でたまらない。

仕方なく各部に異常が無いか素早くチェックして家の玄関まで進むと

「行ってくるのか？」

シスコンがいた。

俺は肯定の意味を込めてメインモニターであるデュアルセンサーを一度だけ音を立てて明滅させる。  
(音はWみたいなジュー！って音)

「そうか……………なのはを頼んだ」

シスコンはそう言って俺に道を譲った。

さあ原作介入開始だ。

現場の動物病院まで空を飛んだので意外に早く着いたが被害は甚大だった。

建物は崩れてしまっており、見るも無残だ。

俺はセンサーを広域に展開してなのはを探した。

いた！

すぐ近くにいる！

その方角に向かって飛ぼうとしたその時

桜色の柱が天に向かって伸びた。

俺は急いでそこに向かうと白い服を身に纏ったのはと今にも襲いかかってきそうな気味の悪い化け物がいた。

てかなのはの奴、混乱してて化け物を見てない！

化け物がそれを見逃すはずもなく襲いかかる。

やらせるか！

俺はエナジーウィングで今出せる最大の速度でなのはと化け物の間に突っ込んだ。

コンクリートが砕け、俺を中心にクレーターみたいになる。

それになんか凄い音がしたが一切気にしない！

勢いよく着地してなのはと化け物の間に入った俺は右のストライククローを展開して化け物を掴む。

そして

握り潰す！

トマトを握り潰したような嫌な音を立てて化け物は弾け飛ぶ。

精神衛生上あまり良いとは言えない倒し方だったがなのはの安全の  
為には仕方がない。

振り返ってなのはを見ると

「……………べ……………ベルさん」

顔が驚くほどに真っ青ですね（笑）

「そ……………そんな馬鹿な……………」

その肩に乗るフェレット。

こいつがユーノか？

にしてはなんか声がかん高い気がするな…

こっ……………女の子みたいなの……………

そんな事考えてたら俺の体に衝撃が走った。

驚いて前を向くとあの化け物が再生していて、さっきの衝撃は俺に  
体当たりをしたようだ。

ふ、甘いぜ！

俺も知った時は驚いたがこの体には何故かルナ・チタニウム合金製のVPS装甲になってるから実弾実剣攻撃はもちろんレーザー攻撃にもある程度耐えられる構造になってるのさ！

じゃなかったら親バカとシスコンの攻撃喰らったときに俺死んでたわ！！

「なのはさん！早く封印を！」

ん？この声ユーノか？

やっぱりなんか違和感があるな……

まあそれはまた後で追及すれば良い事だな。

俺は文字通り自分の体を盾にしてなのは達が封印の準備を終わらせるまでの間、化け物の攻撃から守った。

そして

「ベルさん！離れて！」

その声を聞いた俺は空に飛び上がった。

「デイベイーン……バスター!!」

桜色の砲撃が化け物を飲み込み突き抜ける。

そしてその砲撃の後には青色に光る宝石が残るだけとなった。

これが魔砲か……………

俺は遠くに見えるパトカーのサイレンと赤い灯火を見てここに来るまでの時間を計りながらそう思っていた。

あの後なのはを連れて近くの公園に逃げて事情聴取をしたところ……

……

「あの…………ユーノ・スクライアです！…………あの…………その…………」  
顔を真っ赤にしてもじもじと内股気味にながら人間に戻って話す金  
髪緑眼の少女…………

ユーノが女の子だった。

なんでさ？

第4話（前書き）

7 / 20 修正完了

## 第4話

……………何故？

その言葉が今俺の頭の中をグルグルと回っている。

あの後なのはとユーノを連れて家に帰ると待っていたシスコンなのはが怒られていた。

ついでにフェレット形態じゃないが高町家のみんなにユーノの紹介もあつた。

魔砲……………じゃなかった魔法の事は伏せてたみたいだったが……

まあ少し違うがそれは原作にもあつた事だがから別にいい事なんだから……………

俺が言いたいのは何故ユーノが女の子になつてたのかって事だ。

確かに後ろから見ると髪を肩位までしか伸ばしていないからなのは

が夢の中で男の子に見間違えても仕方がない。

しかし

「ベルフェゴールさん……………」

そう言ってユーノは頬を赤く染めて捨てられた子猫のように俺にすり寄る。

なんか俺懐かれた！

てかそんな要素あったか！？

ユーノは相変わらず、その若干潤んだつぶらな瞳で俺を見つめてくる。

や、やめろ！

俺をそんな目で見ないでくれ！

少し潤む瞳は俺を捉えて離さない。

何故だ！

何故こうなった！

って……桃子さん！何笑ってるんですか！

珍しく俺が慌てているのを見て桃子さんにこやかな笑顔を素敵に振り撒いている。

ゾクッ！

うお！殺氣が！

首だけで振り向くとなのはが

ハイライトの消えた目で俺を無表情のまま見つめてくる。

どう見ても小学校三年生の女の子ができる芸当じゃねえ！！

誰かこの力オス何とかしてくれええええええええええ！！

そんな俺の声にならない叫びが夜の高町家に響いた。

~~~~~

（翌日）

「おはようなのベルさん！」

「おはようございますベルフェゴールさん！」

おう……おはよう……なのは……ユーノ……

俺はそんな二人に手を上げて挨拶をする。

今日もまた1日が始まった。

ただひとつ昨日までとは違う事がある。

それは………

「えへへ〜 ベルさん」

「あ…………えと…………ん…………」

俺の両手を繋いで居間まで歩くのはとユーノ

そう、昨日の修羅場？を見かねた土郎さんが二人に俺と二人で手を繋ぐ事を進めたのだ。

するとユーノは顔を真っ赤にして恥ずかしがりながらゆっくりと…

……

なのはは少々不満げに俺と手を繋いだ。

しかし繋いだ瞬間二人とも花が咲くような笑顔を見せてくれて俺も和む事ができたのだが、その後にシスコンからのO H A N A S I Iが待っていた。

果てしなく理不尽だと思った俺は多分正しいと言える。

まあこんなので二人が笑顔になれるなら俺に対する少々の犠牲も代価だと思えば妥当か？

そんな事を思いながら今日もまた学校へ行くのはを見送り仕事を始める。

途中ユーノからの説明がなのには対してあつたみたいだが俺はそれをレイジングハートを介して通信として聞く事ができた。

どうやらデバイスであるレイジングハートは通信機能を有しており、機械である俺にも通信できるようだ。

とりあえずなのはがジュエルシード集めに参加する事をユーノに言っていたからこれが本当の意味での無印スタートという事になるのだろう。

まあ俺のやれる事と言ったらなのはやユーノを守る事だけなんだろうがな。

そんな事を考えつつ仕事に打ち込む。

「ベルさん 12番に指名です」

だからそういうお店じゃないですからね桃子さん！

そんなツッコミを心の中でしつつ呼ばれたテーブルへと向かうと

「ひゃー！………」
「ごめんなさい！」

俺を見て可愛い悲鳴と謝罪をしてくる金髪の運命さんがいた。

は？

じゆじゆ。

第5話（前書き）

7 / 20 修正完了

第5話

「……………ぐずっ……………ひっく……………ベルさーん……………」

あゝよしよし、泣くな泣くな。

俺は今泣いている金髪運命さんの頭を撫でて慰めているところだ。

どうしてこうなったのかは俺にも分からんが身の上話を悲しそうに話す彼女を見て放っては置けなくなっただのは事実だ。

まあ知っていたとしても話を聞けば泣かせるじゃないか……………

こんな小さな女の子にそんな危険物を集めさせる母親ってどうよ？

俺は許せないけどね。

まあなのはとあのKY執務官殿が多分解決してくれるとは思っただけど……………

……大丈夫かねえ？

てか今思っただけど、この金髪運命さんがこの世界に来るのってこんなに早かったっけ？

俺の記憶が正しければ確かなのはが友達の屋敷に行った時にファーストコンタクトだったような気がする。

そんな事を考えてると

「……………ねえベルさん！私の母さんにも会ってくれないかな！？」

はい？

今何て言いました？

俺初っぱなからラストステージ行きフラグ？

マジすか？

それを聞いた俺は思わず桃子さんを見ると

素敵な笑顔を送られた。

はい！行ってきまーす！！

来ちゃったよ…………

マジ来ちゃったよ…………

「ガルルルルル！」

そしてすぐ横でオレンジ髪の女性にスッゴい警戒されてる。

「駄目だよアルフ…………ベルさん困ってる…………」

フェイトがアルフを宥めてくれる。

「…………ふんっ！…………フェイトの頼みって言われてもなんか気に入らないね！」

なんだが俺アルフにスッゴい嫌われてる（笑）

「…………アルフ…………」

あゝあフェイトがまた泣きそうになってんな…………

とりあえず俺はフェイトの頭を撫でる。

「ベルさん…………」

フェイトは少し頬を赤く染め、涙で潤んだつぶらな瞳で俺を見つめる。

や！やめてくれ！

俺をそんな目で見つめないでくれ！

余計に放って置けなくなっちまう！

というか俺がやってる事って原作介入以上な気がしてきた！

いったいどこで選択肢間違えたんだろうか？

そんな考えが俺の頭の中をグルグルと回ってる間に王座の間に到着！

って早っ！

そして中にいたのは

「……………アリシア！ああアリシア……………ごめんなさい！こんな出来ない母親でごめんなさい！でも……………でもフエイトがあんなに可愛い子だったなんて思わなかったのよおおおおおおお！！ツ！？ゲホゴホゲホ！！ゴバァ！！」

鼻と口から血を噴き出すH E N T A I がいた。

とりあえず……………

失礼しました〜

俺は開いた扉をそのまま閉じた。

フェイトとアルフはその場に固まってたから俺はその場を後にする
為に二人の手を引く。

「待ちなさい!!」

呼び止められたような気もしたが幻聴だろう。

帰ったらメンテナンスを忍さんに頼もう。

でもあの人変に改造とかしようとするからな〜

「待ちなさいって言うてるでしょう!!」

ちっ、現実逃避失敗

「よく来たわね？歓迎するわ！！」

今更そんなカリスマオーラ出されてもな〜

いろいろぶち壊しだっ

第6話（前書き）

7 / 20 修正完了

第6話

「フェイト？あなたは人形なのよ！！所詮アリシアの代わりではないわ！！」

そう叫ぶプレシア

なかなかのカリスマオーラだ

一方俺達は

って言われてもね〜（笑）

さっきの見てたから全然説得力ないわwww

むしろイタイ。

って感じです。

フェイトなんてさっきから俺の後ろに隠れてしまって

「ベルさ〜ん！母さんが壊れちゃったよ〜〜！！」

と言いながら泣いてる。

プレシアにも聞こえてるんだろう。

さっきから口の端がヒクついてるのが見えた。

地味に痛い精神的ダメージだな……

アルフはオロオロするばかりで一向に解決する兆しは見えない。

とりあえず

俺帰って良い？

そう思ってフェイトを見ると

「.....すっすっ.....ひっく.....」

涙目で首を振ってきました。

誰か助けてええええええええええ！！

~~~~~

あの後なんとかみんなを落ち着ける事に成功した俺は改めてプレシアの自己紹介を聞く事になった。

「とりあえずはじめましてと言うべきかしら？私はプレシア・テスタロッサよ」

プレシアはそう言ってきた。

原作よりもかなり優しく感じる。

俺は喋れないのでとりあえず頷いておくと

「あなた……話せないの？」

そうプレシアが聞いてきた。

まあ別に隠す事でもないので頷くと

「信じられないわね……それほど高度な人工知能を積んでいながら話せないなんて……」

プレシアはそう言って驚いていた。

プレシアはしばらく何か考えていたが俺を見て何か思い詰めたような表情をしながらこう聞いてきた。

「…………ベルフェゴールと言ったわね……………あなたはアルハザードという場所で製造されたのではないの？」

アルハザード……………確かプレシアが目指していた死者蘇生の魔法や数々の禁断の魔法があるとされる伝説の場所

確かにもしアルハザードが存在するのであれば俺ほどの高性能なロボットがいても不思議ではない。

だが俺は元は人間だ。

記憶も中途半端にしか残っていないが多分人間だったんだ。

恐らく俺はテンプレみたいな感じで転生させられてここに来た可能性が一番高い。

したがってプレシアの言うアルハザードで俺は生まれた可能性は低いのである。

とりあえず俺はテンプレ・転生の事を伏せてプレシアに話そうとしたが喋れない事に気が付いた。

くそっ！肝心な時にいつもこれだ！

誰か！俺の声が聞こえる奴はいないのか！？

俺は通信回線を開いてそう言ってみると

《イエスサー》

フェイトの方からそんな声が聞こえてきた。

「バルディッシュ！？」

フェイトが金色の三角形のデバイス、バルディッシュを取り出す。

俺の声分かるのか！？

そうバルディッシュに問い掛けると

《ノープロBLEM》

そうバルディッシュは言ってくれた。

どうやらインテリジェントデバイスであるバルディッシュはレイジングハートと同じく俺と通信回線を繋ぐ事が出来るようで俺と会話出来るらしい。

しかし、その場にいたみんなは何故いきなりバルディッシュが喋り出したのか分からずに混乱しているようだ。

とりあえず俺はバルディッシュに俺の通訳を頼むと引き受けてくれた。

《……………と、いう訳だ》

俺はバルディッシュに通訳してもらいながらも俺の現在状況をプレシアに話した。

その時にフェイトが

「私以外の女の子……………ぐすっ」

って泣きかけたのでプレシアとアルフに隣の部屋に連れて行かれて

O H A N A S I された。

理不尽だ……………

しかし俺がアルハザードで生まれたのではない事を聞いてがっかりしていた。

そしてしばらく沈黙すると今度はフェイトの方を向いて

「フェイトにはつらい話かもしれないけどよく聞いて……………」

フェイトの出生の秘密であるプロジェクトFについて話始めた。

結果から言うとプレシアはフェイトの母親である事を認めた。

フェイトを自分の娘と認めたのだ。

そこまで行き着くにはかなりの苦難があった。

話の途中で真実を知ったフェイトが泣きそうになり、それを見たプレシアがフェイトの泣きそうな顔に萌えて口と鼻から血液を噴出した……………

今度はそれを見たフェイトが不安になって泣き出し、それを見たプレシアがフェイトの可愛さにさらに血液を噴出したり……………

俺とアルフがやっこの思いで元に戻したらそれが嬉しくなって笑顔になったフェイトを見てまたプレシアが血液を噴出する、という事があったのだ。

そのおかげで何故か親子の絆が深まった事をここに記しておこう。

しかし今までの無理な生活送ってきた事（研究しながらアリシアの写真を眺めて4日寝なかったり、フェイトの映像を見ていて5日食事を摂らなかつたり）が祟ってプレシアの体には不治の病が巣くってしまったって二人に残された時間はあまり多くなかつた。

つつかよく今まで生きてたな……………

それで.....じじいさんち..

第7話（前書き）

7 / 20 修正完了

## 第7話

「……………ああ……………フェイトおおおおお！！私が馬鹿だったわああああ！！もっと早くに気が付いていれば……………もっと長くいられたのにiiiiiiiiiiii！！ッ！？ゲホゴホッ！！ゲボア！！」

盛大に吐血するプレシア。

「母さん！？……………ぐすつ……………ベルさん！母さんを助けて！！」

泣きじゃくるフェイト。

「いったいどうすりやいいのさ！……………くっ……………せっかく……………せっかくフェイトが幸せになれるってのにさあ！！」

悔しさを滲ませるアルフ。

プレシアの激し過ぎる吐血さえなければ、なかなかの良い場面だとは思っただが……………

いったいどうすれば良いんだ？

プレシアの病気は確か原作だと不治の病でそんなに残された時間が無いからフェイトに急いでジュエルシードを集めるように仕向けたんだっけ？

だったら急いで治す方法を考えないと……………

そう思い悩む俺を尻目にプレシア達は親子の絆を深めてたのだが…

……

「可愛いわよフェイトおおおおお！！ッ！？ゴバァー！！」

吐血して倒れるプレシア

「母さ〜〜ん！！しっかりしてえええええ！！」

「プレシア！？しっかりしなよ！！気をしっかり持つんだよ！！」

騒ぐ二人……………って！？

プレシア倒れた！？

俺も急いでプレシアの下へ行くとプレシアは白目を剥いてピクリとも動かなかったのもう駄目か什么的な空気になったが……………

「……………ハッ！？アリシアとリニスが川の向こう側で『こっちに来ちゃダメ〜〜！！』って……………それで引き返して来たのだけど……………」

ナイスだアリシアにリニス！！

よくプレシアをそこで止めてくれた！！

てかよく渡らなかったな……………

ホッと俺達は胸を撫で下ろした。

ん？”アリシア”に”リニス”？

「アリシアああああ！！ママも今からそこに逝くわああああ！！  
ッ！？ゴバア！！」

予想通り吐血してまた倒れるプレシア

「母さ～～～ん！！逝かないでえええええ！！」

泣くフェイト

「なんでこうなってんのさああああああ！！」

叫ぶアルフ

予想通りとはいえカオスだ……………

俺はとりあえずこのままだと本当にプレシアが昇天してしまいそうなのでこの場を落ち着ける方法を先に考える事になった。

~~~~~

あの後なんとかプレシア達を宿める事に成功した俺は通訳であるバルディッシュをフェイトに借りたままフェイトとアルフを一度自室に戻してプレシアと二人きりで話し合っていた。

（フェイトを自室に戻したのはプレシアの萌え死による吐血を止めるため）

「……………とりあえず私は長くはないわ……………その事は私が一番分かってる……………だから……………」

フエイトの可愛い姿をこの目に焼き付かせておくのよおおおおお
おおおおおおおお！！！！痛ッ！？何故叩くのよ！？」

プレシアが涙目でそう訴えてくるが

《自重しろ、短い時間がさらに短くなるぞ》

俺はそう言うプレシアは何も言ってこなかった。

うなだれるプレシアを尻目に俺は必死に考える。

どうすればプレシアの病を癒やしてフエイトを笑顔にする事ができるのか？

それが俺の頭を悩ませる。

プレシアもさつき吐血した際に川にいたアリシアとリニスに諭されてこっち戻ってらしく、できる限りこちらの世界で生きていく事を

決心したらしいのだが……………

その理由がかなり不純だった。

なんでもしばらく会わない間に妙に大人びていたアリシアと世話係をしていたリニスにかなり怒られてしまい、いじめていた所をこっちに帰ってきた際にフェイトの自分を心配する年相応の姿を見て鼻から血を流しながら決心したらしい。

もつとアリシアやリニスに怒られてくれれば良かったのと思ったのは秘密である。

とにかく、今のこの現状を打破するにはどうすれば良いのか二人で考えているのである。

考え始めてもう3時間が経っているが一向に良い案が出てこない。

流石にいくら天才であるプレシアでも不治の病には頭を悩ませているようで

「……………」

さっきから自分の思考に入ってしまったって帰って来ない。

フェイトを溺愛する場面しか見ていなかったが、こういう所を見るとプレシアが天才であると言われても素直に頷けるのだが……………

「……………ZZZZZZ」

《は?》

よく見るとプレシアは目を開けたまま寝ていた。

《……………ブチッ!!…サー!?》

擬音を翻訳したバルディッシュが俺を呼んでいるが気にしない。

俺はストライククローを展開して……………

[illegible]

俺はそんなプレシアの悲鳴を無視して力を込めると太い枝が折れるような音が室内に響き渡った。

.....

悪は滅んだ。

「……勝手に殺さないでよ!!」

《生きていたか……》

プレシアは涙目で叫んでいるが気にしない事にした。

《だいたい大切な話し合いをしてる間に寝る奴があるか!!》

俺がそう言っただけで睨むとプレシアは

「だって仕方ないじゃない！フェイトの事を考えていたらフェイトが手招きで夢の世界に誘って来たのだから！！参加するしかないでしょ!!」

ドヤ顔でそう言った。

《ツインドライブシステム制限装置解除、各システムオールグリーン！ソニック・スマッシュ砲出力200%でスタンバイ!!……サ
ー!!?》

バルディッシュがまた何か言っているようだが気にしない。

胸部と腹部の装甲を解放して砲身を外気にさらす。

「待つて!! やめて!! 私が……私が悪かったわ!! だから……」

プレシアが命乞いを始めたのでシステムを強制終了してGNドライブの出力を下げていく。

ん？GNドライブ？

てか今ツインドライブって……

俺もしかしてGNドライブを二機も積んでんのか？

ならトランザム使えんじゃね？

しかもツインドライブならトランザムバースト使えんじゃね？

それならプレシアを……

いや駄目か、トランザムバーストで癒せるのは毒性の強いGN粒子での怪我とかだけだっけ？

ん？待てよ？

”革新した純粹種のイノベーター”なら不治の病も治す事が出来るんじゃないか？

現に劇場版の時の主人公もナノマシンを補助に使ったとはいえ治らないと言われていた脳細胞の損傷を治すなんて驚異的回復力を見せつけてたしな……………

ただ……

プレシアがその因子を持ってるかどうかなんだよな……

「……………？　どうしたの？　何か思いついたのかしら？」

急に黙り込んだ俺にプレシアが話しかけてきた。

なので俺はバルディッシュを通して先程考えていた事を話した。

もちろんそれがアニメである事を隠して……………

「……………なるほど……………そんな方法があつたなんて……………確かに一度その方法を試してみる価値はあるわね……………」

プレシアは真剣な表情で俺を見てそう言った。

「そのGNドライブ？　だったわね？　良ければ一度研究してみたい存

在ね……………」

プレシアは科学者としての顔でそう言っていたが

《残念だがそれは無理だ》

と俺が言っているとプレシアはフツと笑って

「拒否権は無しよ!!」

そう言っでどこからか出した鞭で俺を縛り付けた。

《何してんだああああああ!!》

俺がそう叫ぶと

「こんな面白そうな研究素材を見つけたんだもん!これだけは絶対に譲れないんだからああああああ!!」

プレシアもそう叫んできた。

《幼児退行すんなああああああ!!》

あまりに相談が長いので心配して見に来たフェイトが来るまでそんな叫び合いが続き、フェイトが涙目で

「ベルさんを分解しないで母さん！」

そう叫んだ事によりプレシアが諦めた。

ついでにもう遅い時間なので一晩この時の庭園に泊めてもらう事になったのだが……………

「……………んん……………ベルさあん……………」

フェイトに捕まり一晩中フェイトと手を繋ぐ事になってしまった。

その時に

「ハアハアハア……可愛いわああああ……可愛いわよフェイ……
……痛ッ……何するのよ……え……あ……ちよ……やめ……ア……ッ……」

H E N T A I を駆除した事もここに記しておこう。

本当に大丈夫かね……………

第8話（前書き）

7 / 20 修正完了

第8話

「準備終わったわ」

プレシアがそう言って俺を見る。

俺は頷く事で肯定を示した。

「それにしても行き当たりばったりな方法よね……………うまくいってくれると良いのだけれど……………」

プレシアはそう言って顔を曇らせたが

「……………弱気になっては駄目ね……………フェイトの為にも頑張らなくてはいけないもの！」

次瞬間には強い意志を瞳に宿していた。

母親は強い。

愛する子供の為ならなんでもできる。

そう誰かから聞いた事がある

今のプレシアを見ているとその言葉が偽りではないと実感できる。

やはりプレシアも母親なのだと感心した……………

「……………それに老いる事がないってのもあるものね！やっぱり年を取るとシワとか肌のお手入れも大変なもの！」

プレシアはそう言って目を輝かせた。

感心した俺の心を返せ……………

最後の最後まで期待を裏切らないプレシアだった。

~~~~~

「……………とりあえずはこれで良いのよね？」

今現在プレシアはカプセルの中に入ってもらっている。

その質問に俺は頷いて答えた。

何故プレシアがカプセルの中に入っているのかというと今回のプレシアの治療方法に関係があるのだ。その治療方法とはトランザムバーストを使用したプレシアのイノベーター化作戦の事である。

しかしいくらトランザムバーストを行っただとしてもすべてのGN粒

子がプレシアのところに行くはずもない。

もしかするとGN粒子が少なくてもイノベーターになれない可能性があった。

しかしプレシアはとんでもない天才である。

その事を俺から聞かされたプレシアがGN粒子を逃がさないような素材を自身の集めていたロストロギアの中から発見し、その素材を使ったカプセルを作り出したのだ。

それによりGN粒子をより多くプレシアの方に向けて散布できるようになったのである。

あとはそのカプセルの中にトランザムバースト状態のGN粒子を注いでいくだけなのだ。

「仕方がないとはいえ、フェイトが居ないというのは少し悲しいわね……………」

プレシアが寂しそうにそう言った。

そう、今この時の庭園にフェイトは居ない。

フェイトが何故この場に居ないのかというと……

もしプレシアがイノベーター化する事ができたとしたらプレシアの子供であるアリシアのクローンのフェイトもイノベーター化するかもしれないからだ。

確かにイノベーター化すれば寿命も延びるし従来の人間には無い力を有する事ができる。

しかし先程の会話の中でプレシアがイノベーターになれば”老いる事がない”と言っていた通り、イノベーター化したらその時の姿のまま一生を過ごさなくてはならなくなってしまうのだ。

まだ幼いフェイトをイノベーター化すれば本当の意味でエターナルロリータが完成してしまう。

それはまずいと考えた俺はその事をプレシアに伝えると

⋮      ↙  
└     ⋮

ストライクロー展開。

《しばらくお待ちください》

[illegible]

HE  
NTA  
Iの悲鳴が響き渡る。

「……………」

H E N T A I は滅んだ。

「勝手に殺さないでちょうだい!!」

ちっ、生きてたか

「とりあえず分かったわ、その時になったらフェイトに第97管理外世界に行ってもらうように言っておくわ」

という訳で今フェイトは居ない。

フェイト一人では不安なのでアルフも一緒に行ってもらった。

話を戻すか……………

という訳でプレシアイノベーター化作戦を開始する。

準備は良いか？

そんな意味を込めてプレシアを見る。

「……………ええ…やって頂戴！！」

プレシアも覚悟を決めたのかそう言った。

俺はカプセルに繋がっているGNドライブを包むような形をしたチユーブを外部に露出させたGNドライブに直結してGN粒子が漏れないようにする。

そして、ツインドライブの制限装置リミッターを外して出力をフルパワーまで引き上げた。

大量のGN粒子がプレシアの入っているカプセルの中に入っていく。

しかし……………

これではまだ足りない。

だからこそ

トランザム！！

俺は喋る事ができないがそう叫んでいた。

G Nドライブが甲高い駆動音を立て、体が赤く光輝いていく。

ツインドライブのトランザムシステムによって生み出される膨大な量のG N粒子がチューブに収まりきらず溢れ出す。

周りの風景がG N粒子でキラキラと輝きだした。

これって……………

トランザムバースト状態か！？

そう思った瞬間俺の意識は何か引き寄せられるかのように途切れた。

~~~~~

「あの……………」

そんな声が不意に聞こえてきた。

「…………ん…………ん？…………あれ？俺…………喋ってる！？」

俺は驚いて勢いよく上半身を起こして自分の体を見たがベルフェゴールのままだった。

そして、勢いよく体を起こしたのがいけなかったのか

「ひゃあ！」

そんな声が聞こえてきた。

「ん？」

俺はその声がした方を見ると金髪の少女が尻餅を付いていた。

「すまない！」

俺は立ち上がって少女を起こすと

「ありがとう！」

フェイトによく似た少女は俺にお礼を言った。

って…………まさか…………

「アリシア・テストロッサ？」

「そうだよ」

驚愕する俺をよそにフェイトのオリジナルであるアリシア・テストロッサは明るく答えたのだった。

嘘だろ…………

第9話（前書き）

7 / 20 修正完了

第9話

「……………という訳でここに来てしまったんだが……………」

俺はアリシアにここに来るまでの経緯を話した。

「ふゝん……………それじゃあ私はあなたにお礼を言わないとね？ママを助けてくれてありがとう！！」

話を聞き終えたアリシアは笑顔で俺にお礼の言葉を言ってくる。

「気にするな。俺もフェイトに幸せになってもらいたくてやっているだけなんだからな……………まあまだ成功してるかは分からないがな……………」

俺は照れくさくなって頭を掻きながらそう言った。

恐らくトランザムバースト状態の影響でこうやってアリシアと対話する事が出来ているがいずれ元の空間に戻るだろう。

だから、そうなる前に俺はアリシアに

「アリシア、元の体に戻らないか？」

そう言った。

「……………え？」

アリシアは驚いてた。

まあ当然だろう。

長い間自分は死んでいたのにいきなり生き返らないか？と聞かれたのと同じ事を言われたのだから……………

しかし俺には原作の知識がある為、アリシアの体をプレシアが大切に保存しているのを知っている。

だからこそ今この空間にいるアリシアに俺はそう言ったのだが……………

「そんなの無理だよ……………私は死んじゃってるし……………それに元に戻る体なんて……………」

アリシアはそう言って俯く。

「……………あるのではないのですか？」

不意に俺の後ろからそんな声が聞こえてきた。

「誰だ！？」

俺が振り向くと茶色っぽい髪にピンツと立った耳を生やした女性が優しい笑顔を見せながら立っていた。

「……………リニス……………」

アリシアはその女性の名前を口にした。

これがリニス……………プレシアの使い魔か……………

俺はそんな事を思いながらリニスを見た。

「ベルフェゴールさん？少しよろしいですか？」

リニスは微笑みながらそう言ってきた。

「あ、ああ……なんだ？」

突然俺に話を振ってきたので驚いたがリニスの真剣な表情を見た俺は話を先を促す。

「先程の会話の中でアリシアに”元の体に戻らないか？”と聞きましたね？」

リニスは真っ直ぐに俺を見ながら

「だったら……………」

アリシアの体がどこにあり、どういう状態なのかあなたは知ってるのではないのですか？しかもあなたの話を聞くかぎりではアリシアの体はそれほど損傷しておらず、しかも元に戻るほど良い状態であるという事では？……………というのが私が勝手に予想した事な

のですが……どうですか？」

リニスのその言葉にアリシアは驚いていた。

すげーよりニス。

完璧な推理だ……………

短い俺とアリシアの会話だけでよくそこまで推理できたもんだ。

感心してリニスを尊敬の眼差しで見ると

「こ、このくらい簡単に推理できますよ……………な、なんとって私はあのプレシアの使い魔だったんですからね!？」

見られるのが顔を赤らめながら恥ずかしそうにもじもじしながらリニスがそう言った。

正直言って…………可愛いわぁ…………

マジ癒される。

なにこのギャップ？

さっきの凜々しさどこ行った？

リニスが可愛い外見だからかなり栄える。

どこその閉鎖的な村の鉦を持った娘ならお持ち帰りiiiiiiiiii！
の状態になるぞ？

…………ベルさん帰ったらディバインバスターなの…………

ゾクウ！

背筋が！

いや今幻聴があ！

なんかマズツた気がする！！

危険を察知するためのセンサー類がさっきから警報を鳴らしっぱなしだぞ！

「……………あ、あの？…………ベルフェゴールさん？」

リニスが心配そうに俺を覗き込んでくるが今それどころじゃない！

頼むのは！

デイベインバスターだけはやめてくれ！

流石にあれを喰らったら壊れる！

ギャグ補正なんてものすら吹き飛ばせる予感がする！！

そんな感じで頭を抱えていると

ぎゅ！

「…………へ？」

なんか俺リニスに抱き締められてた。

そして

「何があつたかは分かりませんが…………大丈夫ですよ？私が側にいますから…………ね？」

リニスは俺を抱き締めながら笑顔でそう言った。

リニスさん…………俺を萌え死なせる気ですか？

しかも聞き方によってはプロポーズにも聞こえるよ……………

.....

ベルさん？スターライトブレイカーなの

.....

ぎや ああああああああああああああああああああ

「とりあえずアリシアの体はプレシアが完全な状態で保存してて戻ろうとすれば戻れるのですね？」

リニスが俺に確かめるように聞く。

「ああ…多分大丈夫だと思うぞ？それにこのフィールドの中ならそれも可能だと思うしな……………」

リニスの問いに俺はそう答えてアリシアを見ると

「じゃあ私は自分の体に戻ろうとすればいいのね？」

アリシアはそう言って俺を見る。

俺はそんなアリシアを頷いて答えた。

もうすぐこの空間が終了する。

その瞬間、アリシアにはトランザムバーストによって生じた大量のGN粒子を使って自分の体に戻るようになってなんとか頑張ってもらっ……

負担が大きいかもしれないがこればかりはアリシアに頑張ってもらうしかない。

そしてリニスには自分の体は無いのでGN粒子と一緒に俺の中に入ってもらい劇場版のティ○リアみたいに俺の中でオペレーターの役割を担ってもらう事に決まった。

俺もGNドライブ搭載型のガンダムだからできるはずだし、多分俺の中に空き容量があったので大丈夫なはず……………

これはこれでかなりアバウトなやり方だがこれしか方法だがやるしかない。

失敗すればアリシアとリニスはまたあの世に戻らなくてはならなくなる。

プレシアやフェイトの為にそれだけは絶対に嫌だ！

だからこそ失敗は許されない。

なんとしてもこの分の悪い賭けに勝たなくてはならない。

「よし！行くぞー！！」

俺は二人にそう言って激を飛ばす。

「うん！」

「はい！」

二人も覚悟を決めたのか俺を見て頷く。

リニスが俺に抱きつく……………

は？

「ちょ！リニス！なんで俺に抱きついてるんだ！？」

いきなりの出来事に俺は慌てるが

「そんな事を言われてもあなたと一緒にいないとあなたの中に入れないじゃないですか！！」

顔を赤らめ上目づかいのリニスがそう言い返してきた。

だから俺を萌え死なせる気ですかリニスさん！？

.....ベルさん.....フランクスシフトだよ.....

また幻聴があ！

「.....はあ.....本当に大丈夫かな.....」

そんなアリシアの呟きと共に俺の意識は薄れていった。

~~~~~

気が付くまだトランザムが続いていた。

しかもトランザムの限界までの時間はまだカウントダウンが始まったばかりだ。

あれは夢だったのだろうか………？

『夢なんかじゃないですよベルフェゴールさん？』

突然リニスの声が俺の中で響いた。

驚いた俺は自分の中に意識を集中してみると笑顔リニスのイメージが浮かんできた。

どうやら成功したようだ。

俺はトランザム状態を維持しつつリリスが無事であった事に安堵した。

という事はアリシアも……

『多分成功しているでしょう』

俺の考えが聞こえているのかリリスが答えてくれる。

……………ん？

なんか忘れてるような……………？

あ！

確かアリシアってなんかの液体の中に保存されてるんだっけ！？

『た、大変じゃないですか！急いでアリシアを助けないと！！』

俺はGN粒子をチューブからプレシアが入っているカプセルの中に最大出力で一気に叩き込んだ。

途中で

「ちょー！ベル……多い……………」

そんな声が聞こえてきたが気にしない。

その行為のおかげでトランザムの限界時間を大いに縮める事ができた。

しかしそれでもあと3分はトランザムが続く。

このままではアリシアが二度目の死を向かえてしまう。

そんな俺の焦りが通じたのか不意に体が軽くなる。

GNドライブに直接接続しているはずのチューブの突っ張りを感しない。

『ベルフェゴールさん！！チューブが外れてます！！』

そんなリニスの声が聞こえた。

何故チューブが外れたのか分からない……………

だが今はそんな事は関係ない！！

そのまま俺はアリシアのいる王座の間の裏側まで急ぐ。

速く！！

もっと速く!!

エナジーウィングを展開して今出せる最大の速度で時の庭園の中を飛ぶ。

そして

「ッ！ッッ！ッ！ッ！」

カプセルの中でアリシアがもがいていたのを発見した。

俺はストライククローを展開してカプセルに叩きつける。

派手な破砕音を立ててカプセルは簡単に割れて中の液体が流れ出した。

俺はストライククローでアリシアをそつと掴んでカプセルから助け出す。

するとアリシアは

「ゲホッゲホッ！あり……あり……がと……」

咳き込みながらお礼を言っていた。

とりあえず間に合って良かった……

アリシアが無事である事を確認した俺はホッとして体の力を抜く。

『本当に良かった……』

リニスも安心したようだ。

「……………ねえママはどこ？」

そのアリシアの一言で俺は固まった。

プレシアは大量のGN粒子と共にカプセルに閉じ込められたままだ。

あ あ あ あ あ あ あ ! !  
しま た あ あ あ あ あ あ あ あ あ あ あ

そんな慌てる俺を見たアリシアは不思議そうに首を傾げながら見ていた。

[illegible]

とりあえずプレシアを落ち着かせる為に叩いた。

「ママあああああああ！」

アリシアは泣きながらプレシアに抱き付く。

かなり良い場面だ。

『良かった…… 本当に良かった……』

リニスも涙を流しながら喜んでいた。

ちなみにプレシアは無事イノベーターになる事に成功した。

あの時に焦ってGN粒子を出力全開で叩き込んだのが功を奏したのかは分からないがとりあえずは成功して瞳を金色にする事ができる。

しかも不治の病と言われていた病気がゆっくりとだが治り始めていると聞かされた。

成功して本当に良かった………

「ねえベルさん？私もママみたいに目が金色になるんだけど？」

はい？

アリシアもイノベーター化？

嘘だろ？

第10話（前書き）

7 / 20 修正完了

## 第10話

「ベルさん？少し O H A N A S I があるの」

なのはが俺にそう言ってきた。

なんだか地雷を踏んだらしい。

あの奇跡の後、俺はプレシアとアリシア、そして俺の中にいるリスの三人で一緒にフェイトを迎えに行った訳なんだが……

そのフェイトのいた場所がなんと翠屋だった。

しかも今日は休日で学校はお休み。

すると当然なのはが翠屋でお手伝いしている訳で……

なんかフェイトと仲良くなってたんだ。

現在そのフェイトさんはアルフと一緒に翠屋のケーキに夢中になっており、こっちを見てない。

最悪だ……………

「ベルさん？ ユーノちゃんも一緒に O H A N A S I したいんだって あとお父さんとお兄ちゃんもなの」

..... オワタ o r z

ユーノはともかく戦闘民族高町家の親バカとシスコンも一緒に O  
H A N A S I するなんて.....

俺に明日はあるのか.....？

「..... ベル君？ 少しいいかい？」

ガシッという擬音とともに右肩を掴まれた。

「..... 俺からも O H A N A S I があるんだが？」

今度は左肩だ。

後ろを振り向かずともこの凄まじいで殺気分かる。

『ひい！』

中にいるリニスも悲鳴を上げている。

とりあえず俺は

バルディ~~~~シュ！！

《イエスサー》

リニスを頼んだぞおおおおおお！！

『え！？……………ひゃあ！』

俺はバルディッシュへの通信回線を開いてリニスを転送する。

じゃないとO H A N A S Iをなんの関係もないリニスが俺と一緒に受ける羽目になってしまう。

少し容量が大きいがバルディッシュなら大丈夫だろう。

《グッドラックベルフェゴール!!》

ありがとうバルディッシュ!!

そんなバルディッシュからの激励を受けて

「終わったかい?.....それじゃあ道場まで行こうか?」

俺はなのは達に道場へと連れていかれた。

~~~~~

.....生きてる.....

.....俺.....生きてるよ.....

なのはやユーノ、親バカにシスコンのO H A N A S Iを受け
て生きてるよ.....

生きてるって素晴らしい。

そう思うのは間違っているだろうか？

いや！

間違っていないはずだ！！

この生還にはそれだけの価値がある！！

俺はO H A N A S Iを耐えきつただのだ！！

そう思いながら必死にガッツポーズを取ろうとする体を必死に抑える。

それほどなのは達の O H A N A S I は苛烈を極めたのだ。

少くらしいテンションが上がっても構わないだろう。

そんな感じで一人舞い上がっていると

「……………という訳でお留守番お願いしますねベルさん？」

はい？

今なんと仰いましたか桃子さん？

舞い上がり過ぎてまったく話を聞いてなかった。

そんな俺を見ていた桃子さんはため息を吐きながら

「もう一度言いますからちゃんと聞いてくださいよベルさん？……
……今週末プレシアさん達を含めたみんなで温泉に行くのでお留守番お願いしますね？」

マジで？

俺留守番！？

俺は思わず自分を指差すと桃子さんは笑顔で頷いて

「本当はベルさんも一緒に連れて行きたかったのだけれど……輸送方法が思いつかなくて……ごめんなさいねベルさん？」

そう言ったのだった。

いや……輸送って……

桃子さん……俺荷物扱いですか……

まあ仕方がないよな……俺機械だもん……

俺はそう自分の中で折り合いを付けると頷いた。

「本当にごめんなさいね？……お土産を必ず買ってくるから楽しみにしてねベルさん？」

そのお土産は食べ物じゃない事だけは確かだな……

そう思いながらなのは達の方を見るとすでに楽しそうに話し合っている。

仲間外れな感じがして少し寂しかったがみんなが笑顔で話しているのを見て

助ける事ができて良かった。

そう思った。

~~~~~

「ベルさん？私達が居ない間に他の女の子を引っ掛けて来ちゃ駄目なの」

出発前になのはからそう言われたのだが何故だ？

そう思いながらちょうど切れてしまった蛍光灯を買いに出掛けたのだが……

「ベルさんだっ！！」

「こんにちはベルさん！」

「おーベルさん！今日はどうしたんだい？」

みんなが俺に声をかけてくる。

あんまり嬉しくはないが翠屋の悪面ロボットとしてちょっとした有名人の俺は良くも悪くもかなり目立つ。

あまり目立つような事はしたくないんだが……………

それでもかけられる声には会釈で返しておく。

そうすれば自然と俺に対する評価が上がり、俺をターゲットに翠屋に来る客が増えて収入が少しはUPするはずだ。

そんな事を考えながら買い物を済ませて帰っているいると

「……………て……………れか……………た……………け……………」

若干聞こえにくい誰かの声が聞こえた。

俺はセンサーを起動して声のする方角へ進むと

「……………助けて……………ひつく……………誰か助けてください……………」

そんな誰かの助けを求める声が聞こえてくる……………

俺はその声が聞こえてきた方へと走った。

本当なら空を飛んで行きたいが未確認飛行物体と間違われて自衛隊が来る可能性があったので地面を走る。

その助けを求める声はなのはグーノを見つけた林のあたりから聞こえていた。

そして背の高い草を掻き分けて中を進んで行くとそこには……………

車椅子から落ちて起き上がれずに泣いていた一人の少女がいた。

「ってまさか」八神はやて「！？

第11話（前書き）

7 / 21 修正完了

## 第11話

「ありがとうございます」

倒れていた少女を起こして車椅子に乗せると俺にお礼を言って頭を下げた。

俺は頷いて返事をする。

少女の話を聞いてみると気分転換に散歩していたら珍しい蝶を見つけたらしく、その蝶を追いかけているうちに林の奥に迷い込んでしまい、ちょうど車椅子の下にあった石に躓いて車椅子から落ちたらしいのだ。

「あの……………ベルさんですね？」

どこことなく関西弁な感じの口調で喋る少女の問いに俺は頷いて答える。

「本物や……………本物のベルさんや……………」

どうやら少女は俺を見て感動したようだ。

だが何故俺を見て感動しているのか分からない。

「私……今生でベルさんを見とるんや……」

少女はキラキラと光る目で俺を見ている。

それは例えるならば憧れの有名人に会ったみたいな感じた。

何故ここまで少女がこんな反応をするのか？

そんな考えが俺の頭の中をぐるぐると回っていたが……

「本物の翠屋の悪面ロボットや……一度翠屋に行ってみてみたか  
つたんや……」

そんな寂しいそんな女の言葉で何故あんなにも興奮していた理由を  
理解する事ができた。

この少女は俺を見たことが無いのだ。

俺の記憶が正しければ確かこの少女、おそらく”八神はやて”は今  
まですつと一人で生きてきた。

しかも足が不自由な為に今まで行きたい所に行ったり見たい物を自由に見たりする事が出来なかったのだ。

その為におそらく翠屋に行つて噂になつてゐる俺を見に行きたいと思つていたのだが、自分の足が不自由な為にそれを諦めていたのかもしれない。

そう思うと自然に彼女の頭を優しく撫でていた。

「ふえ！？ベルさん？」

彼女は俺の突然の行為に驚いていたが……

「……………ひつく……………ぐずつ……………うわあああああああ  
！！」

それは……………今まで抑えていたものを吐き出すかのような泣き方だった。

そしてしばらくの間、彼女は俺に抱き付いて泣いていた。

先程までこんな誰も来ないような林の中で一人で倒れていたのだ。

自分の足が動かず誰も来ないような状況で彼女はきつと恐怖を感じていたのかもしれない。

俺はそんな彼女が泣き止むまですつと頭を撫で続けた。

~~~~~

「へへ ありがとうなベルさん」

あの後はやてから自己紹介を受けて彼女の家まで車椅子を押している。

はやては終始笑顔で俺に話し掛けてきた。

それを俺は可能な限りジェスチャーや頷く事で答えていつている。

「それでな？……………あ……………ベルさん……………ここが私の家や……………」

そう言ったはやての声はとても寂しそうだった。

それを見た俺はなんだか放っておけなくなつて、気が付いたら……………

……………

「ありがとうベルさん 今日泊まっていってくれるなんて私嬉しい！」

はやての家に泊まる事になっていた。

何故？

~~~~~

「ベルさんが一緒に居てくれるなんて私は幸せ者や」

はやては笑顔でかなり嬉しそうだ。

その笑顔を見るだけで泊まったかいもあったものだ。

しかしなのは達に知られたらどうなるかだけは想像したくない……

……

多分……いや、必ず親バカとシスコンももれなく付いて来るだろう。

……ベルさん スターライトブレイカーなの ……

……ベルさん ……ファランクスシフトだよ？ ……

……ベルさん ……逃がさないから ……

……ベルフェゴール？ ……ロリコンって言葉知ってる？ ……

幻聴があああああああ！！

しかもなんか増えてるぞおおおおおおおおお！！？

そんな俺の様子に気が付かないはやては

「なんだか嬉しいわあ……こんな風に誰かと過ごせる日が来るなんて……今日はもう眠れへんかもしれんなあ」

幸せそうな表情を浮かべていた。

俺はそんなはやてを見ながら……………

絶対になのは達に見つかりませんように……………

なんて願っていた。

ちなみに今日の日付は6月3日だ。

ん？

なんか忘れているような………？

第12話（前書き）

7 / 21 修正完了

## 第12話

「闇の書の起動：確認しました」

「我ら闇の書の蒐集を行い、主を護る守護騎士にてございます」

「夜天の主の下に集いし雲」

「ヴォルケンリッター……何なりと命令を」

そう言つて真夜中の12時ぴつたりに現れて頭を下げる4人の男女

とても幻想的な場面だ。

そしてその4人が揃つて頭を上げて俺を見た瞬間

「「「化け物!?!」」」

って言われた。

うん。

泣いていいか俺?

「主の害となるものは全て排除する!!いくぞヴィータ!!」

そう言って剣を構えるピンク髪の女性

「分かった!遅れるなよシグナム!!」

そう答えるのは見た目は小さな女の子だが、構える武器がでかいハンマーであるので安心できない。

「サポートは任せて2人とも!」

金髪の女性はなにやら本を開いてそう言っている。

「……………下がれシャマル、守りは守護獣である俺に任せろ……………」

唯一男性である筋肉質な頭に獣耳がある男がそう言った。

全員が完全な戦闘体勢だ。

いや……………

俺が何したよ……………

さらに泣きたくなくなるような状況に俺は凹んでしまったがここははや  
ての寝室なので戦闘する訳にはいかない。

しかも肝心のはやては驚いて気絶してしまっている。

今この状況で気絶しているのは非常にまずい。

そう思っていると剣を持った女性……シグナムとハンマーを持った  
少女……ヴィータが自分の武器を振りかぶって襲いかかってきた。

とっさに俺は両腕のビームシールドを展開してその攻撃を受け止める。

……想像以上に重い攻撃だな……

しかし2人の武器ではビームシールドを破る事は出来なかった。

「くっ！固いな……」

シグナムは顔をしかめながら俺を睨む。

「どうすんだよシグナム！これじゃあ勝てないぞ！！」

ヴィータは油断無くハンマーを構えて俺を見る。

さてどうするか……

軽い衝撃が俺の体を揺らす。

気が付くと俺の胸から手が生えていた。

俺の中の危険察知用の警報が鳴り響く！  
アラート

そしてこんな言葉が俺の頭で響いた。

《非常事態発生！非常事態発生！機密情報漏洩の可能性あり！》

その警報に驚いた俺は後ろに控える金髪の女性……シャルを見る  
とその手に先ほど持っていた本とは違う本を持っており、その本の  
真っ白なページがゆっくりと１ページ分見たこともないような文字  
で埋まっていった。

やられた！

闇の書による”蒐集行使”だ……

なぜ機械である俺にそれが行使できたのかは分からないが、何かの情報を抜き取られたのだ。

しかも１ページ分も引き抜かれてしまった。

俺はビームシールドを展開したままシステムを素早くチェックした。

出力制限及びコントロールシステム

異常なし

各部動作システム

異常なし

センサーシステム

異常なし

火器管制コントロールシステム

異常なし

メモリー及びバックアップシステム

異常なし

あれ？

何も盗られてないぞ？

向こうも俺が平然としているのを見て

「蒐集に失敗したのかシャル!?」

「なにやってんだよシャル!!料理してんじゃないんだからしつかりしろよ!!」

「……………失敗したのか……………」

「……………ぐすん……………私何も悪くないもん……………ちゃんとやったよお……………ちゃんと１ページ分蒐集したよお……………」

みんなシャマルさんをで責めてた。

しかもシャマルさん涙目だ。

てかヴィータ酷い。

なんかかわいそうになってきた。

そんな風に考えてると

「っっっしっかりしろシャマル」っ

三人が声を揃えてシャマルにそう言った。

結果

「……………うわあああああああん！！みんながいじめるよおおおおお！！」

シャルさん大泣き。

そしてこっちに走ってきた。

こんな状況で構えてても仕方がないのでビームシールドを消したら

……………

「うええええええええええええん！！」

シャルさん何を思ったのか俺に抱き付いてきた！？

はい！？

なんでこっち来たんですか！？

あまりの事に向こうの三人も口を開けてポカンとしていた。

なんでこうなったんだ……………

泣き続けるシャルさんの頭を撫でながら俺はそう思っていた。

~~~~~

「……………分かったことが1つある。闇の書の主として守護騎士みんなの衣食住きっちり面倒みなあかんゆうことや。幸い住むところはあるし料理は得意や。みんなのお洋服買ってくるからサイズ測らせてな？」

それは意識を取り戻したはやてが俺の正体と安全性を全員に説明した後、ヴォルケンリッターのリーダーであるシグナムから闇の書についての説明を受けた直後のに言った言葉だった。

ヴォルケンリッター達は驚きの表情を浮かべはやてを見ている。

恐らくはこんな事を言う主は初めてなのだろう。

しかもヴォルケンリッターの本来の役割である蒐集行使を禁止したのだ。

シグナムは蒐集の必要性をはやてに説明するがはやてには蒐集によって完成したあとの強大な力なんてまったく興味を示さない。

それでも食い下がるシグナムにははやては

「……………せっかく家族が増えたのにその家族を犯罪者にはできないのや……………」

悲しそうにそう言ってシグナムを沈黙させた。

ちなみにその間の俺はというと……………

「改めて見るとかなりカッコイイなベルさんって！！なあなあ、どんな事できるの？」

「ベルさあ〜ん……………私ちゃんとみんなの役に立ててるよね？立ててるよねえ！？」

「……………」

残りのヴォルケンリッター達に囲まれてた。

てかなんか喋ってザフィーラ！

こんな感じで八神はやてにヴォルケンリッターという名の新しい家族が増えた。

ちなみに

「ちなみに今日は私の誕生日や！！」

「「「「え？」「」「」

「みんなのプレゼント待ってるで？」

「「「「マジで？」「」「」

こんなやり取りがはやてが寝る前にあり、ヴォルケンリッターと俺はプレゼント探しに朝早く家を出て行ったのはまた別のお話

第13話（前書き）

7 / 21 修正完了

第13話

「こんなプレゼントをもらえるなんて私は幸せ者や！」

どうやらはやては喜んでくれたみたいだ。

テーブルに並ぶのは50品ほどの様々なパーティー用の料理。

それもただの料理ではない。

プレゼントを用意できなかった俺とヴォルケンリッターのメンバー（シャルとザフィーラを除く）で作ったのだ。

今まで奮う機会が無かったが、俺は桃子さんから料理を翠屋に働きはじめた頃から学んでいた。

腕前は自惚れる訳では無いが桃子さんから合格をもらっただくらいだからかなり良いと自負している。

ちなみにシャルを料理に参加させなかったのはシャルの料理の腕を知っている者なら当然の措置だと言える。

ザフィーラにはシャルの監視と部屋の飾り付けを頼んだ。

しかしここまで用意するのは実に苦勞した。

真夜中なのでコンビニ以外の店が開いてなかった為、一晩でこれだけの料理の材料を集めるのは難しかったのだ。

なのでヴォルケンリッターのみんなにも探しに行き、採ってきてもらったのだが……………

「こんな凄い料理見たことない！あれなんて何を使ってるん？なんかエビとカニを足したようなのが見えるんやけど……………」

そう、探しに行かせたメンバーが悪かった。

俺はこの世界の海や山に行き、マグロやタイといった高級食材や今食べられる山菜やキノコをかき集めて来たのだが……………

「……………ベルフェゴール、食材はこれでよかったのか？」

そう言ったシグナムを筆頭にヴォルケンリッターが採ってきた食材が凄く……………いやかなりイロモノだった。

「ふつ、素晴らし過ぎて反応でんか。流石に”竜の肉”は手に入るのに苦労したぞ？」

そう言つて胸を張るシグナム

「へへ　しょぼいなシグナム？私は希少生物の”アングラーキングフィッシュ”だぜ？」

ヴィータは笑顔を俺に向けながらテーブルの上に体長1mくらいのエビとカニが混ざつたような不可思議な生き物を置いた。

「……………俺は果物だ……………安心しろ。そのままでも食べれるような物だけ持ってきた」

ザフィーラは色鮮やかな果物を腕いっぱい抱えてそう言ってくれた。

まあここまでは良かった。

得にザフィーラはGOODだ。

ちゃんとした物を持って来てくれたから……………

最大の問題は……………

「ふっふっふ、みんなそんなのじゃはやてちゃんは喜びませんよ？
私のは……………これです！！」

そう言つてシャルルが取り出したのは”うねうねとしている触手が
いっぱい生えた何か”だった。

「……………」

ヴォルケンスと俺はあまりの気味の悪さにガチで引いてしまった。

そう、問題とはこんな風にやらかしてくれたシャルルの事だ。

てかシャル……………はやてを殺す気か？

その後もシャルルはいろいろとやらかしてくれた。

例えば……………

シャマルの持ってきた食材？がいきなり暴れだしてシグナムとヴィー
ータがその触手に絡め捕られ危うく純潔を散らしそうになったり…

……………

なんとか集めた材料で料理を始めようとしたらその食材にこっそり
シャマルが自分の持ってきた謎の物体Xを混入しようとしたり……

……

やっこの思いで完成させた料理のソースにあの生物の体液をおおう
としたり……………

正直未知の食材で料理をする事よりもシャマルの行動を阻止する方
が疲れた。

本当に……………やめてくれシャマル……………

まあそのかいあってか料理の方はかなり出来が良かった。

味見に参加したヴォルケンズのみんなもOKを出してくれた。

そして今に至るのだが……………

果たして俺達の集めた食材で作った料理にはやては満足してくれるのか……………

「……………美味しい……………美味しいでみんな！本当にありがとう！」

はやては料理を一口食べて笑顔でそう言った。

その瞬間俺を含めたヴォルケンスは揃ってガッツポーズをとり、喜びを体で現した。

「なんや、みんな大袈裟やな」

そう言いながらはやては笑顔で料理を食べている。

だが

喜びあう俺達の耳に何か軽い金属が落ちる音が聞こえた。

音の方を見るとはやてが持っていたフォークを床に落としている。

「「「「^{はやて}主（）はやてちゃん（）！！」「」「」

慌てて俺達が駆け寄ると

「ふにやあああああ……体が熱い……熱くなってきた……」

はやてはそう言って服を脱ぎだした。

「「「わ~~~~~！！」「」「」

慌ててそれを止めるヴォルケンスの女性陣

俺でザフィーラは後ろを向いて見ないようにする。

だが………何故はやてはあんな風になったんだ？

味見した時には誰ひとりヴォルケンスはそんな事にはならなかったのに…………

そう思って首を捻っていると

「……………やっぱり”アレ”を入れたせいかなあ？」

そんな小さな声が俺とザフィーラに聞こえてきた。

ザフィーラの方を見るとザフィーラも俺を見ている。

ちょうどはやてをシグナムとヴィータが寝室へ運んで行ったので、振り返ると青ざめた顔をしたシャマルがいた。

「……………隠し味につて”アレ”の体液を混ぜたのがいけなかったのかなあ？」

シャマルは考え事をしているのか俺とザフィーラが後ろにいるのに気が付いていないようだ。

俺はもう一度ザフィーラの方を見るとザフィーラは頷いてきたのでストライククローを展開して……………

「え？ベルさん？なんでクローを展開してるんですか！？ちょー！ザ
フィーラ！？なんで私を拘束するんですか！？え！？あー！！やめ…
…！！」

朝早くからシャマルの悲鳴が八神家に響き渡る事となった。

このあと起きた事についてシャマルは一切喋らず、この日を境にキッチンまたは厨房には絶対に入ろうとはしなくなったという。

第14話（前書き）

7 / 21 修正完了

第14話

それは八神家から帰ってきた時の事だった。

「……………それでベルさん？私達になにか報告する事はないかな？
かな？」

雛見沢村に居そうな雰囲気なのはが正座をする俺を見下ろすようにそう言つと

「そうだね……………ちゃんと教えてくれないとね……………」

《サ、サー！？》

フェイトはバルディッシュをサイスフォームの状態で構える。

「……………ベルさんに付く悪い虫は消去しないと……………」

なにやら無表情でぶつぶつと黒い事を言うユーノ

『ベルフェゴールはロリコンなんですね?』

背中が冷えるような冷たい声でリニスが俺を非難する。

「なのはとの約束を守れんとはな……………これは少しO H A N A S Iをする必要があると俺は思っんだが……………どう思っ父さん?」

そう言って親バカに話を振るシスコン。

「ああ……………ちょうど俺もそう思っってたんだ……………」

二振りの小太刀を取り出しながら親バカがそう答えた。

この一連のやり取りが起きている場所は道場で処刑する為にはうってつけの場所だ。

死んだかな俺……………

俺の頭にはそんな考えが過ぎっていた。

「……………という訳でベルさんは有罪確定なの」

そのなのはの一言で俺の扱いが決まった。

なのははすでにBJを展開してRHを構えている。

フェイトなんてファランクスシフトの咏唱を始めていた。

さらにはユーノのチェーンバインドで身動きが取れない。

リニスはすでにバルディッシュの方に移動していてフェイトのファランクスシフトの制御に徹している。

親バカとシスコンはすでにスタンバイしている。

訂正

スクラップになるかもな俺…………

~~~~~

結論から言つと

「「「ベルさあ〜ん」「」」

俺に抱き着くのは達

『まったく…………私の事も忘れないでくださいね？』

俺の中で頬を赤く染め、上目づかいに見てくるイメージを出すリニス

俺は助かった。

だが助かった理由が……

「スターライト……」

「フォトンランサー……」

二人が大技を放とうとする瞬間に

「そんなにベルさんを盗られたくないなら先にベルさんを墮としちやえばいいのよ」

なんて桃子さんが言ったから

『「「「それ（なの）（だ）」」」』

親バカとシスコン以外全員がそう言って攻撃をやめたのだ。

「「え？」」

親バカとシスコンは困惑しているようだ。がなのは達は集まってなにやら相談をしている。

助かった。

そう思って救世主な桃子さんを見ると

「ベルさん？なのはをよろしくね？」

そう言ってニツコリ笑っていた。

ナニヲデスカ桃子サン？

道場には相談をするなのは達と困惑する親バカとシスコン、

「カオスだねママ」

「真剣な表情のフェイトもいいわねえ……………ハッ！カメラカメラ  
！！」

「ふふふ 将来が楽しみね」

そしてマイペースな家族とニッコリ笑顔の桃子さんがいる中で俺は一人

これはどう収めればいいんだろうか……………

そう思わずにはいらなかった。

決して現実逃避なんかじゃないからな!!

ちなみにアルフは付き合いきれないと言って一人ケーキを食べてたらしい。

そして今に至るのだが……

「……………こんな時にジュエルシードが見つかるなんて最悪なの……」

なのはそう言っただれ。

「そうだね……でもこれを終わらせたらベルさんと……へへ」

その後の事を想像したのかフェイトは頬を赤く染めながら俺の手を握る。

「あーずるいですよフェイトさん！……………だったら私も……………」

顔を真っ赤にしながらユーノが躊躇いがちに手を繋いでくる。

『二人とも大胆ですね……………まあベルフェゴールの中に入れる私ほどではありませんが……………しかし約束とはいえベルフェゴールの中に入れないのは厳しいですね……………』

リニス少し不満げにバルディッシュの中でそう言っていた。

「とりあえずフェイトを泣かしたらガブツといくからね！？」

ついでにアルフは俺を脅してきた。

俺の安息はどこに消えたのだろうか？

思わずそう思ってしまう。

だいたいジュエルシードの封印に俺も一緒に連れて行く理由が

「私達が居ないとベルさんが知らない女の子を引っ掛けるから一緒に行くの！」

なんてなのはが言うもんだからその場にいた全員一致で可決されて連れ出された。

俺はそんな事しようなんて思っていないのに……………

そう思っていると人気のない倉庫がいくつもある場所にやって来た。

こんなところにジュエルシールドが本当にあるのか？

俺はそう疑問に思ったがなのは達の話を書く限りではどっちらで探知したらしい。

うゝん本当にあるのかねえ…………

そう思いつつ辺りを見渡すと少し離れたところに

太陽光に反射する青い宝石が見えた。

あつたよ…………マジでか……

草むらの中に隠れるようにジュエルシールドが落ちていた。

なのは達はまだどうやって捜すか相談していたので俺は気が付かないようにそっと離れてジュエルシードの下へ向かった。

最近なのは達にやられてはっかりだから少しくらい驚かせてもいいだろう。

そんな気持ちで俺はジュエルシードを拾おうとした瞬間

突如ロックオンアラートが俺の中で鳴り響いた。

そして

爆発

気が付くと俺は額に強い衝撃を受けて吹き飛ばされ、俺の体は後ろにあった倉庫の壁を背中からぶち抜き凄まじい破碎音を立ててコン

テナに衝突し止まった。

「「「ベルさん！？」「」」

なのは達の悲鳴に近い声が聞こえた。

なのは達はきつと俺の方に近づこうとしたのだろう

足音が聞こえる。

だが

「全員動くな！時空管理局だ！」

そんな声と共になのは達の足音は止まった。

「全員武装解除してこちらの指示に従ってもらう………デバイス  
地面に置くんだ！」

恐らくこの声の主は武器を構えられているのだろう。

二回ほど地面に物を置く音が聞き取れた。

多分なのはとフェイトがデバイスを地面に置いたのだろう。

状況はかなりまずい。

俺は先程の攻撃によって生じた自身のダメージをチェックする。

ダメージチェック

出力制限及びコントロールシステム

異常なし

各部動作システム

異常なし

各センサーシステム

異常なし

火器管制コントロールシステム

異常なし

メモリー及びバックアップシステム

異常なし

各種兵装システム

異常あり

頭部ビームシールド損壊

使用不可

よし、吹っ飛ばされた割にはあまりダメージは無いな。

火花が散る音が額から聞こえているが供給していた電力をカットしたら収まった。

よしこれで……

「……………ロストログア不正所持の疑いで君達を拘束させてもらう！拒否権は無い！」

なのは達の下へ行こうとした瞬間にそんな声が聞こえてきた。

なのは達を拘束？

ふざけるな！！

いきなり攻撃してきたのはそっちじゃないか！！

そう思い体を起こすと

「その前にベルさんに攻撃した事をベルさんに謝って！」

なのはのそんな声が聞こえた。

なのは……………

そのなのはの言葉に俺は沸き上がっていた怒りが引いていくを感じた。

しかし

「何を馬鹿なことを……………何故謝らなければならないんだ？あれは見たことがない型だがロストログアを回収するための機械なんだろう？なら謝る必要性は無いな」

そんな冷たい言葉がなのはに返された。

この野郎……………

この声の主に対する怒りが再燃する。

「なんで！？なんでそんなに……………ひどい事が言えるの？ベルさんは……………ベルさんは！！」

どうやらなのは泣いているようだ。

いや、なのはだけでなくみんな泣いている声が俺の集音センサーを通じて聞こえてくる。

怒りだ

もう怒りしか感じない！

奴を……………殺す！

怒りに吞まれてそう思った瞬間

認証確認

非常用戦闘プログラム起動

プログラム名

EXAMシステム

目の前が赤く染まりEXAMの文字が視界の端に浮かび上がる。

そして

敵性ターゲット確認

” 時空管理局 ”

認証確認

排除開始

そんな短い言葉が俺の中で響き、俺は行動を開始した。

敵はすべて排除する。

そんな思考しかできなくなっている事にも気が付かずに……………

第15話（前書き）

7 / 21 修正完了

## 第15話

人気の無い倉庫群で突如響き渡る甲高い機械の駆動音

その音はまるで怒りの咆哮をあげているかのように聞こえる。

「な、なんだ!？」

その場にいた時空管理局局員の執務官 クロノ・ハラウンは困惑していた。

今回与えられた任務は簡単にこなせるはずのもの。

管理外世界に散らばったロストロギアの回収

ただそれだけ

今まで自分が管理局局員として行ってきた行動に疑問を持った事はなく、それどころか自分のする事……すなわち管理局の方針は間違っていないと胸を張って言えるほどに管理局を心酔し、管理局を絶対正義として見てきた。

今回の場合もそうだ。

ロストロギアの反応を感知し、その場所に観測用のサーチャーを放った際に現れたのは人型のロボットと数人の少女達、そしてオレンジ色の髪的女性だった。

サーチャーで調べて見ると少女達と女性から魔力反応があり、その手にデバイスを持っている事が判明。

そして現地の魔導師である可能性が示唆され、しばらく様子を見る事となり、様子を観察していると少女達と女性は集まってなにやら相談をしていたがロボットの方が少女達から離れて感知したロストロギアの方へ近づこうとしたので慌てて転送ポートに入り、ロストロギアを不正に確保しようとしたロボットに攻撃したのである。

そしてロボットの排除を確認すると管理局で作られたマニュアル通りにその場にいる者達の武装解除と拘束を行う。

途中で栗色の髪の少女がロボットに対して謝罪を求めたが不正にロストロギアを確保しようとする方が悪いし、だいたい意思を持たないロボットに対して謝るなんてナンセンスだ。

そう思って突き放すように言ったのだがそれを聞いた少女達が泣き出してしまった。

……………面倒な事になった。

もしかするとあのロボットはこの三人の少女の世話係かなにかを勤めるほどに近い存在だったのかもしれない。

多分この映像はサーチャーを通じてアースラの方にも流れているはずだ。

帰ったらエイミィや母さん……艦長の反応が恐ろしく怖いだろうな……

そんな事を頭の片隅で考えていた時の事だった。

突如として鳴り響いた機械音に嫌な予感が頭を過ぎる。

もしかすると何かとんでもない事をしてしまったのではないかと考えるがすでに行動してしまっているので引き返すことなんて出来ない。

S2Uを油断なく構えて周りを見ていると

突然、先程ロボットを吹き飛ばした倉庫の中から轟音が聞こえ、壁からは三本の鋭い爪を持つクローが飛び出してきた。

「キャ！」

驚いて思わずそんな悲鳴が出てしまった。

だが任務中にそんな悲鳴をあげては相手に舐められる。

そう思って壁を突き破ったクローを睨むと

あのロボットが吹き飛ばされた倉庫の中から金属同士が擦れるような重い音がした。

しかしかなり危険な事が起きる事だけは確かだ。

そう思った”私”は危険を回避する為に空に飛び上がった。

その瞬間

紅い閃光が突き抜けた。

突如として現れたその紅い閃光により先程まで自分がいたところが消し飛んだ。

それどころかその向こう側にあつた隣の倉庫を突き抜けて中にあつたコンテナなどを完全に破壊し尽くしてしまったのだ。

「……………なんて威力だ……………」

その力はまさしくロストログニア認定をするに相応しい危険なものだった。

そのあまりにも強力な力に僅かながらも恐怖を覚え、呆然としていた”私”の耳に重い金属製のなにかがゆっくりと歩く音があの紅い閃光が放たれた倉庫から聞こえてきた。

”私”にはその足音がまるで処刑執行人がゆっくりと地面を踏み締める音に聞こえたのはあながち間違いではないだろう。

そのゆっくりとした足音とともに倉庫から現れたのは……………

最初に”私”が攻撃したあのロボットだった。

しかも綺麗な青色だったセンサーと思われる両目は血の色を思わせる紅色に変わり”私”を見ている…………いや、睨みつけるという表現の方が正しいかもしれない…………

何故か背筋が冷たく感じ、嫌な汗が流れた。

”アレ”は戦ってはいけない、逆らってはならない。

”私”の本能はそう告げている。

逃げ出してしまいたい！

私の心はそう言ってしまったているのだ。

その理由は分からない。

とにかく今の”私”の手に負える存在じゃない事は確かだ。

「エイミィ！！至急増援を……」

”私”が覚えていたのはそこまでだった。

気が付くと私はあのロボットのクローに凄まじい力で体を捕まれて投げ飛ばされていた。

いつあのロボットが動いたのかも分からず混乱する”私”に見えたのは……

あの倉庫で聞こえた重い金属音を立てながら胸部と腹部の装甲を開放し、砲門をこちらに向けるロボットの姿だった。

「……………助け……て……」

身近に感じる死の恐怖からか”私”はそう呟いてしまう。

もう駄目だ……………

諦めかけたその瞬間

「紫電一閃!!」

そんな勇ましい女性の声が聞こえた瞬間、”私”を攻撃しようとしていたロボットが爆炎に包まれて体勢を崩した。

「え？」

”私”は訳が分からず混乱していると

「くっ！やはりこの程度ではダメージは与えられんか……………そのお前！あとは私達に任せて下がれ！！」

ピンク色の髪をポニーテールにした剣を持つ女性が”私”にそう言ってきた。

「なあシグナム？とりあえず私のアイゼンでぶっ叩けば元に戻るかもしれないぜ？」

そう言つて大きなハンマーを構える赤い服を着た女の子

「いやいやいや！ベルさんは精密機械だからその方法はまずいんじゃないかな？」

慌てて女の子を注意する金髪の女性

「……………とにかく今はベルフェゴールを止めるのが先だ……………」

落ち着いた様子でそう言う筋肉質の男性

「あなたは……………いったい……………」

”私”驚いて彼らにそう言つと

「「「我らは夜天の雲　ヴォルケンリッター！！主の恩人への恩  
を返す為に推参！！」」」

彼らはそう言つて己の武器を構えるのだつた。

第16話（前書き）

7 / 21 修正完了

## 第16話

「くっ、固い！」

シグナムはベルフェゴールの装甲固さに苦戦していた。

その手に持つ剣型のアームデバイス”レヴァンティン”のその切れ味をもってしてもその装甲は切り裂けない。

「下がれシグナム！！カートリッジロード！ラケーテンハンマー！！」

そんなシグナムと入れ代わりに突撃をかけるのはヴィータ

しかし

ヴィータの渾身の一撃は派手な金属同士がぶつかった音と火花を散

らただけでその装甲にはまったく効いた様子はなかった。

「おわあ！？ラケーテンハンマーが通用しねえーのかよ……………」

攻撃が弾かれたヴィータは直撃したはずの相手の体勢を僅かに崩しただけなのを確認して下がる。

しかし、不意に重い金属の擦れるような音がヴィータの耳に聞こえた。

「やばっ！」

慌ててその場を離れると赤い閃光がその空間を突き抜けていく。

「危なかった……………やっぱりベルさん暴走して私達が分かんないのかなあ……………」

ヴィータはそう言って落ち込むが

「……………来るぞ！」

そんなザフィーラの言葉に気持ちを入れ換えて迎撃した。

~~~~~

「…………少し聞きたい事があるんだけどいいかな？あ！私の名前はシャルよ？」

そう言つて金髪の女性…………シャルさんは話し掛けてきた。

「は、はい…………なんですか？」

ユーノちゃんが私達を代表して答える。

「あのロボット…………ベルさんんだけど…………なんであんな風になったのか知らないかな？」

シャルさんはできるだけ優しく笑顔でそう聞いてくる。

「えと…………実は…………」

ユーノちゃんが事情をシャルさんに話した。

その間にも暴走するベルさんと三人の戦いは続いている。

「………悔しいなあ……」

私とフェイトちゃんが同時にそう言った。

多分考えている事は同じなんだと思う。

私はレイジングハートを握り締める。

こんな時に私は無力だ。

暴走するベルさんを相手にあそこまで戦えるほどに私は強くはない

………

多分今あそこに入ればすぐに撃墜又は死ぬ事になるだろう。

それほどまでに暴走しているベルさんは凄まじいのだ。

あの人達の攻撃をまるですべて分かっているかのように最小限の動きで回避を行い、あの大きなクローを使って予想も出来ないような動きで攻撃を行っている。

さらにその胴体には照準・発射が短時間で行える砲撃を備えており、あの三人の攻撃を耐え切れる固い装甲まであるのだ。

今の私達では本気になったあのベルさんを止められるような力を持つてはいない……

そう思わせるような戦いが私達の目の前で行われている……

「……………フェイトちゃん……………」

「……………なのは……………」

私達は互いに見つめ合い

「……強くなりたい……」

そう二人で呟いた。

~~~~~

「くそっ！！シャルはまだか！？」

シグナムはイラついたようにそう言いながら剣を鞘に納めて

「カートリッジロード！飛竜一閃！！」

連結刃にしたレヴァンティンでベルフェゴールへ攻撃を行い爆煙がベルフェゴールを包み込むのだが……

「くう……………これもダメか……………」

ベルフェゴールは無傷で爆煙の中から現れる。

「もう待てない……………こうなったら……………アイゼン！ギガントフォルムだ！」

ヴィータがそう言うとアイゼンのハンマーの部分がヴィータの身の丈よりも大きな物に変わった。

「な！待てヴィータ！？それは流石にベルフェゴールでも耐え切れんぞ！」

ヴィータがなにをしようとするのか分かったのかシグナムは止めようとするが……………

「このままじゃベルさんは止まらない……………でも多分ベルさんだつて苦しいはずなんだ！！優しいベルさんならこんな事で大切な人を傷付けたく無いはずだ……………だから……………そうなる前に……………」

カートリッジロード！轟天爆砕！ギガントシュラーク！！」

ヴィータはカートリッジロードして魔力を高めたアイゼンを振りかぶりベルフェゴールへと突撃をかける。

それに対してベルフェゴールはクローを展開して迎え撃とうとするが

「やらせん！！縛れ！鋼の軛！」

ザフィーラが光の拘束条を幾本も生成しベルフェゴールの動きを止める。

ベルフェゴールはなんとか振りほどこうとするが外れない。

そして

「……………ごめんベルさん……………うあああああああああああ  
「……………」

ヴィータはアイゼンを振り抜いた。

~~~~~

「「「ベルさん！」「」」

私達はベルさんがあの大きなハンマーで殴られるのを見てしまった。

そして凄まじい音を立ててベルさんは吹き飛び……

地面に叩きつけられた。

そして辺りを包み込む砂埃りが晴れた瞬間に何かシステムがダウンするような音と砕けた装甲の隙間から火花が激しく飛び散っている。ベルさんが私の目に写った。

それは私にとって理解不能な光景であり、一番理解したくない光景だった。

「いやあああああ
あああああ！！」

気がつけばそう叫びながらベルさんの下に走る自分。

ありえない。

そんな感情が私の中で駆け巡る。

隣には涙を流しながら走るフェイトちゃんとユーノちゃんがいた。

多分私も泣いているのだろう。

視界がかなりぼやけている。

ボロボロになったベルさんに近づいていく。

完全に機能が停止したのかベルさんの装甲が灰色になり、壊れて漏電していた電気が止まった。

なんでベルさんがこんな目に合わなくちゃいけないんだろう……

そう思いながらベルさんに抱き着く。

しかしベルさんはそんな私をいつものように撫でてはくれない。

「……………うつく……………うあ……………ベルさん……」

涙が止まらない。

「……………あの……………ごめんなさい……………」

いつの間にか近くに来ていたのかあのベルさんを壊した子が私達に謝っていた。

本当なら怒りたいところだけど、あの時この子が言っていた事を思い出してしまつて怒れなかった……………

恐らくあの優しいベルさんならそう思っていた事がありありと思い

浮かぶからだ。

それでも何も感じないかと言われればそれは違う……

そんなピリピリとした空気が辺りを包む中……

『お取り込み中のところすみませんが、少しお話を伺ってもよろしいでしょうか？』

そんな言葉とともに何も無い空間にいきなりモニターが現れて緑色の髪的女性が現れたのだった。

第17話（前書き）

7 / 21 修正完了

第17話

「……………32〜83までの回路は!？」

「駄目ね……………反応が無いわ……………」

ここは時の庭園

大破して動かなくなったベルフェゴールがここに収容され月村忍とプレシア・テストロッサにより修理を受けている。

緊急事態なので忍にはベルフェゴールを救う為に魔法の事を教えている。

「なんでこんな事になってるのよ!？ベルさんは未知の技術で作られてるからメンテナンスが精一杯だったのに……………」

そう愚痴りつつも作業する手を忍は休めない。

「確かにそうね……………私も専門分野では無いからどこをどうしていいのかわからないわ……………」

プレシアもそう言いつつもモニター画面を食い入るように見つめてベルフェゴールのシステムの破損箇所を調べている。

「せめて……破損している箇所が分かれば良いのだけど……」

忍は破損した装甲を強制排除して内部の構造を確認していく。

「……フレームには損傷が見られないわ……破損したパーツを組み替えればなんとかなるかも……」

その言葉を聞いたプレシアは

「ならいいパーツがあるわ……これなんてどうかしら？」

そう言っでデバイスの余剰パーツを忍に見せた。

「……見たこと無いわね……とりあえずそのパーツの特徴とか本来用いる用途とか教えてもらえるかしら？」

忍はプレシアに出されたパーツを見る。

「ええ、分かったわ……まずこれが……」

ベルフェゴールを修復する作業は続く……

~~~~~

「ご足労ありがとうございます。ようこそアースラへ」

リンディ・ハラウンと名乗る女性にそう笑顔で言われて迎え入れられるのは達とヴォルケンリッター

全員が複雑な顔をしている。

それもそのはず、そもその原因を作ったのは管理局側でありその謝罪すらまだ受けていないのだ。

これで何も思わない方がどうかしてる。

しかしどうしていいのかわからないので、とりあえず私達は管理局側がどう出るか様子を見る事にしたのだが………

「……………まずは……………申し訳ありませんでした」

最初に管理局側から聞かされたのはそんな謝罪からだった。

「あのロボット……………ベルフェゴールでしたね？こちらのミスとはいえ……………本当に申し訳ありませんでした」

そう言つて頭を下げるリンディ

私達は沈黙したまま話を聞く。

「……………つきましてはこちらから技術者を派遣して修理のお手伝いを行いたいと思つているのですが……………いかがでしょうか？」

私達としてはそれは嬉しい申し出だった。

何たつてベルさんは未知の技術で出来ていているからプレシア達ですら修理に苦戦しているらしいのだ。

私やユーノちゃんにフェイトちゃんは互いに顔を見合わせてその提案を受けようとしたのだが……………

『お断りいたします』

そう言ったのはバルディッシュの中にいるリニスだった。

「…………理由を聞かせていただいてもよろしいでしょうか？」

リンディは笑顔を崩さないままそう聞いてくる。

『それでは話させてもらいます』

バルディッシュからリニスがどこか冷たい感じのする口調で話始めた。

『…………まず始めにあなた達管理局が信用できない事からです。最新鋭の技術を詰め込んだ機密情報の固まりであるベルフェゴールをあなた方管理局に見せる事になれば、それは技術漏洩に繋がります…………あなた方には前科がありますからね…………』

リニスはそう言って話をきる。

するとリンディは首を傾げて

「その前科とは？身に覚えがありませんが……………」  
と聞き返してきた。

するとリニスはおもむろに話し始める。

「……………でしようね……………何せあなた方は巧妙に罠を張り巡らして証拠を消していましたからね……………あの”ヒュードラ暴走事故”はね……………」

その言葉を聞いた瞬間にリンディは眉間にシワを寄せ

「……………”ヒュードラ暴走事故”？」

とリニスに聞き返してくる。

その反応を待っていたかのようにリニスは話しを続ける。

「……………個人開発の次元航行エネルギー駆動炉”ヒュードラ”使用実験の失敗……………それは起きてしまうのが当たり前の事故だった……………何故ならその実験を行う際に管理局が介入し、安全管理をわざと行わずに放置して事故を起こしたのですから……………」

リニスは悲しげにそう語る。

しかしリンディは反論する。

「ちょっと待ってください！そんな話はどの報告にも書いてありま

せんよ！それにそんな事を今言われてもその話がこちらの協力を断った事とはなんの関係があるというのですか？」

それを聞いたリニスは

「……………それがあるんですよ……………しかも断るに値する証拠がこの船にすでにありますから……………」

そう言つてリンディの反論を退ける。

「……………リンディ艦長？この船の動力炉には新しい動力炉が採用されているようですが……………この動力炉がヒュードラによく似ている……………いえ、まったく同じ物である事は知りませんよね……………しかも開発されていたヒュードラよりも劣化したコピーが使われているのを……………」

それを聞いたリンディは露骨に顔をしかめる。

どうやらリニスの言いたい事がリンディには分かったようだ。

「……………もう分かったようですね？普通そんな事故を起こした装置が使われる事なんてありません……………つまりは管理局が盗んだ訳ですよ……………私の主、当時担当主任だった”プレシア・テストロッサ

”の技術をね……………」

そのリニスの話に誰もが沈黙していた。

そんな中リニスは話し続ける。

「……………そうした事故が起きれば当然責任問題が発生しますよね？安全管理を怠らせたのは管理局なのに担当主任だったからという理由でプレシアは左遷させられました……………裁判を何度起こしても裁判機関は管理局の管轄内……………すなわちそれは何度訴訟しようとも管理局が揉み消してしまう為にプレシアに勝利は訪れないという事です……………その為プレシアは荒れました……………身も心もボロボロになり、管理局という組織を憎むようになってしまっていた……………そんな時でしたよ……………彼……………ベルフェゴールが現れたのは……………」

ベルフェゴールの事が出てきた瞬間にリニスの口調が急に柔らかいものに変わった。

「彼のおかげでプレシアは変わりました……………私の知る限りプレシアが笑顔を見せた瞬間を見たことが無かったのに……………彼はいつも簡単にそれを成し遂げたのです……………そんな恩人をあなた方管理局に任せる事はできませんね」

リニスはそう言って話を締め括る。

誰もが沈黙していた。

それだけリニスの言葉に説得力があった。

「……………そうだな、私も同意見だ」

沈黙の中そう言ったのはシグナムだった。

「…………シグナム？」

ヴィータはいきなりそう言ったシグナムを不安そうに見つめている。  
いやヴィータだけでなくシャルやザフィーラもシグナムを見ていた。

そんな中、意を決したようにシグナムは語り始める。

あの日

ベルフェゴールが起こしてくれた奇跡を……………



第18話（前書き）

7 / 21 修正完了

## 第18話

「……………管理局のあなた方ならば”闇の書”という言葉には聞き覚えがあるはずだろう……………」

シグナムはリンディに向かってそう質問する。

「ッ！……………ええ……………知っているわ……………」

リンディは突然のシグナムの質問に若干顔をしかめながらも答える。

そのリンディの反応に若干の不安を感じつつもシグナムは

「……………ならば……………私達ヴォルケンリッターは闇の書と

その主を守る為に存在する人格プログラムという事は……知っているか？」

リンディにそう聞いた。

「なっ！？あなた達が！？」

リンディはシグナムの言った事の意味を理解し愕然とする。

それもそのはず、闇の書とはその特性から”禁断の魔道書”と称されており、時空管理局では一級搜索物として手配されている。

しかも本自体を破壊しても別世界に転生・再生し、何度でも蘇る魔器であり封印・破壊は不可能と言われているのである。

その闇の書とその主を守る存在がこのアースラに乗艦しているのだ。

焦らない方がおかしい。

一方なのは達は何の話をしているのか分からず首を傾げていた。

「……………何の目的でこの艦に？」

リンディは警戒しつつシグナムに話を進めさせる。

しかしシグナムはそんなリンディの反応に対して特に構えた様子もなく

「……………そう構えないでも大丈夫だ。別に私達は戦いに来た訳じゃない……………信頼出来ないのならデバイスを待機状態にしてもいい……」

……とりあえず話させてもらうぞ?」

そうリンディに言って確認を取る。

「……………分かりました……………話を進めてください……………」

そう言いつつもリンディは警戒を解かない。

それを見たシグナムはため息を吐きながらも話し始めた。

~~~~~

「……………闇の書を完成させた後どうなるか? そんなの決まってるじゃん! 完成したらはやてはギガすげえ力を手に入れんだよベルさん!」

偶然居間からヴィータのそんな声が聞こえてきた。

「急にどうしたんだヴィータ、ベルフェゴール? そんな話をして…

……」

私は何故二人がそんな話をしているのか気になり二人に聞いてみると

「いやさ、ベルさんが闇の書を完成させたらどうなるのかって聞いてきたからさ……」

ヴィータはそう言うとベルフェゴールの肩に腰掛ける。

『そうなのか？』

ベルフェゴールはヴィータが落ちないように支えてあげながらも筆談でそう聞いてくる。

「……ふむ……確かにそうだが……それがどうかしたのか？……
……ついでにヴィータはベルフェゴールから降りろ」

私は騎士として自覚が足りないヴィータを睨みつつそう答える。

「いやだね！私はベルさんの肩がお気に入りなんだ！」

ヴィータはそう言ってベルフェゴールの頭に抱き着く。

「まったく！ベルフェゴールが困るだろうが！！それにヴィータ、お前はベルカの騎士なのだぞ？そんな子供みたいな真似をするな！！」

私は駄々をこねるヴィータを引きはがそうと手を伸ばす。

しかしベルフェゴールが私の肩を軽く叩いてそれを止めた。

「まったく……ヴィータに甘いなベルフェゴールは……」

そう言いつつ先ほどの会話を振り返ってみる。

闇の書を完成させたら強大な力を手に入れる事ができる。

それは間違いない。

しかし……

妙な胸騒ぎがする。

何故だ？

確かに今までの主は闇の書を完成させて力を手に入れ……

……？

何かがおかしい……

何故だ？

何故今までの主が”闇の書を完成させた後の記憶が無い”のだ？

まったく言っていないほどその時の記憶が無い。

これは明らかにおかしい……

………本当に今までの主は闇の書を完成させた後に強大な力を手に入れたのか？

「……………ヴィータ……………」

私は段々自分の考えている事が恐ろしくなり

「……………お前は今までの主が書を完成させた後の事を覚えて
えているか？」

絶るような思いでヴィータに聞いた。

「何言つてんだよシグナム……………どうしたんだよ？」

ヴィータは最初こそ笑いながらそう言っていたのだがさつきとは違う私の様子を見て不審に思ったのかそう聞いてくる。

「頼むヴィータ……………答えてくれ……………」

心に余裕がなくなってきた私はそのヴィータの言動にイライラしながら聞く。

「な、なんだよいきなり……………ちょっと待てよ……………」

……………ん？……………あれ？……………なあシグナム……………」

段々と青ざめていくヴィータを見ながら私はやはり……………と感じていた。

「……………気が付かなかったわ……………」

「俺もだ……………」

あの後主をベルフェゴールに任せてシャルやザフィーラにも聞いてみたが二人とも覚えてはいなかった。

何故完成後の事を誰も覚えていないのだろうか？

それは私達だけでなく、主はやてにいずれ訪れるとても重要な出来事を記憶していないという事になる。

その為に私達は疑問に思ってしまう。

本当に闇の書を完成させると強大な力を得る事ができるのかと……

……

「……………なあシグナム、管理人格は覚えてるのかな？」

痛いほどの沈黙の中ヴィータが不意にそう言った。

管理人格……………確かに彼女ならば何か知っているのかもしれない。

しかし彼女を出現させるには闇の書を400ページまで埋めなくてはならない。

主からは蒐集行為は禁じられている。

いったいどうすれば……………

「……………みんなどうしたん？そんな顔をして……………私に隠し事
せんで話してほしいなあ……………」

不意にそんな声が聞こえた。

振り返るとベルフェゴールに車椅子を押された主はやてが不機嫌な
表情を浮かべながらそこにいた。

「……………主^{はやく}！？」

私達はいき나りの事で驚いてしまった。

どうやら今の話を聞いていたようだ。

ならば……………

「……………主はやて…………我らヴォルケンリッターに蒐集行為の許可をいただきたい」

「『シグナム！？』」

他の者達が驚いているようだが今回ばかりはしかたがない。

恐らく管理人格以外に完成後の事は覚えていない可能性があるのだ。ならば確かめなければならない。

もしかすると完成後に主はやての身に何らかの危険が及ぶ可能性がある。

それだけは避けなければならない。

まだ年端もいかない少女である主を危険な目に合わせる訳にはいかないのだ。

そんな思いで私はそう言ったのだが……

「駄目や！絶対に駄目！人に迷惑かけるような事は絶対に駄目や！……………それに前にも言ったけどみんなにはそんな犯罪みたいな事してほしくないんよ……………」

主はやては悲しそうな表情を浮かべながらそう言っ
て私の意見を却下した。

「しかし主はやて!」

「駄目なものは駄目や!」

反論しようとする私の言葉を主はやては遮る。

だが今回だけは私は下がる訳にはいかない。

何せこれには主はやての事が関わっているのだから……

そう思っ
てさらなる反論をしようと構えると

主はやての前にベルフェゴールが立っていた。

「……………
退けベルフェゴール! 私は今主はやてと話をしているのだ!」

私は少し声を荒くしてベルフェゴールに殺気を飛ばす。

しかし、ベルフェゴールは主はやての前から動こうとしない。

「……………
退けと言っているのが聞こえないのか!」

私はついカッとなって大きな声を出してしまい、その声に主はやて

がビクツと怯えたような表情になったのが見えた。

しかしベルフェゴールはそんな私に臆した様子もなく、音を立ててクローをゆっくりと展開して主はやてを守るように立ちはだかる。

「……………いいだろう……………そちらがその気ならこっちもやらせてもらうぞ！」

私はレヴァンティンを起動してBJを身に纏う。

しかし……………

「なっ！？くっ卑怯だぞベルフェゴール！！」

BJを纏った瞬間にベルフェゴールがクローをセツトアップし終わったばかりで動けない私に向かって伸ばし、私は身動きが取れなくなる。

ベルフェゴールの卑怯な行為に怒りを隠しきれずに睨みつけていると何を思ったのか、私はベルフェゴールのクローによって奴の目の前まで引き寄せられると一枚の紙を見せられた。

『一つだけ蒐集しなくてもその管理人格に会えるかもしれない方法がある』

その文字を見た私は目を見開きベルフェゴールを凝視した。

私のその反応を見たベルフェゴールはクローを開いて私を解放し大きく頷いた。

「……………本当なんだな？本当に出来るんだな？」

一日という短い間ではあるがこれまでのベルフェゴールの行動を見ていて信頼してはいるのだが、どうしても確かめたくなりそう言うのとベルフェゴールはまた大きく頷く。

「それで！？その方法ってのは？」

紙に書かれた内容を読んだのだろう、ヴィータがベルフェゴールに聞いている。

ベルフェゴールは新たな紙にボールペンで何かを書きはじめる。

シャマルやザフィーラも興味津々のようで身を乗り出すようにベルフェゴールの下に集まる。

主はやてもすでにベルフェゴールが書いている紙を見ようとしている。

そして書き終わったのかベルフェゴールはその紙を主はやてに渡す。

全員でその紙を覗き込み主はやてが読み上げた。

「トランザムバーストの使用による特殊空間の形成、その空間で管理人格との対話を行う……………ってなにベルさん？」

私達は混乱した。

第19話（前書き）

7 / 21 修正完了

第19話

「つまりベルさんの話をまとめると……ベルさんのシステムの中にはTRANZAMっちゅうのがあって、そのシステムをうまく使えば闇の書の管理人格とも話せるかもしれん……って事なんかな？」

主はやての分かりやすい説明に頷くベルフェゴール。

ベルフェゴールにそんなシステムがあつたなんて……正直驚きだ。

「流石ベルさんだな！ギガすげえよ！！」

ヴィータは目を輝かせながらベルフェゴールを見る。

「確かにそんな事が出来るなんて驚きだわ」

シヤマルも驚きを隠せない様子だ。

「……………」

ザフィーラはなんか喋ってくれ……………

「まあとにかく出来るならすぐにでもやってもらいたいのだが……」

私がそう言つとベルフェゴールははやてを見る。

そう、このトランザムには弊害が一つある。

それはイノベーター化である。

イノベーターは人類の革新した存在なのだがイノベーターとなった瞬間からその姿のまま生きる事になるのだ。

つまり主はやてにイノベーターとなる素質があれば主はやてはエタールロリータになる可能性があるのだが……

「私の事は気にせんでええよ！それに私も知りたいんや！」

主はやてはそう言つてベルフェゴールを見る。

ベルフェゴールは主はやての意思を尊重したのか頷くと

ベルフェゴールはその体から甲高い駆動音を放ち始めて身体を赤く発光し始めた。

そして大量の緑色の粒子が辺りに満ちていく。

「これが……トランザム……」

そんな私の眩きとともに意識が薄れていった。

「……………ム……………ナム……………シグナム!!」

私を呼ぶ声が聞こえる。

「……………ん……………んん?……………」

目を開けるとそこは不思議な空間だった。

その真っ白な空間はどこまでも広がっており、向こう側が見えない。

「ここがベルフェゴールの言っていた空間なのか……………」

驚く私の視線の先に倒れたままの主はやてとみんながいた。

「主はやて!みんな!」

私は急いでみんなの下に駆け寄ると

「大丈夫だ、みな異常は無い」

後ろからそう声をかけられる。

振り返るとそこには銀髪の女性がいた。

「フッ……久しぶりだな烈火の将？」

闇の書の管理人格は私にそう言ったのだった。

~~~~~

「……話はだいたい分かりました」

管理人格は私達の話聞いて頷いた。

「それで……どうなん？」

主はやては管理人格に問い掛ける。

まあそれは自身に関わる事なので当然ではあるのだが管理人格は表情を曇らせている。

「……………どうなんだよ！答えてくれよ！」

ヴィータは痺れを切らしたのか管理人格に詰め寄って聞く。

それでも管理人格は答えようとはしない。

「……………何故答えてくれないのだ？主はやてからの質問なんだぞ？」

私がそう言って説得しようとするが管理人格は何も言わない。

「……………なんで答えてくれないのかしら……………」

シャルは不安げに管理人格を見ながらそう言っている。

「……………」

そしてザフィーラ……………なんか喋ってくれ……………

このままでは話が進まない。

全員がそう思っている時だった。

「……………話してやったらどうなんだ？」

その声はちょうど私達の後ろから聞こえてきた。

声の感じからして若い男のようだ。

私達は主はやてを守る為に構えたまま振り返るとそこには……………

「みんなの前で話したのは初めてだな……………まあそんなに構えな  
いでくれ」

そう言って両手をあげるベルフェゴールの姿があった。

「ベルフェゴール……なのか？」

みんなを代表して私が聞いてみるとベルフェゴールは大きく頷きながら

「ああ、俺だ」

そう言った。

「……………すっげー！！ベルさん喋れたんだ！！ギガすげえよベルさん！！」

沈黙を破ったのはそんなヴィータの声だった。

ヴィータはかなり興奮してベルフェゴールに走って行き抱き着いた。

「……………って、ズルイでヴィータ私も抱き着きたいんや！！」

そう言って主はやてもベルフェゴールに抱き着く。

「じゃあ私も……………」

シャルもそう言ってベルフェゴールの下に行こうとしていたが

「お前は自重しろシャル！」

それは私が阻止した。

「あゝシグナム……………これはいったいどういう事なんだ？」

状況が分かっていない管理人格は主はやたとヴィータに抱き着かれ  
ているベルフェゴールを見て私に質問してくる。

「……………今から説明する……………」

なんだか一気に疲れたような気がするのは気のせいだろうか……………

「……………ご愁傷様だな……………」

ザフィーラ、今そう言われるとお前を斬りたくなるからやめろ……………

……………というか初めての発言で空気読めないのはどうかと思っつぞ？

「…………説明ありがとう、だいたい理解できた」

管理人格…………いや、リインフォースは私に礼を言った。

何故リインフォースという名前で管理人格を呼んでいるのかという  
と…………

「管理人格というのは呼びにくくないか？はやて、名前が無いのなら君が名付けたらどうだろうか？君が彼女の主なんだろう？」

とベルフェゴールが言った事により主はやてより、管理人格は祝福の風 リインフォースという名前を授かったのだった。

その時リインフォースは初めて授かった自分の名前に戸惑っていた。  
しかしその目には嬉し涙が浮かんでいたのが見えたのは、本人の名誉の為には黙っておこう。

「ならば話してもらいたい、今までの主がどうなったのかを……………」  
そのベルフェゴールの声には真剣な雰囲気を感じられる。

その声を聞いたリインフォースは私達を見回し諦めたような表情を浮かべて語り始めた。

今までの主達が闇の書を完成させた後の事を……………

「そ、そんな……………嘘だよな……………嘘だっって言ってくれよリインフォース!!」

それは話を聞き終えた後のヴィータの心の叫びだった。

闇の書を完成させる事によって得られると言われていた強大な力は無く、あるのは辺りを破壊しつくす暴走のみ。

しかもその暴走の時に闇の書の主は取り込まれて死ぬまで魔力を吸い尽くされるのだ。

…………… いったい私達は何をしていたのだろうか……………

主の為に闇の書を完成させ、完成するまでの間主を守る。

その為に存在するのが守護騎士なのだ。

全ては主の為に

そう思い今まで蒐集してきた私達はいつたいたんだろうか？

そう思えるほど私達は打ちのめされてしまった。

しかもリインフォースの話を聞く限りでは主はやての足が動かないのも闇の書が強制的に主はやてのリンカーコアから魔力を吸収しているからなのだという

それは私達の存在が主はやての治癒の邪魔をしているという事になるのだ。

「……………私達が存在する意味はないじゃないか……………」

私はついポツリとそんな言葉を呟いた。

そんな私の頬に強い衝撃を感じ、破裂音に似た音が私の耳に聞こえる。

それは音の割にはあまり力の籠っていないビンタだった。

「そんな事無い！！そんな事無いで！！シグナムやみんなは私の家族や！！誰がなんと言おうと私の家族なんや！！……………やから……………やからそんな事言わんでほしい……………お願いやから……………」

主はやては泣きながら懇願してくる。

「主はやて……………」

私は叩かれた頬を撫でながら主はやてを見ると今だ泣いている。

私はいったい何をしているのだろうか……………

私は主はやてのなんだ？

私は主はやての家族じゃなかったのか？

あの日、主はやてはなんと言った？

私達を家族だと……………

そう言ったではないか……………

なんでそんな大切な事を忘れてたいたのだろうか……………

私はヴォルケンリッターのメンバーを見回すとみんなは私を見て頷く。

「我ら夜天の主の下に集いし騎士!!」

「主ある限り我らの魂尽きることなし!!」

「この身に命ある限り、我らは御身の下にあり!!」

「我が主………夜天の王………主はやての名の下に!!」

声を揃えて私達は宣言する。

この心優しい主とともにいつまでも歩む事を………

「……………みんな……………ありがとう……………ありがとう……………」

主はやては泣きながら私達にそう言っ  
て抱きしめてくれた。

私達はなんて素晴らしい主に仕える事ができたのだろうか……………

そんな思いがわたしの心を満たし、自然と涙がこぼれる。

私だけでなくみんなが涙を流している。

リインフォースも嬉しそうにしていた。

しかし

そんな中ただ一人（一機？）だけ別の事を考えていた。

「……………」夜天の王”？……………闇の王ではなく？」

そのベルフェゴールの声は感動していた私達の耳にも届いた。

「どういう事だベルフェゴール？」

私はベルフェゴールの言った事の意味が分からずに聞き返すと

「おかしいとは思わなかったのか？」

ベルフェゴールは私達にそう言ってくる。

「何かあるのかベルさん？」

ヴィータは私達の気持ちを代弁してそう言った。

するとベルフェゴールは首を傾げながら

「いや……………」

はやては”闇の書”の主なのにヴォルケンリッターのみんなははやての事を”夜天の王”と呼んでいるのが気になってな……………」

そう言つて考え込む。

その言葉に私達は驚いた。

確かにそうだ。

主はやては闇の書の主なのに私達は主はやての事を”夜天の王”と無意識に呼んでいたのだ。

そういえば最初に闇の書が起動した時に私達はなんと言つた？

確か……………」

『夜天の主の下に集いし雲』

そう言っただ。

ならばそれはおかしい。

普通ならば闇の王と言っはずなのだが夜天と言っ理由が分からない。

私達は新たな謎に再び首を傾げると

「それならば簡単に説明できますよ？……………何せ闇の書の本当の名前は”夜天の書”ですからね」

リインフォースが何気なくそう言っ事で一発で解決できたのだが

……………

「……………なんで話さなかつた（んだ）（の）！！」「……………」

ベルフェゴール以外の全員がリインフォースに怒鳴ったのは仕方がないと思う。

「ひゃううううう！！そんなに怒らなくてもいいじゃないですか  
く！」

リインフォースは涙目でベルフェゴールに抱き着いていた。

「……………なんでベルさんに抱き着いてんのか教えて欲しいなあ  
リインフォース？」

主はやての顔が怖い。

「そうだな……………場合によってはアイゼンの頑固な汚れにしてやる  
よ」

ヴィータが怖い。

「あー多少怪我しても大丈夫ですよ？……………最低でも精神崩壊  
しても大丈夫ですから……………ふふふ……………」

シャマルが怖い。

……………いつから私達ヴォルケンリッターはこんなイロモノが  
揃ってしまったのだろうか……………ついでに主も



「……………つまり何度も夜天の書への改変を行った結果、夜天の書にバグが生じてしまつてその為に闇の書と呼ばれるような機能ができてしまつたって事なんやな？」

また主はやてが分かりやすくまとめる。

「……………はい……………そうです主……………グスッ」

リインフォースは何故か泣きながら正座して主はやての質問に答える。

まあそこはあまり気にしないようにしよう。

だが何故書が主はやてに害を成すのか知る事ができた。

つまりはそのバグをなんとかしなくては主はやてを救い、私達が主はやてとともに過ごす事はできないのだ。

「なら私の主としての特権みたいなのでバグの部分だけ排除できんへんの？」

主はやてはリインフォースにそう聞くが

「やれるかもしれませんが難しいですね……………その為にもまず蒐集して書を完成させなくてはなりません」

リインフォースはそう言つて首を振る。

やはり蒐集して書を完成させる必要があるのか……………

そう思い、再び私が主はやてにこの場で蒐集の許可を取ろうとすると

「……………蒐集するのはリンカーコアならなんでもいいのか？」

ベルフェゴールがリインフォースにそう聞いていた。

何故このような質問をしたのか理由が分からなかったのかリインフォースはしばらく首を捻っていたのだが

「……………大丈夫だと私は思いますが……………」

そう答えた。

その答えを聞いたベルフェゴールは大きく頷いて

「ならばその問題は解決できるかもしれない」

そう言ったのだった。

その時の主はやてやみんなの顔は今でも忘れられないだろう。

みんな口を開けたまま固まっていたからだ。

しばらくの沈黙の後、確かめるようにリインフォースが

「それは……………本当なのですか？」

と震える声でベルフェゴールに聞いてみるとベルフェゴールは頷いて答える。

それはまさに長い悪夢から目覚めたような感覚だった。

「まあ……………その為には少しやらなければならない事があるのだがな……………方法的には擬似的なリンカーコアを蒐集してもらったが……………まああの人なら大丈夫だろうクローンも作れたんだし……………」

ベルフェゴールはそう言っつて肩を竦めるのだがその方法は私達にとつてそれは起死回生の一手なのだ。

どうにもならなかったこの状況をひっくり返してくれたベルフェゴールはまさしく主はやてや私達の恩人……………救世主である。

「『『『『我ら夜天に集いし雲　ヴォルケンリッター！主の恩人であるあなたにも変わらぬ忠誠を！！』』』』」

リインフォースを含めた私達はベルフェゴールに向かって膝を着き、頭を垂れた。

するとベルフェゴールは苦笑しながら

「そういう堅苦しいのは無しでいい、今まで通り友人としてよろしく頼むよ」

そう言つて私達に手を差し延べる。

その時私は思った。

こんなに器が大きいのだから人を引き付けるのだらうなと

そしてそのままその特殊な空間はゆっくりと消え去った。

私達に希望という光を残して……

~~~~~

「……………という訳だ。だから闇の書の本当の名前は夜天の書であり、主はやてにはなんの罪も無いという訳だ」

シグナムは話を終える。

その話を聞いていたリンディはシグナムに質問する。

「……………一つお聞きしますが今回の起動において蒐集行為は行っていないのですね？」

「いや、最初の起動した時にベルフェゴールに驚いて蒐集行為によって無力化しようとしたから一回だけだな」

それを聞いたリンディはため息を一つして目を閉じる。

その胸に何を思っているのかは分からない。

だが閉じていた目を開くと真剣な表情でシグナムに

「……………そのバグさえ無ければもう二度と闇の書の悲劇は繰り返す事は無いのですね？」

そう聞いた。

シグナムは頷くと

「ああ、それは間違いない。あと闇の書ではなく夜天の書だ」

そう言って訂正した。

リンディはその訂正に頷いて

「そうですか……………ならこれより私達管理局はあなた方ヴォルケンリッター及び夜天の書の主とともに夜天の書のバグ排除の補助及び監視を行います」

そう宣言したのだった。

第20話（前書き）

7 / 21 修正完了

第20話

「……………ここ……………は……………?」

目を開けると俺は何もない真っ白な空間に一人漂っていた。

「……………なんで俺はこんな所にいるんだ?」

俺は自分の体の状態を確認しながらそう呟いた。

体はいつもと同じく変わった所は見られない。

それどころか調子が良くなっているように感じる。

「俺はいつたい何をしていたんだ?……………最後に記憶しているのは……………確か……………EXAMシステムを起動させた時だよな?」

周りを見渡すと白い空間がずっと奥まで続いている。

「……………なんで俺の中にEXAMシステムなんてものが搭載されていたんだ?……………あんな強力で不安定なシステムを搭載しているなんて……………くっ!!……………そもそも俺はなんの為に存在しているんだ!?」

それはこの世界で活動し始めてずっと俺が疑問に思っていた事だった。

これだけの強力な兵器を搭載しているMSの自分がなのは達の世界に何の為に存在しているのか…………

この世界において俺ベルフェゴールという存在はあまりに異質な存在モノである。

下手に俺が戦えば死者が出ることはまず間違いない。

しかも俺という存在はなのは達の世界では質量兵器と呼ばれる忌み嫌われた存在でもある。

何故俺をMSが飛び交い互いに武器を構え合うような戦場に送り込まなかったのか…………

その理由を知りたかった…………

「……………教えてあげようか兄さん？……………いや……………
……………”Type-ZERO”？」

「誰だ！？」

振り返るとそこには……………

「久しぶりだね兄さん……………実に5年ぶりの再会だよ……………」

青と白を基調とした細身のガンダムがそこにはいた。

「……………お前は……………誰だ？」

俺の事を兄と呼ぶそのガンダムに見覚えは無く、警戒しながらそう
言つと

「ふむ……………やはり私に関するメモリーが消去^{デリート}されていたか……………
……………今バックアップを送信してあげるからデータを復元するとい
い」

そのガンダムは俺に何かのデータを送ってきた。

最初は何かの罾かと思っていたが、開かない事には何も分からなかった。だったので思い切って開いてみる事にした。

データ開封

名称

”エクストリームガンダム”

EXTREME GUNDAM

形式番号 不明

所属 不明

開発 不明

生産形態 不明

頭頂高 不明

全備重量 不明

出力 不明

推力 不明

武装 ビームライフル

ビームサーベル

シールド

木星の衛星に遺されていた”地球再現用データベース”内で開発された機体で、本機は力の象徴とも言える”ガンダム”を模倣して設計された存在。

そして人工知能であるe x -（イクス）が創りだそうとしている”完全で理想的な宇宙”における秩序の調律者となるべくして建造された物である。

”人工知能 e x -（イクス）”

エクストリームガンダムを制御する人工知能。

人類が滅びた太陽系で、木星の衛星に遺されていた”地球再現用データベース”を管理していたが長年の時を得て進化し、自我を有す

る事ができた存在。

” Type - ZERO ”

人工知能 e x - (イクス) のプロトタイプとして造られた人工知能。

試作型の人工知能でありながらその性能は e x - (イクス) とあまり変わらない。

しかし試作型である為珍しい機能が多く搭載されており、特に珍しい機能として人間の感情を理解させようとする試みが行われた際に感情機能を搭載した事が上げられる。

その結果、 Type - ZERO は人間に非常に近い感情を有する事に成功した。

なんだこれ……………

Type - ZERO?

人工知能？

エクストリームガンダム？

ex - (イクス)？

俺は試作型の人工知能？

そんな馬鹿な……………

俺の元は人間のはずだ……………

人間のはずなんだぞ？

達の悪い夢に決まってる。

こんな……………

俺が……………

人間じゃないなんて……………

「兄さんは昔からその感情機能のせいでひどく人間らしいところがあつたからね…………… 今回の介入でメモリーに何らかのエラーが発生していてもおかしくはない。…………… もっとも…………… 今回の介入はある意味事故に近かつたからね…………… 今の兄さんは自分の事を”人間”だと思っているんじゃないかい？…………… まったく、人間の考えることは愚かしい…………… いくら平穩を望むからといって元々の私達の世界だけでなく可能性の数だけ存在する平行世界の管理まで任せるなんて…………… どうかしているよ」

e x - (イクス) は肩を竦めながらそう言う。

俺には信じられなかった。

そんな事、認めたくなかった。

俺がそんな存在だなんて……

「そんなの嘘だ!!俺は……俺はあああああ!!」

気が付けばそう叫んでいた。

それを見たex - (イクス)は

「…………ふむ…………エラーの状態が酷いようだね…………ならば今の兄さんには私の話は聴き入れられないか…………ならば兄さん…………バックアップが出来上がるまでの間しばらくその世界で過ごすといい…………」

そう言つて俺に背を向けて遠ざかり始めた。

「なっ!?!?待てex - (イクス)!!」

俺は追い付こうと走るが逆に遠ざかっていく。

「待っていて兄さん、必ずバックアップを完成させてみせる……………」
そして必ず迎えに行くよ……………」

そんなe x -（イクス）の声を最後に俺の意識は再び薄れていった……………」

第21話（前書き）

7 / 21 修正完了

第21話

起動確認・・・・・・・・

ダメージチェック・・・・・・・・

出力制限及びコントロール・・・・・・・・

出力87%まで低下

フルパワーでの活動不可

トランザム使用不可

動作システム・・・・・・・・

補助パーツ及び代用パーツ使用により異常無し

ミリタリーモードでの活動は15分までなら可能

各センサーシステム

異常なし

火器管制コントロールシステム

異常なし

メモリー及びバックアップシステム

異常なし

各種兵装システム

頭部ビームシールド換装

新装備・頭部陽電子リフレクター

ソニック・スマッシュ砲損傷により出力制限あり

出力75%に低下

胴体部VPS装甲破損

代用装甲の存在を確認

材質・・・・・・・・

チタニウム合金を確認

その他の装甲に異常無し

スリープモード解除

だいぶ性能が落ちたな……………

体を起こすとそこは何かの工房の台の上だった。

周りを見るといつもメンテナンスをしてくれる月村 忍とプレシア
がソファアの上で眠っていた。

そしてその周りには大量の資料が散らばっている。

恐らくこの二人が俺の修理をしてくれたのだらう。

ありがたい事だ……………”人間でもない”俺の為にこんなことをしてくれるなんてな……………

自分で自分を壊したくなる……………

……………なんなんだよ……………こんな……………こんな考え方俺らしくもない……………

気落ちしたまま二人に近くにあった毛布をかけて部屋を出る。

部屋を出て少し歩くと見覚えのある場所に出る。

そこはアリシアが保存されていた王座の間の裏側だった。

つまり、ここは時の庭園だ……………

どうやら俺を直す為に管理局側には行かずこっちに運んだらしい。

そんな事をして無駄なものにな……………

どうせバックアップが完成すればe x - (イクス)

が俺を迎えに来るはずなのに……………

つらい……………

泣きたい……………

泣いてこのつらさを涙で流してしまいたい。

しかし機械である俺は泣けない。

人間みたいに涙を流す事はできない……………

その事実が俺を苦しめる。

” T y p e - Z E R O ”

それが俺の正式名称

試作型の人工知能……………

そしてe x - （イクス）とともに世界を管理する存在。

.....俺は.....

どうすればいいんだ.....

そんな思いを胸に抱えたまま俺は歩き続けた。

くるしい

いたい

つらい

このすべての感情はすべて感情機能によって生じたただのプログラムだなんて信じたくない……………

だがex - (イクス) からもらったデータによりそれは明らかだ。

あのデータは正確で恐らく偽りの無いものだという事は何故か信じられる。

あの真っ白な空間での会話のあと立ち去り際に言ったあの一言……

……

あの一言にはex - (イクス) のかなり寂しそうな感情が感じられた。

やはりたった二人？ (二機？) しか存在しない兄弟を違う世界に置くのはつらいのかもしれない。

ex - (イクス) はどこか自分を抑えている風にも感じられたしな

……………

俺の帰るべき場所やはりex - (イクス) の隣なのかもしれない

な
.....

.....だが本当にそれでいいのか？

ここまで来てなのは達の事を放置するなんて
.....

それで本当に満足できるのか？

そんな考えが俺の中を駆け巡る。

俺の答えとしては……………

……………NOだ

俺には彼女達をそのままにして帰ってしまうような無責任な真似はできない。

ならば自然と答えは出てくる。

” なのは達を助けてから e x - (イクス) とともに帰る ”

これが俺の今出せる最上級の答えだ。

これから闇の書……………いや” 夜天の書 ” のことがある。

これからまた忙しくなりそうだ……………

しかしそれほど悲観していない。

さあ、もう少し仕事をしよう。

その為にもまずはみんなに食事が必要だ。

そう思いながら俺は厨房へと進んで行く。

最初の頃より軽くなった”心”とともに……………

第22話（前書き）

7 / 21 修正完了

第22話

「……………ごめんなさい!!」

それは朝食を準備し終えた頃のことだった。

そう頭を下げて謝っているのは管理局の執務官だという少女 クロ
ノ・ハラオウン

「いきなりごめんなさいね？クロノがどうしてもって聞かなくて……
……………それでは私からも管理局の代表としてベルフェゴール
さんに謝罪を……………本当に申し訳ありませんでした」

その隣には苦笑いを浮かべるながらクロノを見る管理局所属の次元
航行艦アースラの艦長でありクロノの母親でもあるというリンディ・
ハラオウンが謝罪しながら頭を下げる。

……………それで？

それだけの為にここに来たのか？

うーん……………別になのは達に謝ったんなら別にいいし……………

別に気にしてなかった俺はそんな風に考えていたのだが

「……………ううう……………」

クロノが涙目で小さく呻いていた。

『まあ……………朝飯食べてくか？』

俺はそう書いた紙をクロノに見せてテーブルに誘う。

「え？え！？」

クロノは混乱しているようだが食べ始めれば落ち着いてくるだろう。

リンディにも首を振って合図すると

「あら それじゃあいいただきますね」

そう言つてテーブルに着く。

「え？ちよつと……………」

クロノはいまだに混乱しているのかすでに席に着いていたなのは達を見回す。

ちなみにヴォルケンリッター達ははやての下に戻っている為今ここにはいない。

とりあえずクロノを落ち着かせる為に俺はクロノの開いた口の中に無理矢理ご飯を突っ込んだ。

「はぐう！？……………もぐもぐ……………あ、美味しい……………」

クロノも最初こそ驚いたようだがご飯を咀嚼して素直な感想を言う。
作った側としてそんな感想がもらえてなんだか嬉しくなった俺はクロノの頭を撫でながら次の食事を口に運ぶ。

「はむ……………もぐもぐ……………」

それを若干頬を赤くしながら食べるクロノ。

うん

なのは達の視線がなんか痛い。

「……………後でスターライトブレイカーなの」

「……………私もフランクシフトの練習したいな……………」

「……………ベルさんは騙されてるだけなんだよ……………ふふ
五寸釘って便利だね」

『生粋のロリコンってキモいですよね？』

みんなの言葉が怖い……………特にユーノ……………五寸釘って……………

「……………へへ……………なんだが恥ずかしいけど嬉しいな」

クロノは頬を赤くしながらも期待を込めた上目づかいでそう言う。

この場面で言いますかあなた……………

よく周りの人に空気読めないって言われませんか？

そんな事を考える俺に殺気に近いものが……………てかぶっちゃけ殺気が向けられる。

そんな俺を尻目に美味しそうに食事を進めるリンディ

時々タイタズラっぱく横目でこっちを見るのが少しイラッとする。

「あ、あの………そ、その………」

そっちに気を取られてたら顔を真っ赤にしたクロノが上目づかいに催促してきた。

まあ悪く………ないか……

この場面だけを見ればなんか和む

多分後で俺がスクラップになるのは止められんと思うし………

なら今の内に癒されておきますか………

そう思いながらクロノの頭を撫でながら食べさせてあげると

「はううう……………」

顔を真っ赤にし、恥ずかしがりながらも満面の笑みを浮かべクロノは俺の差し出した料理を食べた。

しかも撫でられやすくする為に頭を俺に近づけてる。

何この可愛い生き物？

本当にあの時に俺を攻撃した奴と同一人物なのか？

そんな俺の疑問とともに食事は進む。

顔を赤くしながら俺から食べさせてもらっているクロノとそれを面白そうに見るリンディ、そしてなにやら黒過ぎるオーラを身に纏ったなのは達とともに……………

これって死亡フラグな気がするのは俺だけなのか？

そんな心配をしながら……

第23話（前書き）

7 / 21 修正完了

第23話

黒いバンがいきなり急ブレーキをかけて止まる

そして、その中から黒服のいかにも怪しげな連中が出てきて俺の数m先にいた二人の少女を囲んだ。

「ちょっと離しなさいよ!」

「助けて!」

二人の少女はそう叫び、助けを呼ぶが黒服達はそのまま少女達をバンの中に運び込み勢いよくその扉を閉めてバンを発進させた。

今俺人さらいの現場に出くわしました。

なんだか厄介事の予感です。

じゃなくて追いかけないと！！

最近修理もある程度終わって出力90%のフルパワーで活動できる
ようにようやくなった。

いまだにソニック・スマッシュ砲は修理中だがそれ以外の機能はト
ランザムを除いて概ねオールグリーンだ。

そんな俺の動作機能の確認をかねて桃子さんからのお願いで町に買
い物に来てたのに目の前でなのは達と同じくらいの少女が黒いバン
に乗ったいかにも怪しげな男達に連れ去られたのだ。

その中の2、3人の鼻息が妙に荒かった。

高感度集音機能に興奮したような息遣いが聞こえてきたのだ。

あれはもしかするとペドかもしれない。

だとするとあの二人の少女の純潔が危ない！！

急いで追跡しなくては！！

俺は空を飛ばずに走った。

（国家権力や自衛隊のお世話にならないようにする為に）

隣の車道を走っているスポーツカーと同じくらいの速度で……………

なんだか周りの視線が痛いながらもあの二人の少女の純潔の為に！

急げよ俺！！

~~~~~

という訳でやってきました山奥の廃工場

てかなんでこんなところに都合よくあるんだよ……………

そんなツツコミを入れたい気持ちをぐつと抑えて工場へ隠れながら  
近づくと入口に見張りが二人

……………慣れてるな……………

周囲の確認の仕方や銃器の構え方はどこかの特殊部隊のようだ。

正面突破は危険だな……………

いや、俺は大丈夫だが連れ去られた二人が危険に晒される可能性がある。

そういう意味で危険だと思ったんだが………って俺誰に説明してんだ？

まあいいか………それよりも今はどうやって二人を助けるかな………

………

………待てよ………確かプレシアがおふざけで俺に搭載したあれが使えるかもしれない………試してみるか………

「はあ………つまらねえなあ………」

見張りをしている男のうちの一人がそう言って構えていた銃を下ろす。

「おいおい！油断すんなよ！………いつあの”御神の剣士”が来るか分からないんだぞ？交代の時までは集中切らすなよ！」

もう一人がそう言って注意するが男は

「へ！」御神の剣士”なんてもんが存在するわけ無いだろ？ただの噂さ、だいたい重火器を持った部隊と互角の人間なんて存在するはずないだろうが」

そう言つて鼻で笑う。

しかし男は笑つた事をすぐに後悔した。

「がふう！？」

目の前の自分を注意していた男がいきなりそんな声をあげて倒れたのだ。

「な、なんだ！？」

男は銃を構えて警戒するが周りには誰もいない。

不意に肉を強く打つ音が聞こえた。

気が付くと後頭部に強い痛みを感じて地面に倒れていた。

そして薄れていく意識の中で最後に見たのは何も無い空間に光る青い二つの目だった。

……… なんとかうまくいったな………

プレシアが俺に搭載した新機能……… ” ハイパー ジャマー ” はなかなか便利だ。

まさか人の視覚にまで作用するなんて流石プレシアの発明品だ。

前に俺の頭部ビームシールドが壊れた時に陽電子リフレクターに換装してくれたのもプレシアだ。

イノベーター化計画の時といいやはりプレシアは知識や技術的にチートだ。

今回それに助けられたんだがな……

まあそんな事より早く二人を救出しなくては……

工場の入口は金属製の引き戸によって固く閉じられており、ストライククローを使えば簡単に開けられるだろうが中の連中に気付かれる危険性がある。

……他に入口は……あつた！

上を見ると工場の2階部分に穴が開いている。

素早くエナジーウィングを展開してハイパージャマーを起動させる。

ここから中の様子を……って一人いない！？

ここには金髪の女の子しかいない！！

てかなんか変に息の荒い連中が女の子の服を破った！！

まずい！！

しかも一人はスカートに手を伸ばして……

やらせるかあああああああああああああああああああああああ  
ああああああああ！！

くのおおペドどもがああああ  
あああああああ！

勢いよくその穴から飛び降りてペドどもを殴り飛ばした。

「あは！」「あは！」「あは！」

吹っ飛んで気絶する変態どもを尻目にハイパージャマーを解いてストライククロウを展開する。

さあ覚悟しやがれ変態どもが！！

俺はそのまま銃を構えた変態どもに攻撃を開始した。

背中衣服を破られて半裸になった金髪の少女の妙に熱い視線を感じながら……………

第24話（前書き）

7 / 21 修正完了

## 第24話

私の名前はアリサ・バニングス、けしてバーニングじゃないから覚えておきなさい。

そんなことよりも今はどうにかしてここから逃げるか、誰かが助けに来てくれるまでの時間稼ぎをしなくてはならない。

目の前には15人程の男達……………私と友達の月村すずかを誘拐した連中。

すずかはここに来た時に私とは別の部屋に送られた。

しかも今の私は両手を後ろ向きに縛られて右足に鍵付きの鎖が巻き付いていて逃げられないように柱に括り付けられている。

今私は一人でここにいるのだけど……………

「へへ……こんな美少女が簡単に捕まえられるなんてな……しかも好きにして良いって話だぜ？こりゃ放っておく奴の気がしれないぜ」

「そうだな……とりあえず身代金要求する前に味見といこうじゃないか……」

「そいつは良い事を聞いたぜ……俺にもやらせてくれよ」

そんな事を言いながら男達がニヤニヤと笑いながら近づいて来る。

こんなところで汚される……

それだけは絶対に嫌だ！

こんな連中の内の誰かが初めての相手だなんて……

もしかするとすずかも同じような目にあっているのかもしれない……

……

私が別の部屋に連れられたすずかの事を思っていると男達が目の前まで歩いて来てこう言い放った。

「あ、そうだ！身代金要求の時に使うビデオを撮ろうぜ？悲鳴を上げながら汚される自分の娘を見れば親も高い金を払ってくれるだろ？」

「そりゃいい！おい！誰か撮影用の器材持って来い！！」

男達の言葉に身体中の血が凍りついてしまったかのような錯覚を覚えた。

お父様や鮫嶋に私が汚される様子が見せられる？

そんなの嫌だ！

今ですら怖くてたまらないのにそんな事をされたら……………

「これでよし！へ、さっさとやっちゃまえ！その後は俺と交代だからな」

私がこの先に起きるはずの出来事に怯えて何も考えられなくなった頃に男達の準備が終わってしまった。

「それじゃあ楽しませてもらうぜ」

三人の男が私に近づいてきた。

その内の一人が私の服に手をかける。

そしてそいつはいやらしい目で私を見ながら勢いよく上着を破り素肌が外気に触れた。

男達の興奮した息遣いが聞こえる。

嫌なはずなのに怖くて涙を流すことしかできない……………

さらに男達は私のスカートに手を伸ばしてきた。

こんなところで……………

こんな連中に汚されるなんて……………

いや……………

誰か……………

誰か助けて！！

「「ぐはあ！！」」

不意にそんな声を上げて男達が吹き飛んだ。

そして私の目の前にまるでいきなりそこに現れたかのように2mくらいの大サイズのロボットが私を守るように立っていた。

そして

甲高い動力部の駆動音を倉庫の中に響かせる。

それはまるで男達から私を守り、威嚇しているかのように……………

そのロボットは両肩に付いているクローを展開して男達に攻撃し始め、あっという間に制圧してしまった。

しかも誰一人殺す事なく……………

いくらなんでも強すぎる。

その強さに私は思わず見とれてしまっていた。

不意にそのロボットと目が合った。

「ッ!？」

あれだけの強さを誇るロボットに見つめられて私は男達から助けにくれた感謝の気持ちより先にこのロボットへの恐怖の方が出てきてしまった。

ロボットはゆっくりとこっちに近づいてくる

私は怖くなり目を閉じた。

しかし

「……………え?」

背中に暖かな何かをかけられ、抱きしめられる感覚に目を開けると私の背中には毛布がかけており、あのロボットが私を優しく抱きしめて頭を撫でてくれた。

「……………ふえ……………ひつく……………ぐすつ……………」

その時初めて私は安心した。

ようやく自分は助かったのだと実感できた。

そう実感すると涙が溢れて止まらない。

私は抱きしめてくれたロボットに抱き着いてもっと泣いた。

その間ロボットはただ私を抱きしめて頭を撫で続けたのだった。

『もう一人の女の子はどこに行ったのか知らないか？』

あの後五分ほど泣き続けた私にロボットは筆談でそう聞いてきた。

そこで初めて私は自分と一緒に誘拐されていたすずかの事を思い出した。

私は急いですが別の部屋に連れて行かれたのをロボットに話すと

『分かった。君の友達も必ず助けるからここで待っていてくれないか？』

と書いた紙を私に見せる。

幸い私達を誘拐した連中はここにあった鉄骨をロボットが折り曲げて拘束しているから安全だ。

「分かったわ。お願いだからすすかを必ず助けて!!」

ロボットにそう言うロボットは私に向かって力強く頷きすすかが連れ去られたであろう場所に走って行った。

その後ろ姿を見ていたら……………

「……………なんでだろう……………胸がドキドキする……………相手はロボットなのに……………」

私はそんな自分も悪くないと思いつつ熱を持ち赤くなった自分の頬を冷まそうと冷たい鉄の柱に寄り掛かった。

絶対逃がさないんだからね？

~~~~~

うお！

今俺の中で危険察知用のセンサーが反応した！？
トラップかなんかあるのか？

一度立ち止まりセンサー類で辺りを注意してみたがなんの反応も無い。

.....誤作動か？

頼むぜおい！

こんな大事な時に壊れんなよ！

そんな事を考えながら先を急ぐ。

もう一人の少女を急いで救出しなくては！！

そう思い、先を急ぐ俺の目に静かに光るとんでもない物が見えた。

ちよ！？ちよつと待てええええええええええええええええ

えええええ！！

まさかこれって……

ジュエルシードじゃないか！？

ゆっくりと近づき手に取るとジュエルシードの輝きは消えて何も反応しなくなった。

とりあえず腰にあるプレシア謹製のサイドパックにジュエルシードを入れる。

これでよし！

……っていうかまだジュエルシードを全部回収してなかったのか……

帰ったらなのは達に封印してもらわないとな……

だがまずは……

少女の救出が先だ！

また俺は走り始める。

もう一人の少女を救う為に……

く予告くもしかしたらなStrikers編(前書き)

あくまで予告です。

もしかしたら若干ズレていくかもしれません

く予告くもしかしたらなStrikers編

目覚めた俺には………

「…………俺は…………誰だ？」

記憶が無かった…………

「ククク…………お目覚めかな？私の究極の戦闘機人…………○○○○○
○○？」

そう言って俺を濁った目で見る科学者

「○○○○○○？私達は戦闘機人なのだから……………ドクターの指示を聞いていればそれでいいのです」

「ドクターの指示に従って行動すればいい」

「無駄な事は考えるな、任務に集中しろ」

「別に管理局なんて滅ぼしちゃってもいいじゃないですか そ・れ・に・い・あ・ん・な・下・等・な・連・中・な・ん・て・あ・な・た・に・は・似・合・わ・な・い・で・す・わ」

「私はただドクターと○○兄様を信じる」

「な〜に難しい顔してんの○○兄は にしし そんなに考え過ぎるとハゲるぞ？」

「○○兄様……………私は……………あなたに……………」

「○○兄様のように戦えればいいのですけどね……………」

「べ、別に○○兄の事なんて心配してないんだからなー!」

「……………○○兄様……………私はどうすれば良かったのですか？」

「○○兄様!!今日のお菓子はなんすか？もう待ちきれないっす!」

「私は○○兄様の為ならば……………」

個性豊かなナンバーズ

そして……………俺達の敵

管理局……………”機動六課”

「ようこそ！機動六課へ……………まあ堅苦しいのはここまでにしようか？」

「……………私はあの時の誓いを忘れてませんよ？」

「初めましてです リインフォース？なのですよ！」

「私の剣は奴の思いとともにある!!」

「へっ!おめえらヒヨッコにやられるようじゃ副隊長なんて務まらないぜ!!……いくぞアイゼン!!」

「私の治療なら身体の傷は癒せますよ?……心の傷までは癒せませんが……」

「……長い時が経ってしまったものだな……○○○○○○○○」

「ランスターの弾丸に撃ち抜けない物は無いのよ!!」

「こっちはフリードリヒと言います。えと……よろしく願います!!」

「僕にだって……守りたいものがあるんだああああああああああああ!!」

そして……

物語の鍵を握るのは……

「……………すべてはあの時から始まったんだ……………あの時の技を
今ここに！！一撃必殺！！ソニック・スマッシュ！！」

過去の恩人の技を拳に乗せる少女

「あれからもう10年になるんだね……………寂しいよ……………○○さん
……………」

若き執務官の苦悩

「私には彼があのまま消えてしまったなんてどうしても信じる事が
できないんです！！」

追い求め続ける無限書庫の書記官

「……………彼は……………私を突き放して一人で行ってしまったのです
……………」

苦しむ使い魔

そして……

「……………不屈の心はこの胸に……………だよね○○さん……………私頑
張ってるよ?……………」

虚勢を張り続けるエースオブエース

物語の軸となるのは紅いロストロギア

”レリック”

「そろそろ行くか……………気が進まないがな……………」

「……期待（＾o＾）／

第25話（前書き）

7 / 21 修正完了

第25話

「月村すずか……………私達は夜の一族の末裔である君を迎えに来たのだよ」

「ゴブツ！」

私の目の前にいる男はそう言って自分の隣にいた銃を構えた人の首を掻き切った。

「きやああああああああああああああああああああああああああああああ！！！」

私は思わず悲鳴を上げてしまったが男は何も感じていないような冷たい目で首から血を噴き出しながら倒れる人を見つめて

「さあ月村すずか……………夜の一族らしくその血を吸って私達の仲間となるがいい……………人間など所詮私達にとっては食糧に過ぎないという事を知りなさい」

そう言い放った。

「い、いやあ……………」

私は確かに夜の一族で血を吸って生きているけどそれは輸血パックでの事……

直に人間から血を吸った事なんてないしそんな事したくない！

しかしそんな嫌悪感とともに私の中で沸き上がる衝動があった。

喉が渴く……………

目の前に滴る赤い液体から目が離せない……………

「はあ……はあ……はあ……はあ……駄目……」

私は沸き上がる自分の欲求を必死に押さえ込む。

そんな私を見ていた男は

「ふむ……これは失敬。こんな誰とも分からないような者の血よりももっと高潔な血の方が良さそうだね？例えば………バニングス家の血とかはいかがだろう？」

私に笑顔を向けながら平然とそう言った。

アリサちゃんの血？

アリサちゃんもこの人みたいに首を切られて血を噴き出すの？

「……………はい」

アリサちゃんの命を守る為に……………

私はゆっくりと血を流す傷に口を近づけて……………

……………ごめんなさい……………お姉ちゃん、ノエル、ファリン、アリサちゃん
……………それになのはちゃん……………

私は……………

不意に壁が吹き飛んだ。

「ぐおお!!」

そして凄まじい破壊音とともに男が吹き飛ばされた。

男は壁に叩きつけられ、さらに首を何かのクローで挟まれている。

「がふう!!……………何者だ……………」

男は首を挟んでいるクローを外そうともがきながら自分を襲った襲撃者を見た。

重い金属音を立てながら壊れた壁から歩いて現れたのは……………

甲高い駆動音を立てて部屋に入ってきたロボットだった。

そのロボットは私を見付けるとゆっくり近づいて来る。

「あつ……………」

そして、ロボットは私の頭を撫でた。

『君の友達はずでに助けた。後は君だけだ』

そう書いてある紙をロボットが私に見せてくれた。

「あ……あ……あああああああああああああああ
あ！！」

私はそのロボットに抱き着いて泣いた。

助かった事に安心して……アリサちゃんが無事なのが嬉しくて泣いた。

[illegible]

男がそう言って笑い続ける。

確かに………

もしかするとそんな未来が訪れるかもしれない………

私を抱きしめてくれるロボットが音を出して目を明滅させ、首を振る。

それはまるで

『そんな事は無い』

そう言ってくれているように見えた。

自然と私を守るように私を自分の後ろに隠してくれる優しさ……………

そんな優しさが嬉しくて、また涙がこぼれる。

不意にロボットが私を抱きしめていた手を離して

男に向かってその手の中指を立てた。

「なっ！？ 貴様！？」

私も彼の突然の行動に驚きを隠せなかった。

しかしそんな事を気にする事もなく、彼はそのまま今度は親指を立てて首を掻き切るような仕草をして親指を下に向けた。

そしておどけたように肩を竦めて私を見る。

[illegible]

そんな仕草がおかしくて私は笑った。

こんなに笑えたのは本当に久しぶりのような気がする。

「きい　い　い　さあ　ああ　ああ　ああ　まあ　ああ　ああ　ああ　！」

馬鹿にされた事を知つた男はクローを外そうと躍起になるがまったく動く様子は見られない。

ロボットは男を捕らえていないもう片方のクローを展開するとクローの爪を閉じて大きく肩を引く。

そしていきなり男を捕まえていたクローを離して……………

爪を閉じたクローで男を殴り飛ばした。

「はぎや!?!」

そんな声を上げて吹き飛ばされた男はそのまま起き上がる事はなかった。

そして音を出し目を明滅させながらクローをしまって親指を立てる彼を見た私はまた笑ってしまった。

もちろん誘拐犯の人達は拘束してね？

彼を見ていると胸が暖かくなる。

お姉ちゃんが恭也さんを見つけた時はこんな気持ちだったのかな？

そんな思いを胸に秘めたまま私達は部屋を出た。

誘拐犯からは解放されたんだけど今度は彼に心を奪われちゃった……

……

責任………とってね？

第26話（前書き）

7 / 21 修正完了

第26話

「……………これはどういう事なのか説明してほしいの」

背中にとす黒いオーラを背負うなのはに人助けをしたあとに買い物を終わらせて家に帰って来ると素敵な笑顔で問い詰められる俺。

その奥から同じようなオーラを身に纏ったフェイトとユーノが現れる。

フェイトの持つBDからも同じようなオーラが出ている……………多分あれはリニスだな……………

不意に背後からもどす黒いオーラを放つ気配を感じた。

背筋に寒気がして振り返るとそこには……………

「……………私達にも聞かせてほしいなあ……………なあヴィータ？シヤマル？」

そう言いながらのはと同じくらいのオーラを放つはやて

そして……………

「答えによつてはアイゼンの頑固な汚れにしてやるよ……………」

アイゼンを構えるヴィータと

「ヴィータちゃん？バインドは私が張りますから思いっきりお願いしますね」

黒い笑顔を浮かべるシャマルがいた。

いや……俺何したよ？

俺今回人助けしかしてないよね？

なんでこんな目にあつてんの？

そんな疑問を感じて首を捻っているとなのはが普段は見せないような真つ黒な笑顔を浮かべて答えてくれた。

「今さっきね？アリサちゃんとすずかちゃんからメールで」今さっき私達誘拐されたんだけどカツコイイロボットに助けてもらった”
 つてきたの……………これってベルさんの事だよね？しかも”ロボ
 ツトって言ったらなのはのところにいたよね？今度イ・ロ・イ・ロ
 お礼がしたいから連れて来て”なんてメールには書いてたんだよ
 ね……………これってどういう事なのか教えてほしいの」

なのはがこのセリフ言う間のみんなの視線が痛い……………

こいつらの視線は多分人殺せる！

断言できる！

本当に一般人は死ねる！

「それじゃあベルさん ちよつとO H A N A S
Iしようか?」

死刑宣告来ました.....

すまない月村 忍、プレシア.....

ここまで修復してもらったのにまた壊れちまう.....

原形留めるといいな……………

そんな事を考えながら俺は高町家自慢の道場に死刑執行の為に連れて逝かれた……………

……………

死ぬかと思った……………

「ベルさん手が止まってるの!」

あ、すみません。

現在俺はなのは達を相手に給仕をしています。

「お菓子足りないよベルさん!」

「ジュースも足りないですよ?」

フェイトやユーノも遠慮なくそう注文してくる。

了解です!

さっきの O H A N A S I の結果俺は今日一日なのは達の言う事を聞かなくてはならなくなった。

まあスクラップにされるよりはマシだよな……

そんな訳で俺が翠屋でやっているように給仕を行っているんだけど……

「あ、あの……お手伝いできる事ありませんか？」

顔を真っ赤にしながら俺にそう聞いてくる上目づかいのクロノ
てか上目づかいはやめてくれ……

なんか俺が逆にいじめてるような気分になる。

何故クロノがここにいるのかというとなのはが

「ついでだからクロノちゃんも呼ぶの！」

なんてとんでも発言をしてアースラに通信を繋いだ。

すると

「そういう事ならOKよ　クロノ！行ってきたさい　これは艦長命令よ」

そんなリンディさんの楽しげな命令を受けて涙目のクロノがここに転送されてきた。

……………何故に涙目？

とりあえずみんなの視線（殺気）を集めながら慰めると

「……………お手洗いに行ってる途中で転送されたから……………
……………いて無いんです……………」

……………それは……………

「「「「「……………「「「「「

理由を聞いたなのは達も同情したのか沈黙した。

「……………と、とにかくクロノちゃん？私の部屋に行こうか？」
なのはが焦ったようにそう言うとクロノは涙目のままスカートを両
手で抑えながらなのはの部屋へ入っていった。

……自分の娘に何してんだよリンディさん……

なんとなく天井を見上げてそう思った……

まあそんな事故から復活したクロノの頭を撫でるとクロノは

「
」

顔を赤くして恥ずかしそうにはするが、俺から離れようとせず逆に近寄ってくる。

まあこんな日も悪くない……………

そんな風に考えながら……………

第27話（前書き）

7 / 21 修正完了

第27話

「……………これでもう大丈夫なはずよ？」

プレシアがそう言って俺を修理していた機材を俺から離す。

とりあえず……………

システムチェック

出力制限及びコントロール……

フルパワーでの活動可能

トランザム 合計時間15分までなら使用可能

動作システム・・・・・・

補助パーツ及び代用パーツ使用により異常無し

ミリタリーモードでの活動可能

各センサーシステム

異常なし

火器管制コントロールシステム

異常なし

メモリー及びバックアップシステム

異常なし

各種兵装システム

ソニック・スマッシュ砲修復完了

その他変更箇所無し

まあ完全とはいかないけど修復完了だな。

ここまで直してくれたプレシアと、今ここにはいないが月村 忍には感謝しても仕切れないな……………

まあこれでまた全力で戦える。

そんな事を考えていたら

「……………でもある程度直ったからって無茶をしてはだめよ？フェイトやなのはさん達が悲しむから……………というか次フェイトを泣かせたら私自らあなたをスクラップにするわ」

プレシアから釘を刺された……………てか脅された。

このままスクラップにされたくはなかったので俺はプレシアに分かるように大きく頷くと

「ならいいわ……………それじゃあ私はあなたに頼まれた物を準備するわ」

プレシアは満足そうに笑うとそう言って部屋を後にした。

とりあえず俺は前に頼まれてた事をするか……………

俺は部屋を出て転送装置の中に入ると転送先を

アースラに設定した。

~~~~~

「時間通りですね？ようこそアースラへ」

転送装置を出るとリンディさんの声が聞こえた。

姿が見えないところを考えると多分通信機が何かで話したのだろう。

「……………お、お待ちしました！」

目の前には顔を真っ赤にしたクロノがいた。

「そ、それではか、母さ……………艦長の部屋まで案内しましゅ……………  
………噛んじやった……………」

……………何だかガチガチに緊張してるな……………

とりあえず頭を撫でとくか……………

「は、はううう……………」

クロノはさらに赤くなった……………てか頭から湯気が出てるな……………

「お母さん……」

頭から湯気が出るほど真つ赤になったクロノはそんな声を出してパタリと……………って

ククロノが倒れたあああああああああああああ  
あああああああああああああああああああああ  
ああああああああ！！

何故！？

俺のせいか！？

俺のせいなのか！？

とりあえず……

[illegible]

この後30分間クロノを抱き抱えて俺はアースラの中をつろつろと歩き続けた。

その間誰ひとりとしてアーストラのスタッフに会わなかった。

その理由としてはクロノが倒れる瞬間を見ていたリンディさんとオペレーターのエイミィが悪ノリしてアースラのスタッフに俺達のことを区画を無人にしたからだ。

しかしクロノが倒れて気が動転していた俺はとりあえず歩いていれ

ば誰かに会えるはずだと歩き続けた。

そして30分くらいして自分に搭載されているセンサー類を使えばいい事に気が付いてやっとの思いでアースラのブリッジに行く事が出来たのだが……………

ブリッジに入った瞬間に悪ノリしていたリンディさんやエイミィだけでなくアースラのスタッフ全員に笑われた。

どうやら俺達のやり取りや俺がアースラで迷っていた様子が中継されていたらしい。

まさに悪魔だな……………

その後目を覚ましたクロノがリンディさんとエイミィに弄られて涙目だったので慰めようと頭を撫でると抱き着かれて泣かれた……………

リンディさんとエイミィはニヤニヤしているだけで何もしてこなかったのでとりあえず俺はクロノを慰める為に撫で続けたら……………

いつの間にかクロノは寝息をたてて眠っていた。

リンディさんによると今日俺が来ると聞いて昨日あまり眠れなかったらしい……………

仕方がないので一度クロノを部屋のベッドに連れて行き、起こさないように横にした。

結局俺がクロノを部屋に連れて行きリンディさんにここに来た本当の目的を話すのにさらに15分追加した事をここに追記しておく。

「……………それでは確かにジュエルシードをお預かりしました」

俺はリンディさんにプレシア謹製の封印処理が出来るサイドパックを渡した。

実はあの誘拐事件の後にまだジュエルシードが散らばっている事を知った俺はなのは達とシグナム達ヴォルケンリッターの協力を得て21個のジュエルシードをすべて封印したのだ。

そしてそれを今回リンディさん達に引き渡す為にアースラに来たのだ。

これ以後は夜天の書に集中出来るな。

ジュエルシードを渡し終えた俺はリンディに帰る事を伝え……………  
…ようとしたがその前に厨房の使用の許可をもらった。

~~~~~

「……………んん……………あれ？なんで私寝てたんだろう
……………」

私は布団から出ると近くのテーブルに白い布のかかった何かを見つけた。

「これって……………」

私は見覚えのないその白い布を取るとそこには……………

大きなお皿の上いろんな種類のクッキーがたくさん載っていた。

そしてその横には

『今日は出迎えてくれてありがとう。そのお礼になるかは分からないがよかったらこのクッキーを食べてくれ
byベルフェゴール』

「……………えへへ」

嬉しくなった私はその手紙を胸に抱いてクッキーを食べた。

「美味しいよベルさん」

私は嬉しくなってゆっくりクッキーを食べる。

また会えるといいな

そんな思いを胸に秘めながらゆっくりとしたどこか暖かい空気がク
口ノを包み込むのだった。

第28話（前書き）

7 / 21 修正完了

第28話

「ようこそいらっしやいましたベルフェゴールさん」

「歓迎するわ」

そんな風に声をかけられる俺。

目の前にはその声の主である月村すずかとアリサ・バーニング……
…じゃなかったアリサ・バーニングスがいる。

まばゆいばかりの光が俺を何度も照らす。

なんかメツチャ写真取られてんだけど……

誰あのカメラマン？

なんかゆるい口調で戦場の写真撮ってそうなオッサンなんだが……

……マジ誰だ？

そしてすずかとアリサ………何故に俺をこんな大規模なパーティ

ーに呼んだんだ……

俺めちやくちゃ浮いてるぞ？

だって今俺の目の前通った外人確か映画で変な動き方をする面白い
海賊の船長役してた人だもん。

すっげえ爽やかな笑顔で挨拶されたぞ？

それにあつちには確か最近女性問題で騒がれてる登場時にデデンデ
ンデデン のメロディーが流れる力○フォ○ニア州知事じゃないか

……

VIPだなおい……

できればサイン欲しいわ……

周りを見ればテレビで見たような有名人や政界の大物までいる。

本当に俺場違いな存在だな……

まあそんな大規模なパーティーに俺が何故いるのか……

それは昨日の事だった……………

……………

「……………という訳でベルさんは明日アリサちゃんとうすずかちゃん
の所に行くの……………明日は私もフェイトちゃんもユーノちゃん
もいないからって変な事しちゃダメなの」

それは突然の事だった。

いやなのはさん？

ちゃんと説明してくれますでしょうか？

「ねえなのはちゃん……………いきなり過ぎてベルさん困ってるよ？」

詳しく説明しないと……えつとねベルさん、実は……」

困惑する俺を見かねたのかユーノが俺に説明してくれた。

実は明日なのは達は夜天の書復活の準備の為にデバイスの強化と訓練を行うのでプレシアやアースラから派遣された技術者のいる時の庭園に行くのだという。

本来なら俺も行くはずだったのだけれどアリサとすずかから誘拐犯から助けくれたお礼にパーティーの招待状が来ていて、それがどうやら明日開催されるらしいのだ。

なのでそのパーティーが明日行われる為に俺はなのは達について行けないというもの。

うん、ちょっと待てくれ……

何故パーティーに誘われていた情報を誘われている本人である俺が知らないんだ？

それにそんな招待状が来ていた事すら俺は知らなかったんだが……

仕方がない……………

俺はしゃがみ込みなのはと視線を合わせてなのはの頭を撫でた。

「ふえ！？……………ベルさん……………怒ってないの？」

そのなのはの問いに俺は大きく頷いて答える。

そういえば昔からなのははそうだった。

俺とできるだけ一緒に居ようとして学校に行きたくないって言つて小学校の入学願書を隠してしまつたり、2年ほど前に俺の存在を嗅ぎ付けたアメリカ政府が研究の為に俺を強制的に引き取る事を記した重要書類を持ってこの家に來たんだが……………

その書類をなのはは持っていた厳ついゴリマッチョの黒服から奪つてどこかに隠した事があつた。

あの時は相当揉めたけど気が付いたら俺を研究しようとした連中は

全員行方不明、書類を発行したアメリカ政府の首脳陣や議員達は軒並み失脚していなくなってしまう話は無かった事になってしまった。

今思うとすげえなおい……………

でも研究者達が神隠しとか議員達の失脚とかってなんかキナ臭いけど気にしない事にしよう。

まあとにかくなのはが俺と離れたくないって思う気持ちが強いの俺がよく知ってる事だし、それになのはは孤独が大の苦手……………

いや、トラウマだ。

小さい頃に土郎さんが仕事で怪我をして入院していた時、恭也は一人修練を重ね、桃子さんや美由希は店の忙しさに忙殺されていたものなのは一人だった。

一人公園で誰に慰められる事もなく泣き続けた日々……………

それはまだ小さかったなのは孤独という言葉に心に残り付け苦しみを与え続けた……………

あの時俺が偶然通りかからなかったら……………

想像したくはないが多分……………

なのは心が壊れていた。

たとえ壊れなくても歪んでいたはずだ。

恐らく今のは存在しなかっただろう。

そう思うと俺はなのはを怒れない。

他人から見れば甘いと思われるだろう。

だが俺はそれでも良いと思っている。

今くらいはなのはを甘やかせても罰は当たらないだろう？

そう思ってなのは頭を撫でていると

「……………ベルさんごめんなさい……………招待状……………はい……………」

なのはが謝りながら俺に招待状を渡してくれた。

俺はゆつくりと頷いて招待状をなのはから受け取った。

「それじゃあ明日は楽しんでくださいねベルさん？」

俺が招待状を受け取ったのを確認したユーノがそうやってきた。

もちろんそのつもりだ。

とりあえず明日が楽しみだな……………

明日開催されるパーティーに思いを馳せながらその日を過ごしたのだが……………

~~~~~

無理！

マジ場違いです！

帰りたい……………そして翠屋で普段通りに働きたい……………

そう内心考えている俺の前にはあのカリ○オル○ア州知事が笑顔で握手を求めてくる。

マジ筋肉すげえ……………

やっぱパネエは○ユワちゃん。

その様子を後ろで見守る笑顔の少女が二人でもなんかちょっと変なんだよな……………

その後ろから感じる二人の視線がなんか妙に熱い……………

時々振り返ると熱っぽくて少し潤んだ目で俺を見つめている。

頬が少し赤くなっているが……………風邪でも引いているのだろうか？

そんな事を考えながら二人の視線を浴びつつ俺は今日一日を過ごす事になった……………

心休まらないな……………



第29話（前書き）

7 / 21 修正完了

## 第29話

それはまさに寝耳に水な出来事だった。

「あ、あの……ベルさん……じ、実は……会っていただきたい人がいらっしゃるのですが……」

顔を真っ赤にしたクロノが俺にそう言ってくる。

会ってもらいたい人？

そりゃ誰だ？

というかクロノ……その言い方だと間違えられて大変な事が起こるぞ？

特に俺に対してだけな……………

俺がクロノに話を促すとカミカミな状態でクロノは説明してくれた。

実は今回の夜天の書の事件解決の為に上層部に掛け合って管理局の全面的なサポートを得られるようにしてくれた協力者がいるらしくて、今回事件解決の立役者となった俺にお忍びで会いたいらしい。

協力者が……………

一体誰なんだろうな……………

そんな事を考えながらその協力者に会うことをクロノに伝えた。

今現在夜天の書はプレシア謹製の擬似リンカーコアのおかげで626ページまで項が埋まっている。

その時に竜や魔力を持つモンスターのリンカーコア以外にはやフェイトのリンカーコアのコピーを使った事が判明した時は大騒ぎになった。

プレシアさん……………

闇の書の闇強くしてどうするよ……………

俺スターライトブレイカー撃つ闇の書の闇と戦いたくねえ……………

……………

話は逸れたがとりあえずあと一回蒐集すれば作戦を開始できる。

あとなのは達のデバイスも強化が完了し、レイジングハートはレイジングハート エクセリオンに、バルディッシュはバルディッシュ アサルトになった。

なんでももつと強くなりたいたなのは達が望んだらレイジングハート達がシグナム達のデバイスに搭載されているカートリッジシステムを自ら搭載してほしいと言ってきたらしいのだ。

そしてそれをプレシアやアースラからきたという技術者と一緒に完成させた。

うん、プレシアなんでもできるんだな……………

とまあここまでは順調だったんだけど……………

実ははやてが体調を崩して入院する事になった。

幸い闇の書の闇の影響ではなかった為、現在は安定している。

本当に良かった……………

そんな訳で今日は本当ははやてのお見舞いに行く予定だったのだがその協力者がどうしても今日しか予定が空いている日がないらしい。

……………まあ仕方ないよな。

管理局の上層部を抑えて協力してくれたんだもんな……………

流石に断れないな。

「ご、ごめんなさいベルさん……え、えと……その……」

クロノはさっきから謝ってばっかだ……

とりあえずクロノは悪くないし頭を撫でてあげた。

「は、はうううう……」

クロノは顔が真っ赤に染まり頭から湯気が出る。

まあとりあえずその協力者の所に行きますか……

~~~~~

「よく来てくれた。歓迎するよ」

クロノに連れて来られた場所は管理局の本局で、そこにいたのは管理局の制服を着た初老の男だった。

「グレアム提督、お久しぶりです」

クロノが初老の男……………グレアムに挨拶する。

口調からするとかなり親しい間柄らしい。

「うむ、クロノもよく来てくれた」

グレアムは笑顔でクロノを見つめる。

第一印象としてはかなり好感の持てる人だ。

「今回の闇の書……………いや夜天の書だったね？多くの悲劇を生み出したあのロストログアを止めてくれた君には感謝しても仕切れないよ……………過去にあの書と関わった人間としては特にね……………」

グレアムはそう言って悲しげな表情を見せる。

それを見ていたクロノも表情を曇らせる。

俺もリンディさんから話は聞いている。

かつてクロノの父親であったクライド・ハラオウンは書の封印に当たっていたらしいのだが次元航行艦で輸送時に書が暴走。

そのまま次元震が発生しそうになり、当時別の艦の艦長だったグレアムがクライドの乗っていた艦を書ごとアルカンシエルで撃沈したという話だった。

しかしそこまで大きな犠牲を払いながらも書を封印または破壊する事が出来ず今日まで歯痒い気持ちだったとグレアムは語る。

そこまでグレアムが話した所で当時を思い出しあまり聞きたくなくなってきたのか、話題を変えようと急にクロノがグレアムの使い魔に会いたいと言ってきた。

しかしグレアムは首を横に振り今ここにその使い魔はいないとクロノに伝えた。

それを聞いたクロノは俯いてしまったが、頭を撫でると上目づかいに催促されてしまいグレアムに

「はっはっは、クロノは君に惹かれているようだね？」

なんて言われてしまった。

クロノは顔を真っ赤にして首を振り否定するがグレアムは笑うばかり

り……………

こりゃグラムにからかわれてるな……………

クロノが落ち着くまでしばらく時間がかかったが収まった頃に急に
グラムが

「とりあえず礼を言わせてくれ……………本当にありがとう……………
これでクライドや今まで被害にあった人達の無念も晴れる事だろう
……………」

真剣な表情で頭を下げてそう言ってきた。

いえいえこちらこそ……………

いきなりの礼に驚きながらも俺も頭を下げようとして

ロックオンアラートが俺の中で鳴り響いた。

グレアムはその外見から想像もつかないような早さで俺に向かって魔力球を放つ。

その魔力球は寸分変わらず俺に向かい……………爆発した。

「ベルさん!!」

クロノの悲鳴に近い声が聞こえる。

俺に当たったのは魔力球

なかなかの威力だ……………

恐らく直撃を受けてたら胴体部の装甲がチタニウム合金だから一発でダウンしてた。

そう……………直撃してたらだ。

低く獣が唸るような音が部屋に響く。

あの瞬間に俺は額に装備された陽電子リフレクターを展開して魔力球を防いだのだ。

あともう少し展開が遅れていたら恐らく直撃してたな……………

「グレアム提督！！何故こんな事を……………」

クロノが素早くS2Uを起動してグレアムに向かって構える。

するとグレアムは先ほどと変わらぬ雰囲気で魔力球を作り出すと

「……………何故こんな事をしたのかか……………ふ、簡単だよクロノ
……………すべては私の計画の内だったからさ」

「ッ！？」

今度はクロノに攻撃した。

爆煙がクロノを包み込む……………

「……………やはり一筋縄ではいかないか……………」

グレアムは目を細めてそう呟く。

クロノに向かって飛んできた魔力球を俺は陽電子リフレクターでガードする事によって防ぐことができた。

……………こいつ……………クロノにも容赦なく攻撃してきやがった……………

「計画？　いつたい何をしたのですかグレアム提督！　！」

クロノは俺の後ろに隠れながらグレアムに聞く。

グレアムは悲しげな表情を浮かべ

「……………闇の書を封印するのは私だ！　！　クライドの仇をどこの誰とも知らぬ者達に解決させるなど……………私には我慢ならない！　！」

グレアムはとうとう本性を現した。

「グ、グレアム提督……………」

クロノはあまりの事に呆然としている。

「……………クライドを自分の手で撃った時に誓ったのだ！！必ずクライドの仇を取ると！！」

その間にもグレアムは叫びながら魔力球を陽電子リフレクターを展開している俺にぶつける。

「長い間探しに探し求めてやっと見つけた……………天涯孤独の少女の下にある事を知ったのだ！！……………ならば誰にも迷惑をかける事なく封印できる……………そう思った……………だからこそ……………だからこそ私はその少女が満足に暮らせるだけの援助を行い機会を伺ってきたのだ！！」

グレアムは攻撃する手を休める事なくそう叫ぶ。

……………ああ？今こいつなんて言った？

天涯孤独の少女？

誰にも迷惑がかからない？

まさかこいつ……………はやてを犠牲にするつもりだったのか！？

そんなの……………許せるものかあああああ！！

認証確認

非常用戦闘プログラム起動

プログラム名

EXAMシステム

スタート

うおおおおおおおおおおおおおおおお
おお！！

視界が赤く染まりEXAMの文字が浮かび上がった。

しかし何故か俺の意識はEXAMに飲み込まれずはつきりとしている。

……………いける！！

奴をぶちのめす！！

俺はエナジーウィングを起動して陽電子リフレクターを展開したままグラムに突撃をかけた。

「くっ！小癪な！！」

グラムはかろうじてそれを避けるが既にそれは読めている！

「ぬお！！外れん！？」

俺の突撃を避けて体勢が崩れたグレアムを伸ばしたストライククロ
ーで捕縛した。

そしてEXAMシステムを解除してクロノの目の前に連れて行くと

「ギル・グレアム、あなたを傷害行為の現行犯で逮捕します！！」

クロノがバインドをグレアムにかけた。

だが………

「くう……………しかし私が捕まっても計画は止まんぞ！！既に対
闇の書用のデバイスはロッテが持っている……………それにそろそ
ろ計画開始時間だ……………お前達は間に合わない……………くくく
……………くはははははははははは！！」

騒ぎを聞き付けた局員達にグレアムを引き渡す際にグレアムはそう
言って笑っていた。

「ベルさん！！一度アースラに戻った方が良いかもしれませんが……」

クロノは連れて行かれたグレアムの残した言葉とあの笑い方を見て
そう言ってきた。

俺も嫌な予感がしたので頷き、クロノと一緒に転送装置の場所まで
走りアースラへと飛んだ。

そこで見たのは……………

なのはとフェイト、それにユーノとアルフが漆黒の翼を広げた銀髪の女性と戦っている光景だった。

第30話（前書き）

7 / 21 修正完了

第30話

くそ！

グレアムのせいで全部めちゃくちゃだ！！

アースラのメインモニターには完全に起動して暴れているリインフォースとそれを止めようとするなのは達の姿が見える。

「急がないとなのはちゃん達が！！」

俺とクロノは転送装置の前でなのは達のいる海鳴市に飛ばうとしているのだが……………

「ダメです！！転送装置が起動しません！！何者かにハッキングをかけられ閉鎖されています！！」

エイミーがそう言いながら凄まじい速さでキーを入力している。

そう、何者かがこのアースラにハッキングをかけて海鳴市へ俺達が行けないようにしているのだ。

まあ犯人は既に分かってるがな……

「くっ！！アリアとロッテ……こんな事をするなんて……」

クロノは顔をしかめながらモニターを見つめる。

モニターの先にはグレアムの使い魔のリーゼロッテ、アリア姉妹が空中にモニターを出して二人でパネルを叩いている。

時々こつちを見てニヤリと笑う姿がイライラする。

しかし残念ながら今の所彼女達の計画通りに進んでいるのだ。

恐らく彼女達の狙いはなのは達と戦い、消耗した暴走中リインフォースを封印するつもりなのだろう。

悔しいがアースラにいる俺達ではなにもできない……

まあここにいる俺達では……………だがな……………

「……………ん？何ですかベルさん？」

俺はどうにかして転送装置を起動させようとしているクロノを呼び、先程書いた文字を読ませる。

「……………この方法で上手くいくんですか？」

若干クロノが信じられない無のような表情を浮かべていたが俺が自信満々に頷くとすぐに行動に移った。

空に雷光を発生させながら黒い雲が立ち込める。

それはちょうど猫姉妹の真上だった。

[illegible]

「……?」

そしていきなり猫姉妹の所に稲妻が落ちた。

アースラクルーやエイミィ、リンディさんそれにクロノは驚いていて俺は作戦が上手くいった事を喜んだ。

まさかこんなに上手いくとはな……

俺がクロノにさせた事……

それは

時の庭園にいるはずのプレシアさんにフェイトのピンチである事、それと助けに行こうとしている俺達を邪魔する存在が海鳴市にいる事を伝えたのだ。

まあものの見事に猫姉妹撃沈。

流石プレシア……………

愛娘の為なら空間跳躍魔法なんて大技を普通にできるのが凄すぎる。とりあえず俺は今だに口を開けてポカーンとしているアースラのみんなを再起動させる為に艦長のリンディさんを一番先に正気に戻す事にした。

その時に正気に戻った時のリンディさんの最初の一言が

「フェイトさんやアリシアさん絡みでプレシア女史と敵対したくないわ……………」

と意外にまともだった事を追記しておく。

てかあんな事できる公式チートなプレシアさんとフェイト達絡みで戦うとかどんなドM？

~~~~~

「……………これで終わりですロッテ！！アリア！！」

海鳴市に来て早々にクロノはS2Uを起動して猫姉妹をバインドで捕縛して今まで何があったのか記録映像を要約して見た。

なんて連中だ……………

屋上でこれからの事について話に来たなのは達やヴォルケンリッターのみんなをバインドで捕縛した後になのは達をそのまま少し離れた所に猫姉妹は転移させた。

その後猫姉妹は、はやての目の前で大切な家族であるヴォルケンリッター達を夜天の書に蒐集してしまったのだ。

突然家族を失ったはやては悲しみのあまり夜天の書を起動。

そしてバインドを解除したなのは達がやって来て後は俺達が知っている通り……………

こんな事態を招きやがって……………

絶対に許さないからなグレாம்……………

見終わったクロノはすぐに猫姉妹をアースラに転送しようとしていたが俺はそれを止めた。

「ベルさん？　いったい何を？」

クロノは怪訝そうな表情を浮かべていたが俺は構うことなく猫姉妹の体を探る。

「なななな何してるんですか!？」

クロノは顔を真っ赤にして叫んでいるが何故だ?……………つとあった。

俺はロツテ?だったか?まあそいつのポケットから一枚のカード……………いや、対闇の書用デバイスを取り出す。

「それは……………デバイスですか？」

そのクロノの問いに頷きで答えて俺はデバイスと通信を開始する。

……………ふむ……………これなら……………

俺はデバイスの名称や性能について確認するとデバイスをクロノに渡す。

「え?私が使うのですか？」

クロノは不安げにそう言うのだが多分クロノならこのデバイスの性能をフルで使えるはずだ。

俺はクロノにデバイスの名称や性能について簡単に書いた紙を渡した。

「えっと……………対闇の書用デバイス デュランダル？」

クロノは俺から渡された紙を読み始めた。

これで戦力UPに繋がるはずだ。

そう思いながらなのは達の様子を見ようとした時だった。

センサーが何かの反応をキャッチした。

なのは達以外の生体反応！？

データ検索……………

月村　すずか

アリサ・バニングス

なんだと！？

なんであるの二人がこんな所に……………

とりあえず二人を安全な所に連れて行かないと……………

「……………氷結封印エターナルコフィン……………ん？ベルさん！？」

クロノに悪いと思いつつ俺はエナジーウィングを広げて全速力で飛んだ。

その時にエイミィからの通信が入ってきたが無視する。

まずは一般市民の待避が最重要だ！

そう思いながら飛び続けるとそこには

何故かなのはとフェイトがいて、  
なにやら気まずい雰囲気が漂っていた……

というかなんでなのは達がここにいるんだよ……

おかげで魔法バレてんじゃん……

「あのなのはちゃん？……ここ危ないって言っただけ？」

そんな気まずい雰囲気の中ですずかが沈黙を破った。

……え？そうなのか？

確かめるようになのはの方を見ると

「……ッ！？そうなのー！！ここは危ないから逃げない……」

……」

やっと正気に戻ったのか慌ててなのはがそう言ってくる。

フェイトも

「もうすぐここにスターライトブレイカーが………ああ!!もうすぐチャージが終わる!?!」

どこか絶望したような様子でそう言ってきた。

………はい?今フェイトはなんて言った?

スターライトブレイカーが来る!?

.....マジで？

それは非常にまずい！！

しかもチャージが終わりそうだと！？

そこまで思考を巡らせた時.....

桜色の閃光が輝きを放ち、巨大な極太レーザーが俺達に向かって放たれた。





システム維持に支障が出る可能性あり！

うるせえ……

持ってみせろよ……

俺の後ろには……

守らなきゃならないものがあるんだよおおおおおおおお  
おおおおおおおおお！！

さらなる非常警報が鳴る……  
アラート

警告！

システム内に過剰負荷を確認！

出力低下！！

ふざけるな！！

そんなものでええええええええええええええええ！！

俺はありったけのエネルギーを額にある陽電子リフレクターにまわす。

アラート  
非常警報は鳴り止まない……

警告！

エネルギー過剰供給を確認！

## システム内限界負荷値突破！

爆発の恐れあり！

上等だああああああああ！！

この攻撃を耐え切ったらそんなの関係ねえんだよ！！

俺は俺達を押し潰さんとするその圧倒的な砲撃を睨みつけて踏み止まる。

そして……………

不意に桜色の砲撃が途絶えた。

……………止まった？

いや終わったんだ!!

俺はスターライトブレイカーを耐え切ったんだ!!

よし!これで……………

俺はなのは達とともにこの事件を終わらせる為に限界値を超えていた陽電子リフレクターが爆発しないように解除して、エネルギーをカットしようとした時だった。

いきなり額の陽電子リフレクターが爆発した。

「「「「ベルさん!?!」「」「」

なのは達の悲鳴が聞こえる。

回路に異常発生

スリープモードに移行

ちょっと待ってくれ……………

俺は……………まだ……………

そんな思考を最後に俺の記憶は途切れた……………



第31話（前書き）

7 / 23 修正完了

### 第31話

システムチェック

出力制限及びコントロール・・・

フルパワーでの活動可能

動作システム・・・・・・・・

補助パーツ及び代用パーツ使用により異常無し

各センサーシステム

異常あり

頭部右側メインカメラ損傷

サブカメラ起動中

火器管制コントロールシステム

異常なし

メモリー及びバックアップシステム

異常なし

各種兵装システム

頭部陽電子リフレクター損壊

使用不可

スリープモード解除

また壊しちゃったな……………

プレシア達に怒られる。

目が覚めるとそこは何かの整備室だった。

センサー起動

システムアクセス・・・

現在地確認

次元航行艦アースラ デバイスルーム

ん？アースラ？

なんで俺はこんな所にいるんだ？

確か俺は……………

……………そうだ！！

俺はなのは達を庇ってスターライトブレイカーを受け止めて……………

なのは達はどうなったんだ！？

急いで戻らないと！！

俺はセンサーを起動したままアースラのブリッジへと急ぐ。

そして扉を抜けると……………

「悠久なる凍土、凍てつく枢の地にて、永遠の眠りを与えよ!!」

アースラのメインモニターに映るクロノが気持ち悪い化け物に向かってデュランダルを振り下ろしていた。

「凍てつけええええ!!」

クロノの声に合わせてデュランダルのクリスタルが光り、化け物を凍りつかせていく。

その周りにはヴォルケンリッターのみんなやユーノとアルフがいる。

「気が付いたのねベルフェゴール!!」

突然真横から声をかけられた。

その声の主はプレシアでなんか若干怒ってるけど……

なんで？

「あなたね！あれほど無茶はするなって言ったのにあんな事して……  
……フェイトやなのはさん達がどれだけ心配したか分かってるの！  
？………もつと自分を大事にしなさい！！」

プレシアはみんなの目の前で俺を怒った。

………仕方がなかったとはいえ、みんなには悪い事したな………

後でちゃんと謝っておくか………

それにこの人にも迷惑かけっぱなしだな俺………

そんな事を考えながらもプレシアに頭を下げた。

「………とりあえずあなたには監視役を付けるわ………」

プレシアは自分のデバイスを俺に近づけアクセスし何かを送り込んだ。  
だ。

『あなたの中に入るのは久しぶりですねベルフェゴール………しかし今回は監視役なので厳しくいきますよ』

俺の中に笑顔のリニスのイメージが浮かぶ。

リニス？

でもバルディッシュの中にいたはずじゃ……………

『プレシアが激しい戦いになるからとフェイトから直接バルディッシュの中にいた私を自分のデバイスに移したのです』

俺が疑問に思っていた事はリニスの説明であっさり解決した。

「全力全開！スターライトおおおお！！」

大気中の魔力を収束させてレイジングハートを振り上げるのは。

「雷光一閃！プラズマザンバああああああ！！」

雷を大剣の形態にしたバルディッシュに纏わせ構えるフェイト。

「轟け終焉の笛！ラグナロクうううううう！！！」

杖を掲げて3つの大きな魔力の球を作り出すはやて。

どうやら向こうはクライマックスを迎えたみたいだな。

三人は魔力を極限まで高めて攻撃するつもりのようなのだ。

その他のメンバーはチャージ中のなのは達を守る為にバインドで化け物を拘束したり魔力球で攻撃したりしてる。

そして

「っっブレイカあああああ！！！！」

圧倒的という言葉が相応しい威力を秘めた三人の攻撃が化け物に命中した。

その光景はまさに最終戦争。

『あとでフェイト達に教えおきますね?』

ちょ!?!リニス!?

『あんな無茶した罰ですよ…………ふふ 面白い事になりそうですね?』

あ、悪魔め…………

クスクスと笑い続けるリニスに戦慄を覚えながらもモニターを見るとシャマルとユーノとアルフがあのかげ物のコアを衛星軌道に転送してきた。

急にアースラ内が騒がしくなってきた。

「アルカンシエル!バレル展開!」

リンディさんがそう言うのと発射装置らしき物が現れてリンディさんはそれにキーを刺す。

「命中確認後、反応前に安全距離まで退避します!準備を!」

リンディさんがそう言つとクルーのみんなは

「「「「「了解!」「」「」「」

と大きな声で答える。

これで終わり……………

誰もがそう思いリンディさんがキーを回すのを待った。

しかし

俺のセンサーがいきなり反応を示した。

この反応は……………

MSだと!?

「か、艦長!! コアが何か人型のものに変異しました!! は、速い…………… アルカンシエル照準間に合いません!!」

俺がその反応をキャッチしたのと同時にエイミイの悲鳴にも似たそんな声がアースラのブリッジに響いた。

「なんですって!?! モニターの映像を出して!! 早く!!」

突然の出来事に驚きながらもリンディさんは指示を出す。

そしてそこに映っていたのは……………

G X 9 9 0 0 ……

ガンダムXだと!?

そこには背中に特徴のある大型の装備……サテライトシステムを  
装備した黒いG Xが映っていた。

「あれは……ベルフェゴールさんと同系統のロボット!? なぜ闇  
の書の闇がそんなものに……」

リンディさんは驚いていた。

いや、その場にいた全員があまりの事態に驚いていた。

何故あんなものに闇の書の闇がなれたのか……

その理由が……………ッ!?

いやある……………

あいつがGXになるような理由が一つだけある!!

あの時……………

最初にヴォルケンリッターのみんなと会った時に俺はシャマルに蒐集された。

その時に”機密情報”が蒐集されてしまったのだが俺自身になんの影響もなかった為に放置してしまったのだが……………

もしあの時蒐集された情報の中にMSの情報が入っていたとしたら？

十分にありえる事だ……

そしてその情報があつたGXの情報なのだとしたら……

”アレ”を使われたらアースは終わりだ……！

リニス！！

俺は最悪の事態を回避する為に動く。

『は、はい！！なんですかベルフェゴール？』

リニスもGXの存在に驚いていたようだが俺の呼び掛けに反応してくれた。

俺はそんなリニスに

転送装置を起動してくれ！！

と頼んだ。

『え？転送装置ですか？……………まさかベルフェゴール！！』

俺の考えている事に気が付いたのかリニスは驚いている様子だがそんなの気にしていられない！！

早く！！このままじゃアースラが沈む！！

『わ、分かりました！！少し待ってください……………できました！！』

俺はリニスが起動した転送装置の中に入る。

「ベルフェゴールさん!？」

「ベルフェゴール!？」

リンディさんとプレシアが驚いて止めようとしていたようだが既に俺は転送装置の中に入ってしまっていた。

一瞬にして俺は黒いGXの前に転送された。

GXも俺の存在に気が付きシールドライフルを構える。

俺もストライククローを展開してGXを睨みつけた。

本当の最終決戦はまだ始まったばかりだ………

第32話（前書き）

7 / 23 修正完了

### 第32話

さっきまで俺がいた空間に三筋のビームの光が体を僅かに掠り、突き抜けていく。

G Xの狙いは正確で気が抜けない。

うおおおおおー！！

俺は回避しながら勢いよくストライククローを伸ばし、G Xを掴もうとするがG Xは僅かに体を反らして回避するだけ……………

こいつ……………ニュータイプか！？

『ベルフェゴール！！右から来ます！！』

リニスからの指示で連続して発射されたビームをバレルロールしながら回避する。

くそっ！！

奴の方が一枚上手だ！！

リニスの指示がなければ被弾してる！

先程からずっとこの調子なのだが幸いな事に奴はまだ一度もサテライトシステムを起動していない。

ならばまだ勝機はある！

俺は左手のストライククローを閉まって胸部と腹部の装甲を解放してソニック・スマッシュ砲を構える。

『ベルフェゴール！？その攻撃は隙が大きすぎます！！』

リニスの言う通りこの状態では俺はただの的だ。

だが………

G Xはシールドライフルを俺に向ける。

かかった!!

俺はすかさず左手に収納されていたヒートワイヤーでシールドライフルを絡め取り、そのまま引き裂く。

引き裂かれたライフルは切断された部分から漏電し、誘爆した。

状況的に不利を悟ったのかG Xは後退する。

逃がすか!!

俺はあらかじめ展開を終えていたソニック・スマッシュ砲を発射した。

その攻撃は当たらなかったが先程の攻撃でGXの武装はバルカン砲と大型ビームサーベル一本だけになり圧倒的とまではいかないものの俺の方が有利だ。

『ヒヤヒヤしました……………ですがこれで向こうは遠距離からこちらを攻撃することが出来なくなりましたね』

リンスもライフルの存在を驚異に感じていたようだ。

俺はさらなる追撃をGXにかけようとして……………

連続で鳴り響くロックオンアラートがそれを止められた。

複数からのロックオンだと!?

いったいどこから……………

そう思いながら周りを見渡すと

『べ、ベルフェゴール……………私達は包囲されたようです……………』

そんなリニスの絶望感に満ちた声とともにGXによく似たMSが俺を取り囲んでいるのが分かった。

くそっ!!

こんな時に……………

Gビットがよ……………

俺の周りにはライフルを構えたGビットがセンサーによれば12機存在するらしい……………

やられた……………

俺の中にGXのデータがあるなら他にも何か情報があってもおかしく無いことを考えてなかった……………

Gビットはゆっくりと包囲を縮めて俺に近づいてくる。

おかしい……………

『……………どうしたのですかベルフェゴール?』

リスはどうかしてこの包囲を抜けようと策を考えていたようだ。

だからリニスに俺は

何故こいつらはライフルを撃ってこないんだ？

と今思っている疑問を聞いてみた。

『……………確かにそうですね……………何故でしょうか……………』

リニスも俺の中で考え込むようなイメージを出しながら俺の疑問に首を傾げる。

そういえばGXはどこに……………

そう思いセンサーの領域を拡張と……………

GXはいた。

サテライトシステムを起動してこちらに照準を合わせた状態で……

……

そこで初めて気が付いた。

こいつらは何か……！

G Xのリフレクターとボディは青白く輝き幻想的な雰囲気醸し出している。

しかしその見つめる瞳は冷たく凍りついたような印象を受けた。

マイクロウェーブ無しでサテライトキャノンを起動しやがった……  
……

月光の巨大砲撃が俺に迫る。

くそつたれがああああああああああああああああああああ  
ああああ！！

その砲撃は無慈悲なまでに大きく、強大なものだった………

第33話（前書き）

7 / 23 修正完了

クライマックスです

### 第33話

青白く巨大な砲撃がモニターに映るベルフェゴールとリニスを飲み込んだ。

その様子を私……プレシア・テストロッサはただアースラのブリッジで見ている事しか出来なかった。

「リニス！！ベルフェゴール！！」

私の頭の中が真っ白になりそう叫ぶ。

「そ、そんな……………ベルフェゴールさんが……………」

私の隣にいたアースラの艦長であるリンディも呆然としていた。

それもそのはず、あれだけ強力な存在だったベルフェゴールをほぼ無傷である同系統の機体はたった一発の砲撃で葬り去ったのだ。

あれを見て何も感じない方がおかしい。

「……………無理です……………逃げましょう艦長！！あんなの無理です！！勝てるはずないじゃないですか！！」

そう叫ぶのはオペレーターのエイミィ

あの光景を見て怖くなったのか、その目は恐怖に染まってしまっている。

それは無理もない話だった。

勝てない。

それは先程の戦闘を見ていれば分かる。

あの機体はアースラ唯一の武装であるアルカンシエルの照準よりも早く動けるのだ。

さらにあのベルフェゴールを葬り去った強力な砲撃まで備えてある。

まさに万事休す……………

あまりに強力過ぎて打開策が見つからない。

私はあまりの悔しさにモニターに映る”ソレ”を睨みつけていると

”ソレ”はこつちを……………

アースラの方を向いた。

「……………ッ!?」……………

アースラに乗っていたクルー全員が息を飲んだ……………

そして悟った。

次は私達だと……………

”ソレ”はベルフェゴールを葬り去ったキャノンをこっちに向ける。

誰もが死の瞬間を感じ取り動けなくなる。

再びあの機体が青白く輝く。

……………終わった。

そんな言葉が頭の中を過ぎり目を閉じる。

そしてその砲撃は……………

いつまで経っても来なかった。

「……………え？」

恐る恐る目を開けてみるとモニター画面の先に左腕を無くして後退するあの機体。

「な、何故……………」

突然の事態に訳が分からずに混乱していると

「え？こ、これって……………センサーに反応あり！！ベルフェゴールです！！」

エイミイがそう叫んだ。

そしてその瞬間モニター上に突如ベルフェゴールが宇宙の闇の中から現れた。

~~~~~

正直危なかった……………

あの時……… サテライトキャノンが迫って来た時に2分間だけトランザムを使って回避し、そのあとハイパージャマーで隠れたのだ。そして機会を伺い、GXがサテライトキャノンをアースラに向けて制止した瞬間に攻撃したのだが………

『外しましたね………』

リリスがポツリと呟いた。

そう、外したのだ。

あの攻撃する瞬間にGXはどうやって知ったのかは分からないがサテライトキャノンの発射をやめ、自身の左腕を犠牲にして逃げられた。

くそっ！！

千載一遇のチャンスだったのに………

見るとGXは残った右手でビームサーベルを構えていた。

『……………勝てますか?』

リンスの不安げなその言葉に俺は答えない……………いや、答えられない。

少しでも気を抜けばやられる。

そんな雰囲気があるGXから出ているのだ。

そして……………

GXが動いた。

俺の予想していた速度よりもかなり早い動きだ！

このお!!

俺は右のストライククローをGXに向かって伸ばすがクローをビ―

ムサーベルで斬り落とされる。

くそおおおお!!

『ベルフェゴール!?!』

リニスの俺を心配する声が聞こえた。

しかし気にしてられない……………

そしてそのままの勢いを保ったままGXのビームサーベルが俺の顔に迫って来た。

それを俺は顔をずらす事によって避けようとしたが……………

右のメインカメラにビームサーベルが突き刺さった。

舐めるなあああああ！！

俺は左腕のクローを伸ばしてGXの頭を掴み、そのまま握り潰す。

しかしGXは俺の右側のメインカメラに突き刺さったビームサーベルを引き抜き、左腕ごとストライククローを斬り落とした。

そしてそのまま互いに距離を取る。

『大丈夫ですかベルフェゴール！？』

リリスが心配そうに声をかける。

正直厳しい……………

近接戦闘用の兵装は全部やられた……………

右のストライククロウは斬り落とされたが右手は残ってる……………
だがその手に持てるような武器は無い。

しかもさっきの頭部へのダメージでハイパージャマーが使えなくな
った……………

どうする……………

頭部を失ったとはいえGXはまだその右手にビームサーベルを握っ
て今にも仕掛けて来そうだ。

このままじゃ負ける……………

何か打つ手は……………

そんな事を考えているとGXが再び接近してきた。

『ベルフェゴール!!』

リニスの叫び声が聞こえる。

俺は死ぬのか……

こんな所で……

何も守れずに……

こんな所で……

こんな所で俺はああああああああああああああああああ！！！！

認証確認

非常用戦闘プログラム起動

プログラム名

EXAMシステム

スタート

視界が赤く染まりEXAMの文字が浮かび上がった。

そしてGXがビームサーベルを振り下ろす瞬間がはつきりと見える。

俺はそれを最小限の動きで避け、ビームサーベルをGXの手から蹴り飛ばして体勢を崩したGXを残った右腕で殴り飛ばした。

やったぞクソヤロー!!

俺は今自分がした動きに驚きながらも声は出ないがそう叫んだ。

『流石ですベルフェゴール!!あの状態で巻き返したなんて凄いですよ!!』

リニスもどこか興奮したようなイメージで俺を褒める。

これで奴の武器はバルカン砲だけだ。

そう思いGXを見ると……………

俺達から少し離れた場所でサテライトキャノンを起動してその照準をアースラに向けていた。

なんだと！？

『アースラが！！』

俺もリニスも焦った。

何故なら既にチャージはほとんど終了しており、あとは発射するだけの状態になっていたからだ。

『ベルフェゴール！！』

リニスは俺の名を呼び俺を急がせる。

分かってるさ！！

俺はGXとアースラの間に入りソニック・スマッシュ砲を起動するが威力が違い過ぎる……………

だっ たら……………

奥の手だ！！

トランザム！！

動力であるGNドライブが甲高い駆動音を立てて緑色の粒子が大量に発生する。

そして意識が薄れてきた……………

これは……………

トランザム…………バースト…………？

その思考を最後に意識が途切れた。

~~~~~

「……………起きてください……………起きてくださいベルフェゴール!」

そんな俺を呼ぶ声に目が覚める。

「……………リニス…ス…か?」

体を起こしてみるとそこは前にリインフォースと出会った時と同じ空間。

「……………トランザムを使ったはずなのにトランザムバーストになったのか……………」

俺は辺りを見回しながらそう言つと

「どうやら私はそれに巻き込まれたようですね……………」

俺の真後ろから声が聞こえた。

「「誰<sup>だ</sup>!」」「」

俺とリニスは同時にそう言って振り返るとそこには……………

リインフォースがいた。

「なんでリインフォースがここに……………」

俺は驚きながらリインフォースに聞くと  
リインフォースは顔をしかめながら

「いつまで経ってもアースラからコアの破壊が完了したという知らせがなかったから心配になって主達とアースラまで転移して来たんだ……………まさか戦闘中だったとは……………」

そう教えてくれた。

ちょっと待て……………

て事は…………アースラに全員集合しちまってるってことなのか！？

俺とリニスは頭を抱えた。

「え？ちょ！？どうしたんだ二人とも！？」

リインフォースが心配して俺達の近くに来る。

とりあえず……………

現状を報告しますか……………

「…………それは…………かなりまずい状況なんじゃないか？」

事態を知ったリインフォースは顔を真っ青にして俺達に聞いてくる。

「ええ……………現在の状況は不利よ」

リニスが肩を落としてそう答えると

「主達が危ない！！すぐに避難しなくては……………でもベルフェゴールが……………」

リインフォースは悲しげな表情を浮かべて俺を見てくる。

その様子を見た俺はとりあえずリインフォースの頭を撫で

「大丈夫さ……………ついでにそんな不要な物は捨てていけよリインフォース」

そう言つてリインフォースの胸に腕を突き込む。

「ベルフェゴール！？」

その光景に驚いたリニスは目を限界まで見開いて叫んだ。

「があ……………ベルフェ……………ゴール……………何を……………」

リインフォースは苦しげに俺にもたれ掛かる。

俺はそれを無視して”ある物”を掴み、リインフォースから引き抜いた。

それは……

黒い塊……いや、リインフォースを蝕むバグの塊だった。

俺はそれを遠くに投げ捨てるとリインフォースが驚いた様子で

「……何故……分かったんだ？私の中にまだバグが残ってたのが……」

そう聞いてきた。

「バグ！？そんな……バグは今私達が戦っているのがそうではないのですか！？」

リインフォースの衝撃的な言葉にリニスが驚いた。

「……ああそうだ……今二人が戦っているのは正真正銘の……闇の書の闇……夜天の書を狂わせていたバグだ……しかし……すでに私自身がバグに侵されてどうにもならない状態だったんだが……それを今ベルフェゴールがそれを私の中から引きずり出してくれた……教えてくれベルフェゴール……何故分かったん

だ？」

リインフォースは淡々とした様子でリニスに説明しながら俺に聞いてきた。

俺はリインフォースの頭を撫でながら

「……………なんでバグがあるか分かったのかっていうと……………前に会った時と同じ嫌な感じがリインフォースからしたんだ……………だからもしかしてってな……………」

そう答えた。

「そ、そうだったのか……………ありがとう……………」

リインフォースは顔を真っ赤にしながら嬉しそうに目を細めて俺を見ている。

「そろそろいいんじゃないですかリインフォース？」

そんなリインフォースを睨みつけながらリニスが怒っていた。

「そ、そうだな……………」

リインフォースはリニスの視線から逃げるように俺から離れる。

「とりあえずベルフェゴール……………これで思い残す事はありませんね……………」

リインフォースが離れた後リニスは悲しげな表情でそうやってきた。

「……………そうだな」

俺は上を見上げながら答えた。

空間が薄れ始めている。

恐らく俺の体が完全に修復されていない為にトランザムバーストの発動時間が短くなったからだろう。

「……………行くのか……………」

リインフォースは表情を曇らせながら俺達を見る。

「はい……………フェイト達を守らないと」

リニスは笑顔でそう答えた。

そんなやり取りを見ていた俺は

「きゃ!?!」

リニスをリインフォースの方に突き飛ばした。

そして……………

「みんなを頼んだ……………」

その一言だけ告げて二人に背を向けた。

「その言葉……………お前に助けてもらったこの命に賭けて守る事を誓おう……………」

そんなリンフォースの声が背後から聞こえる。

どうやら分かってくれたようだ。

「そんな……………待ってくださいベルフェゴール！！私も……………私も一緒に！！」

リニスの悲痛な叫びが聞こえるが無視する。

「ベルフェゴール！！」

空間が消えていくなかで最後に聞こえたのはそんなリニスの俺を呼ぶ声だった。

~~~~~

気が付くと俺の体は赤く輝いていた。

戻って来たんだな……………

俺はサテライトキャノンを構えるGXを見据えてソニック・スマッシュ砲にエネルギーを集中させた。

だが……………

足りない…………

あのサテライトキャノンを相殺、もしくは圧倒するにはまだ足りない！！

俺は守らなきゃいけない…………

俺の後ろにいる大切な人達を…………

俺の後ろには俺の大切な人達がいるんだ!!

なのはにユーノにフェイトにはやてそしてクロノにヴォルケンリッ
ターのみんなにプレシアやアルフにリニスもいる……………あの青い星
……………地球にはアリサやすずか……………それに俺を受け入れてくれた高
町家の人達や海鳴市の人達もいる……………

それにみんなの無事を祈るアリシアだって……………

ここで消えるのは俺とお前……………

兵器だけで十分だ！！

俺はトランザムの残り限界時間分のエネルギーをソニック・スマッシュ砲に集めた。

非常アラート警報が俺の中で鳴り響き、警告を発する。

警告！

ソニック・スマッシュ砲に想定負荷以上の過剰エネルギーを感知

装置の自壊及び爆発の危険あり！

知らねえよ……………

装甲の下で回路が次々とショートし、凄まじい音を立てて全身がスパークし始めた。

もう少し……………

あともう少しだけでいい……………

奴を……………

G Xを倒すまではああああああああああああああああああ！！！！

青白い閃光がきらめいた。

突如GXの方から圧倒的な砲撃が迫って来る！

喰らえ え え え え え え え え え え え
えええ！！

それに合わせて俺は限界を遥かに超えた威力のソニック・スマッシュ砲を発射した。

互いの放つ閃光はぶつかり合い生身の人間ならば失明してもおかしくない閃光を放つと……………

宇宙空間でありながら大爆発を引き起こした。

~~~~~

システム再起動

出力制限及びコントロールシステム

出力30%に低下

システムの68%にダメージ

早急に修復の必要あり

各部動作システム

左腕部喪失

右脚部損壊

左脚部機能不全

各センサーシステム

センサーの76%にダメージ

早急に修復の必要あり

右側メインカメラ喪失

サブカメラ喪失

左側メインカメラ現在稼動中

火器管制コントロールシステム

使用不可

メモリー及びバックアップシステム

異常なし

各種兵装システム

頭部陽電子リフレクター喪失

ストライククロー喪失

ソニック・スマッシュ砲損壊

使用不可

右エナジーウィング喪失

左エナジーウィング使用可

これはもう修復出来ないな……………

俺は残った左側メインカメラで周囲を確認した。

遠くにアースラが見える。

船体が損傷したような感じは無い。

どうやら俺は見事にサテライトキャノンを相殺出来たみたいだ……

……

警告！

出力の低下を確認！

予備動力に変更……

エラー

予備動力の損壊を確認

限界活動時間……推定あと15分

俺の寿命もあと15分か……………

悪くないな……………

俺はみんなを守れたんだ……………

このまま俺という存在が消えてしまっても別に……………ッ!?

アースラがアルカンシエルを起動した!?

まさか……………

まだあいつは生きてるのか!?

俺はアルカンシエルの照準する先を見た。

そこには…………

両腕と頭部が喪失し、サテライトシステムも砕け散ったGXが残ったスラスターを使ってその場から逃げたそうとしている姿だった。

逃がすかよ…………

俺は残り少ないエネルギーをエナジーウィングにまわしてGXの下に飛んだ。

あの爆発で壊れたのか非常警報アラートが弱々しく鳴った。

警告！

エナジーウィング使用により活動限界時間推定5分に縮小

それでも！！

俺は残った右腕でGXを捕縛してアースラにアクセスする。

そして……………

アルカンシエルのシステムにハッキングをかけて発射させる。

リンディさん一人に罪を被せないように……………

すでに照準はあっている……………

だからあとは引き金を引くだけだ！！

先に猫姉妹がアースラにハッキングをかけたおかげで簡単に操作出来る。

全てを俺が終わらせる……………

俺の意志で!!

アースラから白い砲撃が迫ってくる……………

アラートがなっているが気にしない……………

やっと…………… ゆっくり休めそ……………

そこで俺の意識は再び途切れてしまった……………

とある管理外世界

その男は科学者だった。

その頭脳は他の者の追従を許さないほどに天才だった。

しかし男はその事を気にかける事なく自分の好きな研究をただ行うのみ

そんなこの男は今何気なく研究所を離れて一人の従者とともに外の森を歩いていた。

「……………くくく……………久しぶりに外に出るのもいいものだね……………  
研究するのもいいけどたまに歩くと気分が晴れ渡るよ!」

男は上機嫌で森の中を散策する。

「ドクター……………あまり浮かれ過ぎないでください……………」

従者である女性が男を諫めるが男は先へ先へと進み続ける。

「大丈夫さ!歩くのがこんなに楽しいなんて……………ん?なんだ  
いアレは?」

そんな上機嫌な男の目に”ソレ”は見つかった。

「……………見た事もない技術だ……………素晴らしい……………これを  
作った製作者は天才だ!!」

男は目を輝かせて”ソレ”を見つめる。

「ドクター?」

従者は怪訝そうに男を見つめる。

「くくく……アハハハハハハハハハハハハハハハ！これだから研究はやめられないんだ！！これを早速持つて帰つて研究しなきやー！！」

男はただ壊れて動かなくなつた”ソレ”を見つめて笑い続ける。

物語の歯車は回り続ける。

主人公が気が付かぬその間も……



## プロフィール2(前書き)

設定です(^o^)/

## プロフィール2

ゼロ・サーロツズ

階級

二等空尉

外見：若干薄紫色の短髪に青色の瞳で目付きは鋭い（本人も気にしている）、見た目としては龍が如くの桐生さんに似てる。

左目の所に刃物で切られたような縦の傷があり、とても堅気の人には見えない。

身長180？

体重75？

趣味：料理と筋トレ

デバイス

名称

セカンドリバイ

性能

待機形態

剣に蛇が絡み付いたようなペンダント

機動形態

最新鋭の技術が使われている試作品であり、カートリッジシステムが本体の柄の部分に装備されている。

本体の形状は使用者であるゼロの身の丈を超えるほどの大剣

しかし

フライトフォーム

ソードフォーム

ガトリングフォーム

といった三つの形態を持ち、近・中距離で万能的な性能を誇る。

他にも

ソードアーム

ガトリングアーム

という風に部分的に使用する事も可能

また本体は非常に硬く、盾としての役割を担う事もある。

B J 形状

目の所が青色のバイザーが覆われ、額の部分にはV字のアンテナが付く、そして両手足と胴体部分に青色の装甲が装備される。

性格

常に沈着冷静で相手を分析してその情報をゼロに伝える。

音声

どんな時でも冷静で落ち着いた男性の声

シンクス・サーロツズ

階級

二等陸士

外見：膝まである青緑色の髪に黄緑色の瞳、右腰に顔を左だけ隠す様々な仮面が入ったホルダーを装備？左腰には思っている事が出るプラカードがある。

胸のサイズはスバルより1ランク上

身長

162？

体重

抹消済み

スリーサイズ

抹消済み

趣味：日記を書く事（電波受信中）・ゼロの料理を食べる事

デバイス

名称

EZ8（イージーエイト）

性能

待機形態

黒字で大きく『08』と書かれた白いカード

機動形態

最新鋭の技術が使われている試作品であり、カートリッジシステムが右腕の側面に装備されている。

本体は右手の手の甲にあるクリスタル部分

このデバイスには特徴的な装備が多数装備されており、

魔力エネルギー式ライフル（元ネタビームライフル）

魔力エネルギー式マシンガン（100？マシンガン）

魔力エネルギー式ハンドキャノン（108？キャノン）

シヨート・シールド

魔力エネルギー式バズーカ

魔力エネルギー式六連発式大型誘導弾ランチャー（ミサイルランチャー）

対象捕獲用バインドガン（ネットガン）

といった質量兵器を模した武器がある。

これは陸上部隊での次期採用モデルの試験運用として支給されたデバイスであるという事情がある為である。

#### B J 形状

左目に望遠用のスコープが装備され、そこからデバイス同士で無線通信が行えるようにインカムが伸びており、両手足と胴体部分に白色の装甲が装着される。

#### 性格

熱血漢で仲間の必要性や大切さをシンクスにいつも説いている。

#### 音声

熱血な男性の声

第34話（前書き）

7 / 23 修正完了

新章スタート

### 第34話

「……グスツ……お姉ちゃん……お父さん……ひつく……熱いよ……怖いよ……帰りたいよ……」

私は燃え盛る空港の中で一人歩く。

今日はお姉ちゃんとお父さんと一緒に別の世界に遊びに行く予定だったのにいきなりサイレンが鳴り始め逃げる人達の波に飲み込まれて離れ離れになってしまったのだ。

昔から私は転んでは泣き、血を見てさらに泣くほどの泣き虫でいつも誰かが側に居ないと不安になって泣き出す子だった。

そんな私がこんな状況に不安にならないはずもなく、一人でお父さんとお姉ちゃんを探して歩いていたがその間に火の勢いは増し、息苦しさまで感じるようになってきた。

「……うつつ……帰りたいよ……ひつく……」

とうとう歩く気力も無くなりその場に座り込んでしまった。

「……お姉ちゃん……お父さん……」

私は泣きながらお姉ちゃんとお父さんと呼ぶ。

ふと前を見ると目の前に女神像があった。

私は祈った。

お姉ちゃんかお父さんが私を見付けてくれますようにと……………

しかしその祈りを捧げた女神像はあまりにも無慈悲な存在だった。

不意に石が割れるような音が聞こえる……………

女神像はあろう事が祈りを捧げた私に向かって何故か倒れてきたのだ。

「きゃあああああああああ！！！」

もうダメだ……………

そう思い私は悲鳴を上げながら目を閉じてその場で固まってしまっ

た。

お姉ちゃん…………お父さん…………

「……………よく頑張った！もう大丈夫だぞ？」

不意にそんな若い男の人の声が聞こえた。

目を開くとそこには……………

右腕から出ている大きな光の盾で崩れてきた女神像から私を守ってくれている……………怖い顔をしたロボットだった。

「ふえ……………」

私はそんなロボットの怖い顔に驚いて思わず泣きそうになってしま

った。

「ん？どうした？どこか痛むのか？」

ロボットは大きな音を立てながら片腕だけで女神像を横に倒すと光の盾を消して心配そうに私に近寄り、しゃがみ込んで私と視線を合わせる。

そして……………

頭を撫でながらこう言った。

「本当によく……………ここまで頑張った……………本当にえらいぞ」

「あ……………ああ……………うわああああああああああああああああああああああああああ！！！」

それを聞いた私はそのロボットに抱き着いて泣いた。

それは……………今までの恐怖や不安が一気に爆発した結果だった。

「…………よく頑張った」

ロボットはそう言いながら頭を撫で続けてくれた。

「とにかくここから脱出しよう」

泣き止んだ私にロボットはそう言って周りを見渡した。

私もロボットの言う事に賛成だった。

すでに周りは火の海になっており、急いで脱出しないとここも危ない。

でもどうやって脱出しよう？

そう思い私は首を傾げた。

「危ないから少し離れてくれ」

不意に重い金属が擦れる音とロボットの声を聞いて私がロボットの方を見ると胸とお腹を覆っていた部分がズレて中から砲門が見えていた。

私はロボットの後ろに急いで回ると

突然、紅い閃光が辺りを照らした。

そして赤い閃光は炎ごと出口を塞いでいた大きな瓦礫を吹き飛ばして、その奥にあった分厚い壁を何枚も破壊する。

「……………凄い……………」

あまりの威力に驚いていると

「……………ソニック・スマッシュ砲……………俺の武装の中で最高の威

力を誇る攻撃だ」

ロボットはそう言ってまた私の頭を撫でた。

「さあ行こう!!」

そしてロボットは私を抱っこして私を外まで運んでくれた。

そこは一目に着かないような場所で、私達を見ている人は誰もいない。

「……………俺が行けるのはここまでだ」

ロボットは私を地面に下ろしながらそう言うと、再び炎が渦巻く空港の中に行こうとしていた。

私はまた別の人を助けに行くのだと思い

「助けてくれてありがとうございます！あの……頑張ってください！……！」

何故か赤くなる顔を隠しながらお礼をロボットに言っ頭を下げた。

ロボットはこちらに背を向けたまま

「……………ああ！頑張ってくるよ！……！」

そう言っ手を振ってくれた……………

「えへへ……………また会っみたいな……………」

高鳴る胸を押さえながらその後ろ姿を見えなくなるまで見つめていた。

その後私はお姉ちゃんとお父さんと再会する事が出来た。

二人にロボットに助けてもらった事を話すと、お姉ちゃんも何も喋らない赤色のロボットに助けてもらったと教えてもらった。

後日、お父さんが仕事場でその事について聞いてきたらしいんだけど……………

「「存在しない？」」

「ああそうだ……………そんなロボットは質量兵器に含まれるから管理局では使われてないってな……………まあよく考えてみればそうだな……………」

お父さんはそう言って頭を掻いていた。

それじゃあいったいあのロボットはなんだったんだろう？

そんな考えがしばらくの間、私とお姉ちゃんの頭を悩ませた。

~~~~~

「……………いるんだろ？」

少女を助け出したあと再び炎の渦巻く空港の中に戻ったロボットは誰もいない場所に話し掛けると

『こっちは一人助け出したよ……そっちも終わった？』

プラカードでそう答える赤色のロボットが一体、月面宙返りなんて普通ロボットでは出来ないような芸当をして現れた。

「そうか……俺の方も終わった……まったく、反管理局主義ってのは分かるが関係無い一般市民を巻き込むってのはやり過ぎだな」

ロボットはやれやれといった雰囲気で肩を竦める。

すると赤色のロボットは

『すでにドクターが組織を突き止めたらしいよ？』

いつ書き変えたのかプラカードでそう答えた。

「……そうか……それじゃさっさと潰しに行くか……関係無い人達を巻き込んだ罰を受けさせないとな……フッ……俺も傲慢だな……」

ロボットはそう言うのと炎の中に消えて行った。

赤色のロボットはやはり何も喋らずに

『……一人で抱え込み過ぎだよ……”ベルフェゴール”』

そう書いてあるプラカードを持ち上げようとしてやめ、”ベルフエ
ゴール”と呼ばれたロボットの後を追って炎の中に消えた。

第35話（前書き）

7 / 23 修正完了

新章スタート

第35話

「……………これはいったいどういう事なのか説明してもらいたいのだが八神二佐？」

モニター越しに威圧的にそう言うのは地上部隊のレジアス・ゲイズ中將、眉をしかめながら私を睨んでる。

はぁ……………

厄介な事になった……………

どうやらフォワード陣達の初陣の映像がレジアス中將に見つかってしまったらしい。

しかも苦戦している所やエリオが列車から落ちた際の映像まであったらしい。

あの時はキャラが助けなかったら危つく地面に落ちてしまうところやった……………

そしてその原因としてフォワード陣を何故経験不足の状態で前線に

出したのか……………そんな指摘を今私はレジアス中將から受けている。

「はい……………その事に関しましては新たな人員を配置してフォワード陣の経験の無さを補おうと思っています」

私はモニター越しの中將に頭を下げながらそう言つと

「何？またこちらの優秀な人材を引き抜いていくのか？……………何を企んでいる八神二佐？」

レジアス中將はそんな探るような目で私を見る。

「い、いえ……………そんなつもりはありません。ただ、フォワード陣に足りない物を補いたいただけなんです……………実戦経験の無さでせっかく集まってくれた優秀な人材を失わせる訳にはいきませんか……………」

そうレジアス中將に訴えると中將は

「……………確かにそちらにいる人材は優秀な者が多い……………八神二佐、機動六課は一年間だけの試験運用だったな？」

確かめるように私に問い掛ける。

「は、はい……………そうですけど……………」

その問い掛けに疑問を覚えながらも私はそう答えると

「……………一年後にそちらで鍛えられた陸士をこちらに来るよう

にしてくれるのなら人員を出さん事もない」

レジアス中將は手を組んだままそう言った。

これはやられたな……………

一年後、部隊が解散した後の隊員の確保。

レジアス中將は最初からこれを狙ってたんや……………

向こうの方が一枚上手や……………

伊達に長くは生きとらんちゆうこつちな……………

今回は私の負けや……………

ここは大人しく従っておいたほうが得策やな。

ここまでの考えを5秒ほどで終えた私は

「分かりました……………その事について本人達の意味を尊重した上で最良の人材をそちらに派遣したいと思います」

そうレジアス中將に答えて再び頭を下げた。

「……………その約束は必ず守ってもらうぞ?……………こちらから派遣できる人員は一人だ……………後は本局に掛け合え」

レジアス中將はそう言っで通信を切った。

「はあああああああ……………緊張したあ……………」

通信が切れてすぐに私は脱力した。

こんな腹の探り合いなんてしたないわ……………

「お疲れ様なのですはやてちゃん!」

そう言っでお茶を運んでくれるリイン……………正式名 リインフォースツヴァイあの夜天の書事件と呼ばれた事件の発端となった書の管理人格 リインフォースアインの妹的存在であり、ユニゾンデバイスでもある。

あの日、ベルフェゴールのおかげでバグの完全除去に成功したアインはその後遺症でフルバックとして魔法を使って戦う事はできけど、ユニゾン機能が全く使えなくなってしまったのだ。

一つの独立した存在……………

それが今のアインだった。

まあ他にもいろいろあるんやけどね……………

まあそんな訳で私専用のデバイスなんかが必要となった訳なんやけど……………

長くなるからまた今度にしょ……………

けてマッドなプレシアさんやすっかりメカオタクになってしまったアリシアちゃんの事を思い出したくないわけやないよ？

…………… まあ 8 割 そうなんやけどね……………

そんな訳で完成した二代目祝福の風 リンフォースツヴァイ

あの時はみんなで可愛がったもんやな……………

特にシスコンになったリインフォースアインが……

あの時のアインときたら……

キャラ崩壊どころか人格改変のレベルやったでアレ……

それも忘れとこか……

それより今は……

「本局にも人員の派遣を頼まなあかな……」

そう思いながら私は本局に連絡を取った。

そしてあっさりと人員は一人見つかった。

なんでもレジアス中將から連絡があったらしい。

レジアス中將には敵わんなあ……………

そう思った一日やった……………

~~~~~

「うまくいったみたいだなレジアス中将」

俺は通信を切ったレジアスにそう言つと

「他人行儀はよせ……………まったく……………無茶な要求をするもんだ……………」

レジアスは俺を見ながらため息を吐く。

それを見た俺はレジアスに

「だが”アレ”をどうにかするには彼らの力が必要になる」

そう言つて彼らの有用性について説得する。

それを聞いたレジアスはやれやれといった様子で苦笑しながら首を振つた。

「……………確かにそうだな……………彼らには働いてもらわなければならない………」英雄”というのはいつの時代も必要な存在なのだな」  
そしてそう言いながら俺を見る。

「確かにな……………フッ……………だが俺達は”英雄”なんかにはならないし、なる事もこれから先絶対にないだろうな」

俺もレジアスの言う言葉に少し笑いながらも踵を返して扉へと向かう。

「行くのか？もう少し話がしたかったんだがな……………」

そんな俺を見送りながらレジアスはそう声をかける。

俺は一度だけ振り返り

「……………本局所属　ゼロ・サーロツズ二等空尉、これより機動六課の所属となります！！」

そう言ってレジアスに敬礼した。

するとレジアスは

「く、あはははははははははは……そうだったな……  
健闘を祈る!!」

そう言って笑いながら敬礼を返してくれたのだった……

.....これから本番？

レジアスの部屋を出るとそんな言葉がかかれたプラカードを持った一人の少女がいた。

その少女の髪は膝まである青緑色で瞳は黄緑色をしており、右腰に顔を左側だけ隠す様々な仮面が入ったホルダーを何故か持っていた。

「ああ、これでようやくスタートできる」

俺がそう答えると少女は

『全力でサポートするよ!!』

いつの間に書き換えたのかそう書かれたプラカードを俺に見せる。

「……フッ……よろしく頼むよ……… スィンクス・サーロズ二等陸士」

俺は笑みを浮かべながら少女にそう言った。

第36話（前書き）

7 / 23 修正完了

### 第36話

「……………ゼロ・サーロツズ二等空尉、スィンクス・サーロツズ二等陸士、ただ今をもって機動六課所属となります！！」

機動六課の本部で部隊長である八神はやて二等陸佐に敬礼する俺とスィン。

「ようこそ！機動六課へ……………まあ堅苦しいのはここまでにしよか？」

八神二佐は俺とスィンに笑顔でそう言う

「ちょっと聞きたいんやけど……………二人は兄妹なん？」

いきなりそう聞いてきた。

俺は予想通りの質問に苦笑しながら

「ええ……………血は繋がってませんがね」

そう答える。

スインはコクコクと無表情で頷き

『ゼロはお兄ちゃん』

そう書かれたプラカードをいつの間にか上げていた。

「……………そのプラカードは……………いたい……………」

八神二佐は突然現れたスインの持つプラカードを驚いた様子で見つめると

『話すのが苦手だからこれでコミュニケーションを取ってるんです』

瞬きをする間に書かれていた文字が変わった。

「……………も、文字が変わった……………」

八神二佐は目を見開きプラカードを凝視する。

その様子を見ていた俺は

「まあ八神二佐の驚きも分かりますよ……………俺も最初見た時はなんの冗談かと思いましたけどね……………」

そう言つて肩を竦める。

八神二佐は驚きの表情のまま

「不思議な事もあるもんなんやね……………」

そう言って頷いていた。

そして、しばらくの間部隊についての説明を受けていると

「はやてちゃ〜ん！お茶を持ってきたのですう！！おとと！？」

小さな銀髪の妖精のような存在がフラフラと安定しない飛行の仕方でお茶を運んできた。

その光景に驚きつつも危険だと判断した俺は

「大丈夫か？無理はするな」

そう言ってその妖精の代わりにお茶を八神二佐の下に運んだ。

「ありがとうございますのですう！！えっとお……………」

その事が嬉しかったのか笑顔で俺にお礼をいって名前を呼ぼうとした。

しかし今配属されたばかりの俺の名前が分からずに首を傾げている。  
その様子を見ているだけで和んだのだが、そのままにするのはかわいそうなので

「新しく機動六課に配属になったゼロ・サーロツズ二等空尉だ、ゼロって呼んでくれ」

俺は笑顔でそう名乗った。

俺の名前が分かって嬉しいのか

「初めましてです！リインフォースツヴァイなんですう　リインって呼んでほしいのですう　」

リインフォース……………リインは元気よく笑顔で名前を俺に教えてくれた。

「そうか……………リイン、よろしくな」

俺がリインに手を伸ばすとリインは笑顔で俺の人差し指に抱き着いて来た。

何故かは分からないがリインとはうまくやっていけそうだ。

「驚いた……………リインは誰とでも仲良くなるけど、初対面でそこまで仲良くなれるなんて……………ゼロさん、リインとどこかで会った事あるん？」

『そうなのゼロ？』

俺とリインがあまりにも仲がいいので八神二佐とスインが俺達に聞いてきた。

しかし俺とリインは知り合いどころか会った事すらない。

その為俺とリインも首を傾げて考え込む。

「……………まあ仲がいい事はええ事や！これからよろしゅう頼みます」

その様子を見ていた八神二佐は苦笑してそう締め括った。

「それじゃあ今から案内人が来るから施設内を見学しといてな？」

八神二佐はそう言つて藍色の髪に茶色の瞳を持つ青年を部隊長室に招いた。

「…………ソル・ハイランダー陸曹や、いつも実動部隊を運んでるヘリのサブパイロットとして動いてもらてる…………ハイランダー陸曹、施設内の案内と説明をよろしゅうな」

「了解しました」

その青年は八神二佐に敬礼して俺達の方を向くと

「では施設内を案内させていただきます」

そう言っただけ俺達にも敬礼した。

それを見ていた八神二佐とリィンは苦笑してこちらを見ている。

俺はフツと笑って

「よろしく頼む」

ソル・ハイランダー陸曹に敬礼を返した。

~~~~~

「……………現状報告を頼む」

部隊長室を出てしばらく歩いていた時に俺はハイランダー陸曹……
…ソルにそう切り出した。

「……………分かった……………こつちだ」

ソルは周りを確認すると人気のない区画に俺とサインを誘導する。

そしてもう一度誰もいない事を確認したソルは不意に笑顔になり

「遅かったじゃないかゼロにサイン……………息が詰まるかと思ったぞ……………まったく、機動六課結成時に入って来るんじゃないのか？」

親しげにそう言ってきた。

俺は笑みを浮かべて

「悪かったなソル、少し野暮用が重なって入り込めなかったんだ」

謝りながらソルの肩を叩いた。

『違法研究所を二人で叩き潰してたら遅くなっただよ……ごめん』

サインもそう書かれたプラカードを持ってソルに謝る。

「いや、いいさ………それよりも現状報告だったな」

「ああ、頼む」

ソルは笑顔でサインの対応をしていたが急に真剣な表情を浮かべて現在の状況を話始めた。

「……………という訳で今回二人が呼ばれた訳だ」

ソルからの報告には特に重要な事は含まれていなかった。

何か真新しい出来事といったら俺達が来た事くらい……………

「……………特に何もなかったな……………」

俺がそう呟くとソルは

「そう何回も事件があつたら困るぞゼロ？」

そう言つて肩を竦める。

『平和が一番だね』

スインは僅かだが微笑んだように見える。

しかしそれは俺にしか分からないらしい。

他の連中には全部無表情にしか見えないという……………

何故だ？

そんな訳で報告を聞き終えた俺とサインはソルの案内で訓練室へと向かった。

「……………それじゃあ今からゼロさんとサインクスちゃんにお手本を見せてもらいます！！」

高町なのは一等空尉は素敵な笑顔を浮かべて俺とサインを無理矢理お手本を見せるように言ってきた。

マジかよ……………

『いつかいい事があるよ』

orzしたい気分の俺に巻き添いを喰らったサインがそう書かれた
プラカードを見せる。

いや……………なんか微妙だわそのフォロー……………

「それじゃ頑張ってくださいね〜〜〜!!」

そんな高町一等空尉の声が聞こえていきなり廃墟が現れた。

仕方ないか……………

「……………いくぞセカンド!!」

俺はそう言って首にかかっていた剣に蛇が絡み付いたペンダントを握り絞める。

《了解!!スタンバイレディ セットアップ!!》
ラジャー

青色の光が俺を包み込む。

そして目の所が青色のバイザーで覆われ、額の部分にはV字のアンテナが展開する。

さらに両手足と胴体部分に青色の装甲が装備された。

右手を伸ばすと身の丈を超える青色の大剣が現れて握り絞める。

俺はその大剣を一度だけ横に勢いよく振り払って具合を確かめた。

いい感じだ。

スインの方を見ると

《スタンバイレディイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ
イイイイ！！セエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエ
ウウウウウウ！！》

かなり暑苦しそうなデバイスの声が聞こえた。

白い光がスインを包み込む。

そして左目に望遠用のスコープが装備され、そこからデバイス同士
で無線通信が行えるようにインカムが伸びた。

さらに両手足と胴体部分に白色の装甲が装着される。

右手には魔力エネルギー式ライフル、左手にはショート・シールド

が装備された。

準備は万端なようだ。

.....さあ始めようか

.....俺達の戦いを!!

第37話（前書き）

7 / 23 修正完了

第37話

『ターゲットはガジェット？型50機です。頑張ってください』

高町一等空尉からそんな情報を伝えられた。

いきなり50機かよ……………

レジアスの奴俺達の魔導師ランクをどれくらいにして機動六課のメンバーに伝えただ？

とにかく

「いくぞー！ー！」

俺はスインにそう言っていると剣……セカンドリバイを構えてガジェットに突撃をかけた。

そんな俺に照準を合わせたのかガジェットは俺に向かって一斉にレーザーを放つ。

「遅い!!」

しかし俺はそれをすべてかわしてガジェット達よりも高く跳躍した。そしてガジェットが固まっている場所目掛けてセカンドリバイを振う。

その急な攻撃に反応出来ずにガジェット達はセカンドリバイによって真横一文字に両断された。

斬られたガジェット達は切断面から火花を散らすと一斉に爆散する。

最初の一振りで6機撃墜

なかなかの戦果だ。

しかしガジェット達もバカではない。

ガジェット達は攻撃し終わって着地しようとしていた俺を狙う。

「……………流石に危ないな……………フライトフォーム!!」

《フライトフォーム》

それにすぐ気が付いた俺はセカンドリバイを振った勢いを生かしてそのまま背中に装着。

すると装着したセカンドリバイは変形してバックパックとなって空に飛び上がった。

しかし俺の予想外な動きにガジェット達は特に混乱した様子もなく照準を向ける。

その様子を見ていた俺は

「……………だろうな……………だが

俺ばかり狙ってていいのか？」

そう言って苦笑した。

不意にガジェットが一機そのボディに野球ボールほどの穴を開け、そこからスパークし爆発する。

他のガジェット達は慌ててその場から散開して辺りをサーチするが攻撃してきた相手が見つからない。

また一機ボディに穴を開けられて爆散した。

しかし今度は攻撃してきた方角が分かり、その場所をサーチし始める。

《くっ！ガジェットが気が付いたようだ……………》

無駄に熱い声が一つの廃墟から聞こえてくる。

しかしそのマスターはというと……………

その報告をまったく気にする様子もなく、ターゲットに照準を合わせて引き金を引き絞った。

………また命中

廃墟の中には片膝を立てた姿勢でサインが魔導エネルギー式ハンドキャノンを構えてガジェットを狙撃していた。

《ターゲットまでの距離1600………ッ！しまった！？別行動のガジェットの接近を感知！！至急退避だ！！》

EZ8からの報告を受けたサインは頷いただけで退避しようと思わない。

《どうしたんだマスター！？急いで撤退を………ん？ああ………そういう事が………》

EZ8は退避しないサインに疑問を覚えたが接近してきた”ある反応”を感知して納得していた。

《ガトリングフォーム》

不意にそんな声が聞こえた。

何も知らないガジェット達はいまだ廃墟内で狙撃を続けるサイン目指して廃墟を縫うように接近してくる。

それはサインのいる廃墟まで残り300mといった時だった。

「来たか……………ガトリングバースト!!」

構えられていたセカンドリバイにあるガトリングの機関部が唸りをあげる！

そこから凄まじい量の魔力でできた弾がばらまかれた。

スインに接近していたガジェット達は突然現れた襲撃者の放つ凄まじい弾幕の前にバラバラに弾け飛ぶ。

「フツ……………ここは通す訳にはいかないんだよ……………てな……………」

ガジェット達の襲撃者……………ゼロはセカンドリバイをガトリングフォーム……………刃の部分を二つに分けて中に内蔵されたガトリングを露出した形態の攻撃でガジェットを殲滅しながら苦笑してそう呟いていた。

廃墟の中でどこか質量兵器の大砲を思わせるような砲撃音と爆発音が響き渡る。

「ん？スインの方も終わったか……………一人25機ずつ……………案外楽だったな」

廃墟に響き渡るそんな爆発音を聞きながらそう呟いて時間を確かめた。

始まってまだ3分しか経っていない。

「少し早かったか？」

予定より早い段階で俺とスインの実力を彼女らに露呈するのは計画に支障を及ぼすかもしれない……

そう思いながらスインのいる方を見つめていると

「……………戦場で考え込むとはな……………普通ならば死んでいく所だ」

突然背中に鋭い剣を当てられているような殺気を感じた。

「はぁ……………今日は厄日だな……………」

そう言いつつセカンドリバイをソードフォームに戻して……………

右手でセカンドリバイを持ち、振り返りながら背後にいた殺気を放つ相手に斬りかかった。

「あまい！！ふっ！！」

金属同士がぶつかる大きな音が響く。

しかし殺気を放っていたその人物はそれを予想していたのか元から持っていた剣で俺の一撃を受け止めて……………

「カートリッジロード！紫電一閃！！」

剣士の持つ剣から空薬莖が勢いよい排出され、それによって発動した炎を巻き付けて、剣を俺に振り下ろして俺を吹き飛ばした。

「ちい！」

仕方なく俺はセカンドリバイを盾にして攻撃を防ぐ。

しかしそれでも3mくらい後ろに下がってしまった。

「ほお……………紫電一閃を防ぐとはな……………なかなかできるではないか」

それを見ていた襲撃者……………ピンク髪の剣士はニヤリと笑いながら俺を見る。

「……………はあ……………なんでこんな目に合っんだか……………」

俺はため息を吐きながらセカンドリバイを構えた。

「ふふふ……………久しぶりに血肉沸き踊る……………私の名はシグナム！！そして我が愛剣レヴァンティン！！」

そんな俺の様子は知った事かと不敵に笑い名乗りをあげるシグナム
それを見ていた俺はため息を吐きながら

「はぁ…………俺の名前はゼロ…………ゼロ・サーロツズ…………そして愛
剣のセカンドリバイ…………よろしくな」

どこか諦めた感じでそう返した。

その名乗りを聞いたシグナムは

「ふふふ…………いざ…………尋常に…………勝負—！」

そう言って愛剣レヴァンティンを構え、俺に向かって突撃をかけてきた。

第38話（前書き）

7 / 23 修正完了

第38話

《……………ん？これは……………アンノウンの接近を感知した！！
数は2！！その内一つはゼロの方に……………もう一方は……………
……………こっちに向かって来る！！》

Ez8からの報告を受けたサインは武器をハンドキャノンからマシンガンに変更し、急いで廃墟を出た。

その瞬間……………雷光が廃墟を直撃した！

サインが廃墟を出た瞬間に廃墟は崩れ落ちる。

《……………間一髪だったな……………ッ！？上空に敵影確認！！魔力値測定……………これは……………くっ！？識別確認！！フェイト・テストロツサ執務官……………機動性に優れたエースでオールラウンドな魔導師だ！！》

Ez8はスインの為にアンノウン……………フェイトについての情報を逐一報告していく。

一方フェイトは最初の一撃を避けたスインを見てこれから戦う相手の力量を計りつつも心の奥でワクワクしていた。

その間スインはEz8から聞いた情報を元に戦術を組み立てていく。

そして考え出した戦術は……………

スインはマシンガンをフェイトに向けて乱射して近くの廃墟に後退した。

「ッ！？逃がさない！！」

フェイトは突然乱射されたマシンガンに驚いて回避したがスインが後退したのを見て追い掛けると

「いない！？どこに……」

そこにスインはいなかった。

仕方なくフェイトが空に上がる。

「ッ！？」

フェイトは背筋に感じた寒気に反応してその場にとどまった。

その瞬間、砲撃音が響き目の前を魔力弾が通り過ぎた。

飛んできた方角を見るとそこには別の廃墟からハンドキャノンを構えたスインの姿が見える。

しかもこちらが発見するとすぐにまた後退した。

「これは……………ちょっと苦手かも……………」

フェイトは苦笑いした。

~~~~~

鋭い剣撃が何度も私の愛剣と重なり合う。

もう剣を合わせて何合目になるか……………

そう思いながらもシグナムはレヴァンティンを振る。

「……………戦いの中で考え事なんて余裕だな!!」

大剣……………セカンドリバイが私の顔に迫ってきた!

「ッ！？フッ……すまんな、私が最初に言っておいてこれはなかった」

シグナムはそれをギリギリでかわすと苦笑しながらレヴァンティンを構え直す。

「言ったことは守るのが筋だと俺は思うぞ？」

ゼロは笑みを浮かべてセカンドリバイを構える。

「はあああああああああああああああああああああ  
あああああああああああああああああああああ！」

剣撃が私を襲う！

私はその綺麗な太刀筋に見惚れながら受け止める。

## 再びの激突

それで決着が付くなんて考えは無い……

だが……

何故か心が騒ぐ。

いつまでもこうして剣を重ね合い続けたいと……

「行くぞゼロ！ーうおおおおおおおおおおおおおお  
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおお  
！ー」

シグナムは咆哮を上げながら剣を振った。

すると

「来い！！シグナム！！」

ゼロは不敵に笑いながらセカンドリバイを私に向かって振るっただった。

~~~~~

「……………それで？四人とも言い訳する事はあるん？」

今俺達……………俺とシグナム、テストロツサ執務官にスインは部隊
長室に呼び出され八神二佐に怒られている。

何故怒られているのかというと……………

「なんで………なんで5時間もぶっ続けで模擬戦する必要があるんやー!!」

そう、今まさに俺達が怒られている理由はこれだ。

あれから気が付けば5時間ぶっ続けで戦い続けたらしい。

おかげでフォワード陣の練習が出来なくなり、その事が八神二佐に伝わってしまったのだ。

………本当に厄日だ

「聞いとるんかサーロズ二等空尉!!」

「イエス マム!!」

八神二佐に怒られた……………

不幸だ……………

「とにかく、四人は今後一切模擬戦禁止や!!……………反省文も書いてもらうで」

八神二佐はそう締め括り俺達を部隊長室から追い出した。

なんでも今日中に終わらせなければならぬ書類が山のようにあるらしい。

悪い事したな……………

後でなんかお菓子でも作って持っていくか……………

……………反省文片付けて

その後部隊長室にゼロからの差し入れとしてクッキーと紅茶が送られたのだが……………

「……………食つとる場合やない！！残すのも悪いからリイン、全部食べといてな」

と八神二佐が言った事から全部リインのお腹に収まっただらしい。

後でリインが

「また作ってほしいのです」

と俺にお願いしていたのを八神二佐が見ていたらしく

「……………リインを餌付けした」

なんて言ってたよ……………

第39話（前書き）

7 / 23 修正完了

第39話

「……………という事があったのさ」

「くくく……………腹が痛い」

俺はソルと朝食を食べながら昨日の模擬戦の話をしたら笑われた。
「というかそもそも

「お前が止めてくれたらあんな事にならなかったと思うんだが？」
そう言っソルを睨むとソルは苦笑しながら謝ってきた。

こいつ本当に悪いと思ってないな絶対……………

「……………まあこの話はもう終わりでもいいな……………フォワード陣とはどうなんだ？もう顔合わせは終わったんだろ？」

ソルは話題を変えようと俺にそう聞いてきた。

「ああ、そうだな……………朝練の時に顔合わせがあったよ」

俺は露骨な話題の変え方に少しムツとしながらも答える。

ソルの方は話題を変える事が出来てホッとした様子だ。

そんなソルの様子を見てため息を吐きながら俺は今朝の朝練の事を思い出していた。

~~~~~

「……………という事で今日からライトニングにゼロさんが、スターズにシンクスちゃんが入る事になりました。コールサインは二人とも05だから覚えておいてね？」

高町一等空尉がフォワード陣に俺達の説明する。

俺が所属するのはライトニングか……………

確かエリオ・モンディアルとキャロ・ル・ルシエ……………二人とも三等陸士だったな。

そんな事を考えていると

「あ、あの……………ゼロさん……………」

にライトニングの二人から声をかけられている事に気が付くのが遅れた。

「ん？……………ああすまない、少し考え事してて気が付かなかった」

俺は二人に怯えられないように明るく笑顔でそう答えると二人はどこかホッとした表情を浮かべて

「僕の名前はエリオ・モンディアルです。エリオって呼んでください。よろしく願いします」

「え、えと私の名前はキャロ・ル・ルシエです。キャロって呼んでください。よ、よろしく願いしましゅ……………い、いふあいです……………」

自己紹介をしてくれた。

（若干一名舌を嚙んだようだが……………）

どちらも見る限りでは二人ともまだ幼い少年少女だが、成長すればかなり化ける……………

何故かそう思える何かを感じとる事ができた。

まあとりあえず今は自分も自己紹介するべきだと思い

「もう知ってるとは思うんだが俺の名前はゼロ・サーロツズ……………階級は二等空尉だ。気軽にゼロって呼んでくれ、よろしくな」

そう言つて二人の頭を撫でた。

それに気が付いた俺は苦笑しながら手を退ける。

何故かは分からないが昔からの癖でどうしても治らない。

すると無意識なのだとは思うのだが撫でられた二人が同時に……………

「「あ、（お）兄（ちゃん）さん」」

ポツリとそう呟いた。

俺はその言葉を聞いてさらに苦笑しながらも

「兄さんね……………そう呼びたいならそれでいいぞ？好きに呼んでくれ」

二人に冗談っぽく言ったのだが……………

「それじゃあ……………兄さん……………少し恥ずかしいけどなんか本当に兄さんができたみたいで嬉しいです!!」

エリオは笑顔で

「え、ええと……………お、お兄ちゃん……………」

キャロは顔を真っ赤にしながらそう俺の事を呼んだのだった。

その後にキャロの使役している竜のフリードリヒも紹介されたんだが……………

「キユクウ」

何故か俺の頭の上が気に入ったのかいくらキャラが呼んでも降りようとしなくなり、その事でキャラが

「……………やっぱり私には才能が無いんでしょうか……………」

と落ち込んでしまったのをエリオと二人で必死に慰めるのに時間を食ってしまった。

おかげでスターズの二人と話をする事が出来なかったよ……………

まあ遠巻きに見てたんだが、スインの奴なんだかティアナ・ランスター二等陸士に

「……………また個性的な人が入ってきたわね……………」

とため息を吐かれてたぞ？

それとは对象的に

「私スバル・ナカジマ！スバルって呼んでね！！」

スバル・ナカジマ二等陸士からは両手で握手されてたな。

まあサインも案外うまくやっていけそうだな……………会話  
以外は

話する時にプラカードがデバイスが必要なのはスターズの二人にとっては流石に驚きを隠せない事だったらしい。

特にプラカードはどういう仕組みなのかサインに聞いているくらいだ。

「それじゃあ自己紹介が終わったところで早速始めようか？あ、そうだ……………ゼロさんもサインクスちゃんも私の事をなのはって呼んでもらえるとうれしいけど……………どうかな？」

高町一等空尉……………なのはは笑顔でそう言ってきた。

別に呼ぶ事に対して不満は無かったので

「了解」

俺は笑顔でなのはにそう言った。

すると

「怖い顔なのに爽やかな笑顔……………そ、その笑顔は反則なの……………」  
「……………」

なのはは何故か顔を赤くしている。

何故だ？

そしてそれを見ていたランスターが

「……………」もしかしてなのはさんってああいう人がタイプなの……………」

「？」

と小さな声で言っていたが何の事なんだ？

そんな疑問を抱えながら朝練を受ける事となった。

~~~~~

「そろそろ時間だな……………」

ソルは腕時計を見てそう呟いた。

俺はそんなに長く話し込んだのかと思い、自分の腕時計を見るとまだ結構時間が残っている。

それを不思議に思い、ソルを見ると

「はは、俺の出勤時間の事だよ……………ヘリの整備やら装備の確認があるからお前より早いんだよ」

ソルは笑いながらそう言って席を立った。

「それじゃあな」

そう言っつとソルは終始笑顔のまま食堂から立ち去る。

一人残された俺は残った時間をゆっくりと過ごそうとコーヒを飲もうとして固まった。

「なんだあれは……………」

思わずそう呟いてしまった俺の視線の先には……………

山盛り……………いやそれ以上の量の料理を皿に載せてこちらに近づいて来るナカジマ二等陸士とエリオの姿があった。

「あ、兄さん！！隣いいですか？」

エリオは俺を見つけてそのとんでもない量の料理が載った皿を持ってきたま近くに来る。

「……………ああ、構わないが……………」

俺は驚きを隠す事が出来ずにそう言つとエリオは笑顔で俺の隣に座る。

「それじゃあ私もいいですか？あ、私スバル・ナカジマって言います！スバルって呼んでください！」

スバルはそう聞きながら俺を見た。

「ああ、大丈夫だ……………」

俺は少し胸やけするのを感じながらそう答えると

「それじゃあ失礼します！！」

スバルは笑顔で俺の向かい側に座った。

それにしてもすごい量だな……………

俺は半ば呆れたようにその光景を見ていると

「あ、お兄ちゃんにエリオ君！……私も一緒にいいですか？」

「キュウゥ」

キャロとフリードがやって来た。

もちろん断る理由はなかったので頷くと

「それじゃあ………よいしょと」

「キュウゥ」

フリードは俺の頭に、キャロは………

俺の膝の上に座った。

何故？

「……………暖かい……………」

いや、そんな顔を赤くしながら言われても……………

俺はそんなキャラの行動に驚きつつもとりあえず頭を撫でる。

「……………」

キャラは赤くなりながらも笑顔で食事を開始した。

その後に来たスインとランスター……………ティアナが俺と一緒に食事をするエリオ達を見て相席してもいいか聞いてきたのでOKする。
(その時に名前で呼んでほしいとティアナに言われた)

かなりの大人数での食事となったのだがフォワード陣と打ち解ける
いきつけになっただけでなかなかよかったよ……………

こうして今日も機動六課の平和な日常は始まるのだった。

第40話（前書き）

7 / 23 修正完了

第40話

「……………という訳で今日一日私と一緒に職務をこなしてください……………あ、それと私の事はフェイトって呼んでください」

そう言っただけに俺に山のように詰め重なった書類を渡してくるのはテスト
タロツサ執務官……………フェイト

「いや……………それは分かったんだが……………」

「何か問題でも？」

困惑している俺を見たフェイトは不思議そうな表情を浮かべる。

それを見た俺はため息を吐きながら困惑している理由を答えた。

「……………はあ……………なんで俺の膝の上にフェイトが座ってるんだ？」

それは、本当に素朴な疑問だった。

「同じライトニング分隊の所属であるから同じ部屋で仕事をするのは分かる……………だが、何故俺の膝の上に座って仕事をする必要があるんだ？」

俺は膝の上で満足げな表情を浮かべて仕事をこなすフェイトを見ながらもう一度質問した。

というかなんでそんなに満足そうにしているんだ？

するとフェイトが

「……………だつてキャロやエリオが嬉しそうに座っているのを見てたらつい……………座りたくなっちゃって……………」

顔を赤くして照れたような笑顔をしながらそう答えてくれた。

「……………」

あなたは子供ですか？

思わずそう質問したくなつたのを我慢できた自分を褒めたい。

いや……………普通に考えてほしい……………スタイルが良くて美人な妙齡な女性がいきなり膝の上に座ってくる。

確かに役得でリア充と呼ばれる展開なのかもしれないが、何も知らされる事なくいきなりやられたらドキリかフェイトが罰ゲームでやらされているのだと考えるのが普通だ。

答えてくれセカンド……………俺はどうすればいい……………スインは何も答えてくれない……………教えてくれセカンドおおおおおおおおおおおおおおおおおお……………教えるのが普通だ。

「……………すまんテストロッサ、少し聞きたい事が……………す、すまん！」

俺がセカンドにSOSコールしていたらシグナムが部屋に入ってきて、俺とフェイトを見たらすぐに出て行った。

「あれ？シグナムどうしたのかな？」

フェイトはそんなシグナムの行動にキョトンとしている。

まさか……………無自覚なのか？

絶望したあああああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああ！！

俺はそんなフェイトの様子に絶望してしまった。

俺……立ち直れるのか？

そんな思いを抱えながら時間は過ぎていった。

~~~~~

「おいゼロ!!お前テストロッサ執務官を落としたって本当なのか？」

昼食を取ろうと食堂に向かうと途中の廊下でソルに捕まった。

俺はため息を吐きながらソルに何があつたのか説明すると

「……………それなら今食堂に行くのはやめといた方がいい、高町一等空尉とル・ルシエ三等陸士がお前の事を探してたからな……………瞳のハイライトが消えてたからかなりやばいぞ!？」

真剣な表情でそう言われた。

.....俺何したよ.....

「世界はいつだってこんなはずじゃなかった事ばかりだ.....」

思わずそう呟いたのは悪くないと思う。

「何言ってるんだ.....とにかく今はここから逃げるのがお前の寿命を延ばす唯一の手段である事は間違いない!.....こっちだ!!」

ソルはそう言っただけ俺を逃がす為に誘導してくれた。

だが俺達は気が付かなかった。

桜色の魔力でできた球体が俺達の後を追いかけている事に……………

「……………とりあえずここなら大丈夫だろう」

ソルはそう言っで腰を降ろす。

「ここは……………ヘリの格納庫か……………すまないソル……………助かったよ」

俺はソルに礼を言っで隣に腰かけると、ソルは苦笑しながら俺に携

帯食料を投げて渡してくれた。  
どうやらこれを見越して食料を調達してくれたらしい。

「……………本当助かったよ」

俺はそこまでしてくれたソルに感謝しながら携帯食料を袋から取り出して食べる。

「これで貸し一っな」

それは、ソルが笑いながらそう言って携帯食料を食べようと袋を開けた時だった

「……………ん？なんだあれ？……………桜色の魔力球？……………  
いや違う！！あれは……………」

ソルは何かに気が付いて目を見開く。

「見つけましたよ……………ゼロさん……………」

それは今一番聞きたくない声だった。

背中に嫌な汗が大量に出てくる……………

どうか幻聴であってほしい……………

そう願いながら振り返るとそこには

魔王がいた。

「すまないぜ口……………俺はお前を助けられなかった……………」

青い顔をしたソルが俺に謝罪してくる。

だがここまでしてくれたソルに俺は首を振って答えた。

「お話は終わつたのかな？かな？……………それじゃあ次は私のO  
H A N A S Iを聞いてもらうの」

魔王はハイライトの消えた瞳のまま、そう言つて微笑んだ。

その微笑みが俺達にとって死刑宣告の代わりである事は間違いない。

「誰か！助け……………アーツ！！」

最後に見えた光景が俺達に迫る桜色の砲撃だった事をここに残しておく……………

~~~~~

《む？マスター！！ゼロとソルから救難信号が……………何！？ロス
トしただと！？》

「……………」

サインはE z 8からの報告を受けてゼロとソルに通信しようと思っ
たが嫌な予感がしてそれを諦めた。

しかしそれが彼女の命を救う事になると知ったのはそれから4時間
後の事となる。

第41話（前書き）

7 / 23 修正完了

第41話

「……………それでこの惨状か？……………はあ……………どう見てもやり過ぎだろ……………」

ヴィータ副隊長はため息を吐きながら医務室のベットに寝ている俺とソルを見る。

どうやら話を聞くと俺達は砲撃によるノックダウンでおよそ4時間気絶していたらしい。

その話を聞いた俺とソルはこう思った。

……………生きてるって素晴らしい

桜色の砲撃があればどの恐怖を生み出すなんて……………

なのはには悪いが管理局の白い悪魔って犯罪者達に呼ばれるのも頷ける。

というかマジ魔王。

あんなの鬼畜過ぎて涙すら出ない。

誰だあの人にあんな鬼畜砲撃教えたのは……………

……………と言っているのは心の中だけ。

『実際に本人に言ったら？』

そんな言葉がかかれたプラカードが見えた。

そんな事を声に出したら多分今度は本当に死ねる……………って

「人の心を読むなサイン!!」

俺はベットから起き上がってサインにそう言つと

「あら？まだ寝てていいんですよ？」

先程までヴィータ副隊長と話していたシャル先生が起き上がった俺にそう声をかけてきた。

「とりあえず。もう大丈夫ですから」

俺はスインを睨みつつ脱がされていたらしい上着を羽織って苦笑しながらそう答えた。

「あんま無理すんなよ？なんかあつたら困るしな」

ヴィータ副隊長は心配してくれているのかいないのか分からない言葉をかけてきた。

……………この場合は素直に心配してくれているんだよね？

そう思った俺は

「はは、心配かけてすみません……………本当に大丈夫ですから」

とシャル先生とヴィータ副隊長に礼を言っ て医務室を出た。

スインも一緒に行こうとしていたがソルを見てほしいと頼み、俺は一人だけで医務室を後にする。

そしてそのまま寮の自室まで戻ると……………その場に崩れ落ちた。

「……………くっ……………またか……………だがこれだけはみんなに知られる訳にもいかないからな……………」

俺は朦朧とする意識の中でそう呟くとそのまま意識を手放した。

怒ってんだろっな……………” あいつら”

そんな事を思いながら……………

~~~~~

「心配かけてすみません……………本当に大丈夫ですから」

苦笑しながらそんな事を言って医務室を出て行ったゼロというこの新しくライトニングに配属となったこの男は、何故か私に”あの時のなのは”を思い出させた。

私が守る事の出来なかったあのなのはを……………

それにあいつは彼に似てる……………

「どうしたのヴィータちゃん？」

シャルが心配そうに私を見ていた。

「いや、あいつ無理してそうだったから少し心配になってな……  
……ったく、大人しくしてればいいのによ………」

私は不意に浮かんだ考えを打ち消し、シャルに苦笑しながらそう言う。

そう、あいつが………

ベルさんに似てるだなんて何かの間違いだ………

そう思いながら……………

~~~~~

「……………とりあえず理由を聞かせてください」

「詳しく教えてよね！」

「なぜ主が塵芥ごときの攻撃を受けねばならなかったのだ？」

何故か俺は何もない真っ白な空間で正座しながら三人の女性に問い詰められていた。

「……………なんつーか……………喰らっちゃったんだよ……………あの状況

ではまず逃げられないし、かといって”力”を使う訳にはいかなかったしな」

俺は若干押され気味になりながらもそう答えると

「まったく……………気をつけてください」

「そうだよ……………何かあってからじゃ遅いよ」

「御身は我等にとって大切な存在である事を忘れてもらっては困るぞ？」

三人は悲しげな表情を浮かべながら俺にそう言った。

その表情を見ていてだんだん申し訳なくなり俺は顔を俯かせる。

……………すまない事をしたな……………

俺はそう思い彼女達に謝ろうと顔をあげると

「「「……………」」」

目の前に彼女達の顔があった。

.....いや.....近くね？

彼女達は俺の顔からほんの数cmというところにあり、目を閉じて何かを期待しているようにも見える。

「.....あ、時間だ.....」

体が引つ張られる感覚を感じた。

「ッ！？ここまできて逃げるのですか！？」

「ずるいよぉ！..」

「む！？敵前逃亡する気なのか主！？」

彼女達がそんな事を言っているけど俺としてはナイスタイミングだ。

俺は彼女達の頭を撫で、苦笑しながら

「すまん！また会いにくよ！！」

シユテル・ザ・デストラクター
星光の殲滅者

レヴィ・ザ・スラッシャー
雷刃の襲撃者

ロード・ディアーチェ
闇統べる王！！」

そう言って彼女達から離れた。

彼女達は少し不満げな表情を浮かべながらも

「必ずですよ？」

「約束守ってよね？」

「主であっても破る事は許されんからな！」

口々にそう言って俺に手を振ってくれる。

.....破ったら死ぬかもな.....

そんな考えが頭に過ぎりながら俺の意識は薄れていった。

番外編 1 (前書き)

7 / 23 修正完了

番外編 1

コポコポとそんな液体の中で空気が漏れるような音が聞こえる。

目を開くと俺は液体の中にいた。

何故液体の中にいるのか分からない。

周りを見るとカプセルのような物の中に浮かんでいる人らしき存在が見えた。

左手を延ばすとぶつかる何かがある。

俺はそれを……………

そのまま左手でぶち抜いた。

~~~~~

研究室の中でアラートが鳴り響く。

「いったいなんの騒ぎなんだいウーノ」

私を作り出した人………ジェイル・スカリエツィ通称ドクターは興味なさそうな表情でこの騒ぎがなんで起きたのかを聞いてきた。

「研究室内で何らかの事故が起きたようです……………今、妹達に様子を見に行ってもらっています」

私は要点だけをまとめてドクターに話すとドクターは興味を示した様子で

「珍しいね、何故事故が起きたのかその理由を分かる範囲で説明し

てほしいのだけどうかな？」

まるで新しいおもちゃを見つけた子供のような目で私の操作するモニターを食い入るようにじっと見つめている。

「原因は……………不明です。しかし今分かっている現在の状況の説明をさせていただきます。5分ほど前に例の実験体のカプセルから破損を知らせるサインが点滅しているのをモニターを操作していたクアットロが発見し、アラートを鳴らす事になったという訳です」

私はその言葉を聞いて頭の中で研究室内で起きた事故についてまとめて事実のみをドクターに報告した。

「ほう……………それはまた面白い事になりそうだね……………」

ドクターは私の説明を聞いてそう呟くと今まさにその研究室に入ろうしていた妹達が映ったモニターを見つめてニヤリと顔を歪めて笑う。

「ドクター？」

私はそんなドクターの含みのある言い方に疑問を覚えながらも妹達が入って行った研究室内の映像を見ることにした。

~~~~~

「……………まったく……………なんでこんな事をしなければならないのですか？私は頭脳労働しか出来ないのに……………」

クアットロは不満を口にしながら問題の研究室内へと向かう。

「そう言っなクアットロ、私達の中でお前が一番機械の操作がうまいんだ、何か不足の事態があつた時にお前をいちいち呼びに行く時間が惜しい」

トーレはそう言って先を急ぐ。

「確かにそうだな……………我らは戦闘ができるがクアットロのように機械の操作はうまくない」

チンクもトーレの言う事に頷きながらそう言った。

「……………仕方ないですわね……………」

二人にそう言われたクアットロは不満げな様子を見せはするものの、それ以上何かを言う事もなく二人の後を歩く。

そのまま三人は一言もしゃべる事なく事故のあった研究室に着いた。

「……………ここだな……………二人とも準備はいいか？」

トーレは侵入者がいる可能性も考慮に入れ、自身の能力であるIS：インヒューレント・スキルランドインパルスを発動させた。

チンクも自身の固定武装であるスティンガーを指に挟み戦闘準備は万端。

642

クアットロはすでにIS：シルバーカーテンを起動し待機していた。

「いくぞー!!」

トーレはそう言って研究室の中に突入する。

それに続きチンクとクアットロも辺りを警戒しながら室内に侵入した。

トーレが室内に入ると研究室内は事前に調べたデータよりもかなり広く、いくつもの大型のカプセルがいくつも並んおり奥の方はよく見えない。

「……………こんな場所があったとは……………」

トーレは見た事がない研究室内で油断なく辺りを見渡して室内が安全である事を確認し、チンクとクアットロについて来るように合図を送る。

チンクとクアットロもこの研究室に入った事がないのかキョロキョロと周りを見ながらついて来た。

しばらく歩いていると破損を知らせるサインを出していたカプセルを発見し、三人は愕然とする。何故なら発見したカプセルの強化ガラスの部分は粉々に砕け散り、金属部分は凄まじい力を加えられるたかのように激しく損傷していたからだ。

「チンク！クアットロ！離れるなよ！？」

明らかに異常だと感じたトーレは二人にそう声をかけて警戒をさらに強める。

二人はトーレの言う事に従い、三人で固まった。

「ここでは戦いにくい……………一度研究室を出るぞ」

トーレは二人にそう言うと二人は頷き、ゆっくりと後退を始める。

不意に……………重い金属が地面に落ちるような音が聞こえた。

「コッッ!?」

三人はいきなり聞こえたそんな金属音に驚き立ち止まる。

その金属音は何かかなり重い金属製の”ナニか”がゆっくりとこちらに歩いて来るような音だった。

「クアットロ……………シルバーカーテンで私達を隠せるか?」

トーレはクアットロにそう聞くとクアットロは頷き、自身のIS…シルバーカーテンで三人をの姿を隠す。

そして、三人が姿を隠した瞬間に足音の主が現れた。

「なんと……………」

チンクが思わずそう呟く。

普通なら隠れているのに声を出してしまったチンクの事を怒るべきなのだろうが、トーレとクアットロにはそんな余裕はなかった。

2mはあろうかという人型の大きな金属製の体に白と青、それに紫の三色の目立つ色が塗られていた。

さらにその金属製の体からは異様なまでの威圧感を感じる……………

「ッ!？」

一瞬だけ奴と目が合ったトーレの背筋には冷たい汗が流れた。

チンクとクアットロも奴から目が離せないようだ。

……………戦って勝てるのか？

そんな考えがトーレの頭を過ぎる。

実質、奴のあの硬そうな装甲に自分のランドインパルスが通用する

のか疑わしい。

ならば今できる事は一つだ。

トーレは二人に合図を送り、後退させる。

今の現状で奴を倒せないなら一度戻って作戦を考えるべきだ。

そう考えたトーレは自分も下がろうとして

「……………そんな馬鹿な……………」

いつの間にか目の前に立って自分を見下ろす”ソレ”から目が離せなくなった。

「トーレ!!」「」

先に下がっていた二人からトーレを呼ぶ声が聞こえる。

しかしトーレはその圧倒的な威圧感の為か、その場を一步も動く事が出来ない。

「逃げろチンクークアットロ!」うおおおおおおおおおおお
おおおおおおお!!」「」

二人を逃がそうと思ったのかトーレは”ソレ”に対して攻撃を開始した。

ランドインパルスによって向上された機動力を生かしてトーレは”ソレ”に素早く突きや蹴りを放つ。

しかし”ソレ”はその大きな体に似合わぬ身軽さでトーレの攻撃をすべて受け流すか避け、しかもどこか余裕を持って動いているようにも見える。

「ちい！強い……………」

トーレは今戦っている”ソレ”が、明らかに接近戦で自分よりも強い存在である事を自覚して一度距離を開けた。

しかし

「がはあ！…！」

距離を開けたはずのトーレは吹き飛ばされて近くにあったカプセルに激突する。

いきなり吹き飛ばされたトーレには何が起きたのか理解出来ずに混乱した。

トーレはすぐに起き上がり、体勢を整えようと顔をあげると右腕に装備されている大型のクローを展開している”ソレ”がトーレを見ている。

その瞬間トーレは自分を吹き飛ばしたものの正体に気が付く。

だが気が付いた時にはもう遅かった。

「「危ない!!」」

そんな二人の言葉がトーレの耳に届く。

「があ……ああ……」

腹部に激痛が走った。

そんな中、薄れていく意識の中でトーレが最後に見たのは左腕のクローを展開して自分の腹部を殴った”ソレ”の姿だった……………

第42話（前書き）

出来立てです（＾Ｏ＾）／

第42話

「だから無理すんなって言っただろうが!!」

それは部屋で倒れていたところを心配になって様子を見に来たヴィータ副隊長に見つかり、医務室に運ばれた時の言葉だった。

「……………すみません」

再び医務室に運ばれた俺はシャル先生に絶対安静を言い渡されてしまつてベットの上からそう答える。

するとヴィータ副隊長は俺を睨みつけ

「……………次やつたら承知しないからな……………」

そう言つて俺のそばから離れた。

「……………」

俺はその目に込められた”何か”を感じて何も言えない……………」

そして……………ヴィータ副隊長は去り際に

「……………」もう二度とあんな思いをするのはごめんだ
……………」

”普通の人間”ならギリギリ聞こえないくらいの小さな呟きを残して医務室を後にした。

「……………」あんな思い”？”いつたいなんの事なんだ？」

その呟きに疑問に思った俺はしばらく考えていたのだが答えを得るには情報が少な過ぎて諦める。

「……………」暇だ……………仕事がいい……………」

そう呟いた俺は別にワーカホリックを患っている訳ではない。

ただ単に、仕事が溜まっているだけ。

しかも何故か本来俺の下に来るはずのない予算案や部隊活動時の関係各社に送る陳情などの書類が来ているのだ。

たぶんあの狸……………八神部隊長の仕業に違いない。

たぶん初日の模擬戦の事を根に持つてるんだと思う。

「いくらなんでもやり過ぎだろ……………」

俺は今ここにいないあの子狸に小さく悪態を吐いた。

すると……………

不意に扉の方から金属製の何かが落ちる甲高い音が聞こえる。

「なんだ!？」

俺はその音に驚き飛び起きるとそこには……

「……………グスッ……ごめんなさい……ひっく……………」

涙を流して俺に謝るのはがいた。

「え!？」

俺は訳が分からず混乱してしまったが、とりあえず泣いているのはを宥める為に近寄ると

「ひっく……………私……………ひっく……………あんなひどい事を……………ひっく……………」
「めんなさい……………グスッ……………」

もしかしてあの子狸に吐いた悪態を自分の事と勘違いしてるのか？

現在状況を推理するとたぶんこれが一番正しいんだと思う。
ならばこの状態を脱するにはその誤解を解く必要がある。

こんな所を誰かに見られたらまず俺が悪者扱いされるに決まってるからだ。

なのはの足元には恐らく見舞いの品であろうリングゴが三個に果物ナイフ、それらを載せていたと思われる金属製のトレイが落ちていた。
さらになのはは涙を流して俺に謝っている……………

ミッション：なのはを宥める！

少々手間取るだろうが問題ない……………

任務、了解

「……………なのは」

俺はできるだけ優しい声でなのはに話し掛ける。

当然いつもより爽やかな笑顔を意識してな。

なのはは肩をピクツとさせて恐る恐る顔を上げた。

その綺麗な目を真っ赤にして俺を見つめる。

掴みは上々……………次は……………

「さっきの言葉はなのはに向けて言った事じゃないんだ……………」
俺はそう言って優しく頭を撫でる。

なのははそれを気持ち良さそうに受けていた。

トドメだ！

「すまないのは……俺のせいでこんな思いをさせてしまった……
……何か埋め合わせさせてもらえないだろうか？」

するとなのはは輝くような笑顔で

「いいんですか！？……………それじゃあお願いします」

そう言ってくれた。

任務、完了

.....クアットロやドゥーエにこういう場合の切り抜け方を
習ってて良かった.....

いつか礼を言つとかないとな.....

この現場をなんとか切り抜けた俺はそんな事を考えていた。

隣でなのはが

「.....今のうちにゲットするの.....」

と言いながら握り拳を作っている事に気が付かないままに.....

これが後に災害レベルの大騒ぎになるとこの時の俺には想像もつか
なかったがな.....

第42話（後書き）

ご意見感想待ってます。

第43話（前書き）

できました

第43話

「……………どうしてこうなったんだ……………」

俺は思わずそう呟いた。

何故なら俺は……………

「……………次はあそこですよ」

そう言って腕を絡めてくるのはいつものサイドポニーを解いて白いワンピースに身を包むのは……………

そう……あの時約束してしまった”埋め合わせ”を今現在する事になり、二人だけでショッピングモールをまわる事になったのだ。

しかも……

「」「」……ドキドキ」「」

後ろからなんか追って来てる連中がいるんだよ……

詳しく説明すれば顔を赤くした金髪の死神さんと無表情の無口少女とちっこい銀髪の妖精に狸な部隊長だな。

……何故そこにいる。

そんな疑問が俺の頭の中を過ぎるのだが今はどうする事も出来ない。

それに……

なのは何故か上機嫌で俺の腕に豊満な胸を押し付けている為に思考がどうにもまとまらないのだ。

「……………ゼロさん？」

不意になのはが上目づかいに声をかけてくる。

「ッ！？な、なんだなのは……………」

いきなりの不意打ちに驚いて声を詰まらせつつもなのはの方を見ると

「……………さつきから難しい表情をしてるみたいですけど……………私と一緒にいるのは……………嫌……………ですか？」

妙に潤んだ目で俺を見ていた。

「そ、そういう訳ではない……………ただ……………」

俺はそんなのはに様子にさらに声を詰まらせてしまう。

しかしなのははそのまま俺の首に腕を回して顔を近づけ

「ただ？」

俺の言葉の続きを待つ。

いや……………近過ぎだろ……………

そう思う俺の意思を無視してなのは顔をさらに近づけてくる。

そろそろ周りの目が痛くなってきた。

しかも何人かがなのは見て騒ぎ始めている。

物陰に隠れているであろう追跡者達からの視線もなんだか期待感に満ちたものが……………

ん？

その中に黒いオーラのようなものが感じられたような……………

とりあえず、現在状況は……………不利

それに野次馬らしき人達が俺達を囲い始めている。

流石に管理局のエースオブエース 高町なのはの存在は一般人には有名過ぎたか……………

ならば……………

「三十六計逃げるに如かず!!」

「ふえ? きゃあ!」

俺は足に魔力を通して強化し、なのはを抱き抱え（お姫様抱っこ）ながらその場を脱出した。

「逃げた!!」

後ろからちっこい妖精と狸のそんな声が聞こえ……………

「……なのっていつもずるいよね……切り刻もうかな？」

.....

なにやら黒い発言をした金髪の死神さんと何も言わない無口少女

……帰ったらたぶんなのはが死ぬな。

「逃げたぞ!!」

「追え追えええええええええ！」

「こんなスクープを逃してなるものかあああああああああああ
あああああああああああああああああああああああああ
ああああああ！！！」

「ハアハア……僕のはしゃん……」

「あの男……俺のなのはしゃんを……恨み晴らしたるとおお

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおお！！」

俺は吠えるように叫び声をあげて走る足に込めた魔力をさらにあげ

……

「セカンド！！この区画から奴らを振り切って逃げられる最短ルートを！！」

《了解 ラジャー マスター！》

セカンドにナビゲーションを頼んでその場を離脱するのだった。

その間

「……………ゼロさん……………」

俺に抱き抱えられ顔を赤らめたのはが何故か俺の体に密着してきたのは何故なんだ……………

~~~~~

「……はあ……はあ……ここまで来ればもう大丈夫だろう……」

俺はなのはを抱き抱えたままそう言うとなのはは顔を赤らめたまま若干熱っぽく潤んだ目で俺を見つめる。

何故だ？

俺はただなのはと自分を守る為に……

「『『『』なのはしゃあああああああああああ  
ああああああん！』『』『」

[illegible]



……埋め合わせのつもりだったんだが悪い事をしちまったな……

そう思いながらなのはの方を見ると

「……………」あ……………」

声が出なかった。

いや、出せなかった。

何故なら

「……………」ここって町が一望出来て綺麗な場所なんですネ……………」

そう言つて夜に輝く町を見ながら微笑むなのはがとても幻想的だったからだ。

俺は声をかけるのをやめ、なのはの隣に近寄つて一緒にその風景を眺める。

……………悪くない

何故か素直にそう思えた。

「……………いつかまた……………一緒にここに着ませんか？」

しばらく町を眺めていると不意になのはがそう言ってくる。

なのはの方を見るとどこか不安げな表情を浮かべて俺の方を見ていた。

俺は今できる最高の笑顔で

「……………喜んで」

そう言うのだった。

~~~~~

「????」

「……………そろそろ主達のいる部隊　機動六課に着きますね……………
え？分かってます」

そんな風にぶつぶつと呟きながら機動六課に向かう一人の女性。

その髪は特徴的な銀髪で目は赤色。

その手にはアタッシュケースが握られていた。

しかもそのアタッシュケースには手錠が付いており、盗まれないよ

うにしている辺り中身はかなり重要な代物である事が伺える。

「……………せつかくユーノやクロノが苦勞して手に入れる事に成功したのですから必ず主達にお届けしなくては……………」

”プロジェクトMS”とやらのデータを……………」

女性はそう呟きながら足早に歩き続けた。

また新たな物語の歯車が回り始める。

静かに.....そして.....着実に.....

第43話（後書き）

皆さんのご意見ご感想待ってます。

第44話（前書き）

遅くなりました（ノ
丁）

第44話

「……………助けてくれソル!!」

そう言つてソルの部屋に駆け込む俺。

「おいおい……………今何時だと思つてんだ……………」

ソルは俺の突然の来訪に驚きながらも壁にかかっていた時計を見ながらそう言つ。

そうソルに言われた俺が現在の時刻は午前0時をちょうど過ぎたところだ。

「……………こんな時間に来たのは謝る……………だがソル……………俺を匿つてくれ……………他に頼れる奴がないんだ……………頼む」

しかしこのまま引き下がる訳にもいかず、俺はソルに頭を下げた。

「……………そこまで言われてもな……………そもそもお前をそこまで追い詰める相手はいつたい誰なんだ？外見的特徴とか教えてくれよ」

そんな俺を見ながらソルは困ったような表情を浮かべてそう聞いている。

少し迷いながらも俺は答えた。

「……………ああ……………まず明るい茶色の髪をサイドポニーにした若い女性と長い金髪の若い女性……………」

「ちょ、ちょっと待て!？……………マジか？」

しかしその説明は驚愕の表情を浮かべるソルに遮られる。

しかもソルの顔がだんだん真っ青に……………

「……………すまんゼロ……………俺にはお前を助けられない」

ソルはいきなりそう言うのと俺に頭を下げてきた。

「な、何故だソル!？お前しか俺にはいないんだ!……………あの日……………なのはへの埋め合わせをした日からなのは俺に対する行動がおかしいんだよ!いきなり廊下で抱き着かれたり、訓練中事故を装って俺にキスしようとするんだ……………それに対抗してなのかは知らんがフェイトも……………書類作成なんかの事務処理の間ずっと俺の膝の上に乗るし、しかも何故かダイレクトに俺の大切な部分にスリスリと笑顔で腰を擦り寄せるんだよ……………これってセク

ハラで訴えられるよな!？」

「……………それは……………うん……………勝てると思うぞ?……………それで今回お前が逃げている理由は?」

どうやら俺の訴えはソルに伝わったようだ。

ソルは引き攣った表情を浮かべながら話を先に進めるように俺に促す。

俺は頭を抱えながらソルに

「……………部屋で……………いや、ベッドでフェイトに待ち伏せされた……………しかも驚いて部屋を出たらなのはにバインドで捕まりそうになって部屋に連れ込まれるところだった」

そう答えた。

その瞬間ソルは俺の肩を叩き

「……………喰われて来い」

凄くいい笑顔をしながらそう言ってきた。

「ま、待て!?!それはどういう事だ!?!」

焦る俺はソルのその言葉に驚きながらもソルの肩を掴んで揺する。

しかしソルはどこか諦めたような表情を浮かべて

「……………無駄だよゼロ……………外堀は着実に埋められているからな……………」

そう言って首を振った。

「……………なん……………だと……………」

俺がそう言って驚愕の表情を浮かべているとソルはフツと笑い

「……………だいたいゼロが美女とか美少女に関わった時点でアウトなんだよ……………この無自覚一級フラグ建築士が……………」

そう言って俺から離れる。

「一級フラグ建築士？なんだそれ！？そもそもフラグってなんだ！？なんだ！！」

俺はソルに言われた事に頭を悩ませていると

「早く帰ってくれゼロ…………明日も早いんだろ？確か…………ホテルアグスタの警備だったか……………頑張り過ぎて体力使い果たすなよ？使い物にならなくなるのも勘弁な」

そう言つてソルは扉を開いた。

すると

「あ、やっぱりここにいたの」

「ゼロ、早く戻ろっ?」

悪魔と死神の声が聞こえる。

扉の方を見ると凄くいい笑顔のなのはとフェイトが……………

「緊急離脱!」

俺はそう言って窓に向かって走った。

しかし

「「バインド」」

「のわぁー!!」

俺は桜色と金色のバインドに身体を拘束されてその場でこけてしまった。

そして……………

二人のそんな嬉しそうな声が俺の耳に聞こえる。

そして思った。

明日干からびてるかもな……………

その夜、俺は二人の宣言通り一晩中寝かせてもらえず、寝不足のままホテルアグスタの警備に着くことになった。

理不尽だ……………

第44話（後書き）

ご意見ご感想待ってます。

番外編 2 (前書き)

できました(^o^) /

番外編
2

[illegible]

ドクターは狂ったように笑いながらそう言って、
”ソレ”の映るモニターを凝視する。

モニターの中では”ソレ”が近づいて来れぬようにチンクが固定武装であるスティングガーを投げ、自身のISランブルデトネイターを使って爆発させた。

しかし

エネルギーを制御するジェネレーターのキーンという甲高い駆動音が聞こえて爆煙から”ソレ”が飛び出してチンクを殴り飛ばす。

「かはあ……」

「チンク!!!」

元々小柄だったチンクは軽々と吹き飛ばされて背後にあつたカプセルに激突して意識を失つた。

これによりモニター上で立っている戦闘機人はもはやクアットロのみだ。

[illegible]

そのクアットロもいつもの人を見下すような態度ではなく明らかに”ソレ”に対して怯えている様子が分かる。

”ソレ”はただクアットロを見ているだけのようだがあれだけの戦闘能力を見せつけられればその恐怖は計り知れない。

「も、もう……ダメ……が、我慢できないですわ」

不意に”ソレ”に見つめられていたクアットロが内股を擦り合わせ始めてそう呟く。

その顔には羞恥心と恐怖心で赤くなったり青くなったりしている。どうやらクアットロはあまりの恐怖に生理的現象を催してしまったようだ。

しかもクアットロは先程のトーレ達の事もあり迂闊には動けない。

まさに八方塞がり。

そんな中でもクアットロは活路を見出だそうと焦って空回りを続ける頭で必死に考える。

しかしそんなに簡単に策が思い付く訳もなくただ時間だけが過ぎていく……………

「……………も、もう限界……………あ、あああああああああああああああああああああああああ！！」

クアットロはとうとう我慢仕切れなくなり、その場で立ったまま漏らしてしまった。

その様子はバッチリと目の前にいる”ソレ”に見られながら……………

「……………うぐっ……………ひっく……………ひっく……………も、もうお嫁に行けな
いですわ……………グスッ」

クアットロは泣きながらそう言って俯いた。

確かにこれは屈辱的だ。

モニター越しにクアットロを見つめていたウーノはそう思った。

自分達戦闘機人は戦う為に造られた存在だ。

であるにも関わらず敵である”ソレ”のあまりにも理不尽な強さに
翻弄され恐怖し、その恐怖のあまり”ソレ”の前で失禁してしまう

.....

「.....行かなくて良かった.....」

ウーノは自分にしか聞こえないくらいの小さな声でそう呟く。

「.....ほう.....君がそう言うとは.....珍しいねウーノ」

しかしその呟きはしっかりとドクターに聞かれていたようでニヤリ
と笑うドクターにウーノはそう言われた。

ウーノは思わず顔を逸らしてモニターを見つめる。

そんなウーノの様子を見たドクターも笑ったままモニターを見つめ
た。

「…………グスッ…………ひつく…………ひつく…………」

モニターの中ではクアットロはいまだに顔を俯かせて泣いている…

……

完全にその心が折れていた。

故にその場にいるのは戦闘機人クアットロではなくクアットロという名の少女ただ一人。

”ソレ”はそんなクアットロを見つめ……………

「…………え？ええ！？」

近くに置いてあった布をクアットロの体に巻き付けてお姫様抱っこで抱えて歩き出した。

「なんで……………」

クアットロは思わず”ソレ”の顔を見つめる。

それは信じられない事だった。

今まで戦闘していた”ソレ”がいきなり自分を抱えて歩き出したのだ。

困惑しない方がおかしい。

「いったいなんですの……………」

思わずクアットロがそう呟いてしまったのは仕方のないだった。

「……………敵対する理由が無いからだ」

「ッ!？」

いきなり”ソレ”がそう言う。

驚いたクアットロは目を見開き”ソレ”を見つめる。

”ソレ”はそんなクアットロの目を見て

「俺の名は……ベルフェゴールだ……多分な」

そうやって”ソレ”……ベルフェゴールはその無骨な機械の体から、人間の肉体に変化した。

[illegible]

クアットロは絶叫した。

番外編 2（後書き）

ご意見ご感想待ってます。

第45話（前書き）

恋姫（中の人）注意
www

第45話

『生きてる?』

それはホテル・アグスタに来てスインに見せられたプラカードだった。

「大丈夫ですか兄さん……」

「お兄ちゃん……」

ついでにエリオやキャロまで心配そうに俺を見てくる。

しかし俺はそのスイン達の問い掛けに答える事は出来ない……

何故なら……

「……………か……………枯れる……………」

俺は”とあるモノ”がとんでもなく枯渴状態になっていたからだ。

多分この任務中俺が役に立てる事はないだろう……………

それほどまでなのはとフェイトの攻めは激しかったのだ。

《ふむ……………これは治療の必要があるな……………マスター、針を
用意してくれ》

その様子を観察していたサインのデバイスであるEz8はマスター
であるサインに針を持って来るように指示を出した。

その指示を受けたサインは頷き、胸元から布に巻かれた細長い何か
を取り出し、布を開く。

すると中から出て来たのは……………

金色の針だった。

「？……それ……何に使うんですか？」

サインの持つ針をキャロは不思議そうに見つめながら聞くと

『……………ゴットヴァイダー五斗米道』

サインはそう書かれたプラカードをキャロとエリオに見せて人差し指と親指で針を摘み上げ魔力を込めていく。

そして……………

(ここからは脳内補填でご覧ください)

治癒………病魔覆滅！げええええんきになああああああ
 治癒………病魔覆滅！げええええんきになああああああ
 治癒………病魔覆滅！げええええんきになああああああ

Ez8が無駄に熱苦しくそう叫ぶとサインは俺のツボに魔力が籠り
光り輝く針を刺した。

もちろんその間サインは無表情である。

病魔退散

最後にE Z 8の決めゼリフも決まり、スインもどこか満足そうだ。

「すいすい……」

「初めて見ました……」

一連の行動を見ていたエリオとキャロは驚きを隠せない。

それもそのはず、こんな治療の仕方なんてまずこの世界には存在しないからだ。

「これでよし……気分はどう？」

針を布の中に仕舞ったサインはそう書かれたプラカードを俺に見せ

おかげで俺は今……………多分野獣になれる。

というかサインを見てたらムラムラと……………

「ま、まさか……………最初からこれが狙いでツボを……………」

俺は驚愕の表情を浮かべてサインを見ると

『……………ニヤリッ』

そんなプラカードを持ったサインが俺に近寄ってきた。

野獣になりかけて残り少ない理性で俺に出来た事といえば……………

「……………戦術的撤退!!」

「逃げた!!」

エリオとキャロが何か言っているが気にしない!

また喰われるのはごめんだ!!

しかし

《バンドガン発射》

「ぬおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおお！！」

あっさり俺は捕まった。

『捕獲完了』

《諦めるんだな》

いつの間にかセツアップしていたサインとEz8にそう言われた
俺は絶望し

「……………この世界には神はいないっ」

思わずそう呟いたのは悪くないと思う。

「……………みんな〜！！敵が来たよ〜！！！」

不意にそんなスバルの声が聞こえた。

「セカンド！！セットアップ！！」

《ラジャー！スタンバイレディ セットアップ！！》

俺はセカンドをセットアップしてバインドを引きちぎって飛翔する。

そして……………

「前言撤回！この世界には神はいる！！」

そう言ってガジェットに突撃をかけたのだった。

第45話（後書き）

ご意見ご感想待ってます。

第46話（前書き）

できました！（b^ー。）

第46話

そこは人知れず誰も立ち寄らない森の中にある何かの研究施設だった。

しかし今はその施設が機能している場所はほとんど無い。

何故なら………その施設は現在とある存在に襲撃を受けているからだ。

襲撃のいたる所から爆発が起き、中にいた研究員らしき人達が鮮血を飛び散らせバラバラに吹き飛んでいく。

一人の男性研究員が襲撃に対する恐怖に震えながら非常用通路を駆け抜ける………

しかし

青い小型の飛行物体から放たれた緑色のレーザーがその足を撃ち抜き消し飛ばした。

研究員は足を失った痛みに悲鳴をあげながら倒れ込む。

だが、そんな状態になっても諦める事なく研究員は動く両手を使い這って逃げようとする。

その時だった。

突然鳴り響く轟音とともにその研究員に大量の銃弾が降り注いだ。

いきなりだった為、研究員は反応出来ずその身体に大量の穴を開けられて絶命……………

その顔には何故自分が死んだのか理解できていない様子だった。

不意にジェット音が鳴り響き、赤い影が研究員の側に降り立つ。

それは……………ロボットだった。

そのロボットの外観的特徴をあげるとすれば左手に装備されたシールドと二門のガトリングが一つとなった武器だろう。

ある意味そのロボットの象徴といっても過言ではない。

その他にあげるとすれば右腕に装備されたナイフと脚部に装着された四角い箱のような装備。

背部には赤い大きな一对の翼が付いたバックパックがある。

そして何より一際目を引くのは頭部のV字のアンテナに目のようなデュアルセンサー、両サイドに付けられた特徴的な大型のインカムだ。

その赤いロボットは絶命した研究員を注意深く観察し、油断なく左手のガトリング砲を構え続けた。

またジェット音が非常用通路内に鳴り響く。

赤いロボットはその音に反応してガトリング砲を音の方に向ける。

しかしその構えたガトリング砲はすぐに下げられた。

何故ならその音の主もまたロボットだったからだ。

そのロボットは青く頭部はどこもなく赤いロボットによく似ており、その両手にはトリコロールカラーのライフルが握られている。

そして背部には4対の青い翼……………研究員の足を撃ち抜いた小型飛行物体が装備されており、大型の砲門が1対その外側に装備されていた。

2機のロボットは互いを見つめ合つと青いロボットが首を振つて通路の先を指し示す。

すると赤いロボットはゆっくりと頷き、翼を広げて奥へと飛び去つて行った。

青いロボットもその特徴的な翼を広げ奥へ進もうとして……………

見つけた。

一連の行動を映し出していたカメラの存在に……………

青いロボットは肩を竦め、右手に握られたライフルをおもむろに持ち上げると……………

緑色の光が画面を覆い隠し、画面は砂嵐しか映さなくなった。

~~~~~

「「「……………「「「

明かりを消し、暗くなった部屋でその映像を見ていた三人……………なのは、フェイト、はやては思わず沈黙してしまっていた。

リインフォースアインス……あの闇の書事件の際にベルフェゴールの活躍によって消滅を免れた初代リインフォース。

そのリインフォースアインスが機動六課に持ち込んだこの映像は”プロジェクトMS”と呼ばれるプロジェクトによって新たに生み出された2機のロボットの姿を僅かな時間ではあるものの映し出す事に成功している貴重な映像なのである。

「……………ベルさんと同系統の機体……………」

フェイトは何かを押し殺すように低い声でそう呟く。

「そうやね……………ベルさんと同じ……………確か……………」ガンダムタイプ”ちゅう種類やな……………昔ベルさんの中でデータを見てたりニスがそう言ってたわ……………」

はやても途切れてしまった映像を食い入るように見つめながらそう言った。

「……………」

そんな中、なのはは一人沈黙したまま砂嵐しか映っていない画面を見つめ続ける。

そんななのは様子を心配したフェイトがなのはに近づくと

「……………ベルさん以外の”ガンダム”は必要ないの」

なのはは笑顔でそう言った。

その笑顔にはいったいどんな意味が込められているのだろうか……………

「な、なのは……………」

その異様な光景にフェイトは思わず後ずさる。

「……………不屈の心はこの胸に……………だよねベルさん……………私頑張ってるよ?……………」

なのははどこか虚ろな表情でそう呟くのだった。

これはホテル・アグスタへ出撃する30分ほど前の部隊長室での出来事である。

## 第46話（後書き）

ご意見感想待ってます。

## 第47話（前書き）

とりあえず出来ていた分だけ更新です（  
。  
。  
）  
「

## 第47話

「これ多くねえか？」

それはガジェットに対して攻撃しようとセカンドを構えた俺のセリフだった。

目の前にいるガジェットは1000や2000どころの問題ではなく、恐らく10000や20000はいる。

「……………どこの軍事施設を攻め落とす気だ……………」

思わずそう呟いてしまったのは仕方がないと思う。

《ガトリングフォーム》

セカンドは大剣の形状から刃を縦に割れて下に折れ曲がるように変

形し、地面に向かってその刃を突き刺す。

そして中から無骨なガトリング砲が現れる。

「……………まあ……………密集してたのは間違いだったな」

俺はニツと口だけで笑うと先頭のガジェットに照準を合わせトリガーを引き絞った。

オレンジ色の光が俺を照らし、ガジェットのボディにいくつもの弾痕を刻んで爆発させていく。

ガトリング砲の機関部が唸りをあげて稼働し、早いリズムを作るの小刻みな振動を俺に伝えてくる。

その振動は今の俺にとってどこか心地よく感じ……………

「墜ちろおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお  
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお  
おおおおおおお！ー」

思わず叫んでいた。

《マスター 味方からの通信を受信》

不意にセカンドからそう伝えられる。

それを聞いた俺は次々に撃たれ爆散しながらも物量にものをいわせて迫り来るガジェットを見据えて……………

ガトリング砲を停止させた。

すかさずガジェット達は俺に攻撃しようと殺到してくる。

だが俺はゆっくりとセカンドをソードフォームに戻して方に担ぎ

「……………もう少し相手を疑ったらどうだ？」

そう言って笑った。

不意にボシュツという気の抜けるような音が連続して俺の後ろから聞こえる。

そしてガジェット達が俺に接触する50m付近でいきなりガジェット達は爆発して爆煙に包まれた。

「ナイスタイミングだサイン」

俺は後ろで魔力エネルギー式六連発式大型誘導弾ランチャー……………通称ランチャーを構えるサインにそう言ってサムズアップする。

それを見たサインが頷くと

《前方に敵機存在を確認！！まだ終わってないぞ二人とも！！》

EZ8がそう言って俺達を注意した。

その指摘を聞いた俺はサインの前に素早く移動してセカンドを地面に突き立てサインと二人で隠れる。

すると隠れた瞬間に何発ものレーザーが盾となったセカンドにぶつかり、火花を散らした。

ガジェットの攻撃をやり過ごした俺はスインに

「フォーメーション 3 6」

そう呟く。

「……………コクッ！」

するとスインは力強く頷いて素早くセカンドの影から飛び出た。

《装備をランチャーからマシンガンに変更！！》

Ez8がそう言ってスインの装備を変更する。

スインはマシンガンを握り絞めると近くにいたガジェット達に照準を合わせて発砲していく。

いきなりの攻撃に対応できなかったガジェット達は次々と穴を開けられて沈んでいった。

しかしその間スインは前進を続ける。

それこそガジェット達に周りを囲まれて動けなくなるまで……………

「……………」

《……………頃合いだな》

何も話さないスインに代わり、Ez8がそう呟いた。

現在のスインの状況はかなりまずい。

地面以外、前も後ろもガジェットだらけで逃げ場がどこにも無いのだ。

しかしスインやEz8には焦る様子はない。

それどころか余裕すら感じられた。

ガジェット達はなんの疑いを持つこともなくスインにレーザーを放とうとエネルギーをチャージし始める。

《やはりなにも考えられない機械にはスイン達は強過ぎるな……………》

不意にE z 8がそう言った。

《ソードアーム ガトリングアーム セパレート》

そんな声がスインの通ってきた場所から響く。

《来たか！！マスター！！》

「……………コクリ」

E z 8の合図にスインは頷いてその場で飛び上がる。

するとちょうどスインが飛び上がった場所に黒い何かが勢いよく飛び込んできた。

「……………ッ！」

スインはそれをキャッチすると左腕に装備されたショート・シールドをリリースするとキャッチした黒い物……………セカンドのガトリング部分を握り絞めてマシンガンを持つ右手とともに、まるで十字架に架けられた罪人のように広げて……………己自身をねじるように回転させながら発砲し始めた。

しかもただ単に回転するだけでなく、横捻りや縦回転もしながらである。

その予想外な攻撃方法にガジェット達は成す術もなく破壊され、スインが着地を決めた時には数えるほどに数を減らしてしまっていた。

「……………ご苦勞様」

俺はソードアーム形態になってスインに近づくとガジェット達を切り裂きながら近づきそう言つと

《あゝ二人に残念な知らせだ……………ヒヨッコ陣のところに増援が出現したい》

EZ8が通信で俺達にそう伝えてきた。

「「……………はあ……………」」

俺とスインは同時にため息を吐く。

俺達は肩を竦めながらヒヨッコ達のお守りをするために移動を開始した。

しかし

それが新たな悲劇の引き金になるとはこの時の俺とスインには想像する事はできなかったのはしょうがない事だった。

## 第47話（後書き）

ご意見ご感想待ってます。

番外編 3 (前書き)

できました

### 番外編 3

「新しいタイプの戦闘機人？」

それは”ベルフェゴール”と名乗る男とともにドクターの下に戻ったトーレ、チンク、クアットロの疑問の言葉だった。

「そう！これこそ私の最・高・傑・作！！戦闘機人の固有スキル……インヒューレント・スキルに完全なる肉体の機械化を組み込んだ戦闘機人のある意味での最終形態なんだよ！！」

そんな三人をよそにドクターは一人熱弁を奮つ。

「私はこのISの事を”MS化”と名付けたよ……まあもつとも元となる素体があったからこそ出来たことなんだけど……私にも分からない未知の技術があったなんて……まったく心が震えるとはまさにこの事だ……くくく……アッハハハハハハハ！！」

しかもかなりテンションが上がり過ぎてマッドサイエンティストモードに入り始めてすらいる。

一方そんな紹介を受けていたベルフェゴール……つまり俺はという……

「……………よつと、これで少しはマシか……………」

ドクターに与えられたボディースーツを脱ぎ捨ててドクターの着ているスーツの予備を身に纏っていた。

「いったい何をしているんですの？」

そんな俺にクアットロが疑問に思い聞いてきたので

「いや……………だってさ……………ボディースーツだけで過ごすってどんな変態的思考なんだ？」

普通にそう返した。

それを聞いたチンクとトーレは自身が纏うボディースーツを改めて見直してみると……………確かにこの格好で外を出歩いている人はいない。

「……………なあチンク……………私達は……………変態……………なのか？」

「……………否定は……………できないな」

どうやらチンクとトーレは自身の格好がかなりヤバイ事なのだと自覚する事に成功したようだ。

二人の背中にはどこか影が入り始めている。

クアットロはそんな二人を見つめながらこう呟く。

「……………私……………明日からこのボディースーツ着るのやめるべきですわね……………」

それは、まったくの正論だった。

しかし、それに反対する者もいる。

「何を言っているのですかあなた達は！！……………せつかく……………せつかくドクターが不眠不休で制作してくれた物に不満があるとしても言うのですか！？だいたいあなた達はドクターに甘え過ぎなのですよ！いいですか？ドクターは……………」

ウーノはドクターに対して不信感を募らせる妹達にドクターがどれほど自分達の為に行動しているのかを語ってくれた。

自分達を作り出した時にどれほどの愛情と情熱を注いできたか……

まだ何も分らない自分達を大切に育て上げてくれてきたか……

そのまま5時間も語ってくれたよ……

そして、しばらくその話を聞いていた俺がつい……

「なあウーノ……今思ったんだが  
アンリミテッド・デザイア……その話を聞く限  
りじゃあドクターの本質は無限の欲望じゃなくて無限の父性になる  
んじゃないか？」  
アンリミテッド・ファーズ

なんてくだらない事を言ってしまった。

「……確かに」

しかもその俺の発言にトーレにチンク、クアットロも頷いてしまう。

ウーノはあまりのくだらなさ固まってしまったようだ。

しかし

それを真に受けてしまった存在が約一名、存在してしまった。

「無限の……父性？……素晴らしい！！なん

アンリミテッド・ファーマー

て甘美な響きなんだ！胸が……胸が焼け付きそうだああああ  
ああああああああああああああああああああああああああ  
あああああああああああああああああああああああああああ  
あああああああああああああああああああああああああああ  
あああああああああああああああああああああああああああ  
ああああああああ！！」

ドクター………ジェイル・スカリエツティは今この瞬間に覚  
醒した………

無限の欲望から無限の父性へと………  
アンリミテッド・デザイア      アンリミテッド・ファーマー

「こうしてはいられない！！まだ見ぬ娘達が私を待っている……  
…1週間で完成させてみせるぞおおおおおおおおお  
おおおおおおおおおおお……  
……あ、トーレ、クアットロ、それにチンク、私の事はパパでいい  
からね？ぬおりやああああああああああああああああああああ  
ああああああああああああああああああああああああああああ  
ああああ！！！」

そして、そんな捨てゼリフを残してドクター……いや、親父殿は  
走り去って行った。

「ドクタああああああああああああああああああああああああ  
ああああああああああああああああああああああああああああ  
ああああああああああああああああ！！！」

ウーノさん大絶叫

トーレ達も今起きた事について行けずに混乱している様子だ。

そんな中、俺はというと……

「……………俺の……………せいなのか？」

首を捻りながらそう呟くのだった。



番外編 3（後書き）

ご意見ご感想待ってます。

## 第48話（前書き）

完成（「。」「」

## 第48話

「……………スバル!!」

「OKティア!!」

私…………ティアナ・ランスターの指示で親友兼同僚のスバル・ナカジマがガジェットに向かって突っ込んで行った。

その後ろからスバルの死角から近寄るガジェットを私はクロスミラーージュで撃ち抜いていく……………

「待ってくださいティアナさん！僕も行けます!!」

「フリードも行けます!!」

不意にライトニングの二人からそう言われるが私は

「今は力を温存してて！たぶん後で増援が来るわ！」

そう言って踏み止めた。

すると二人は

「了解です！」

「了解しました！」

私の言葉を疑う事なく後ろで待機する。

「……………ごめん」

私は小さく二人に謝り、クロスミラージユを握る力をさらに込めてガジェットを照準していった……………

なんでこんな戦力を分散するような真似をしたのか……………

それは私が”凡人”だからという理由に行き着くことになる。

元々私はエリートであつた兄が行方不明となり、その上司による心ない罵声を覆す為に執務官を目指し、管理局の地上部隊に入隊した。

しかし現実はそのままで甘くはない。

私には空戦の適性はなく、魔力量もそれほど多くないと言われて落ち込んだのもあの時の苦い思い出だ。

しかし私はそこで同室となつた現在のパートナー兼親友であるスバルと出会い、苦しい訓練を受けてついに……………魔導師ランクB

まで上がる事が出来た。

しかもその試験で私とスバルは”エースオブエース”高町なのは一等空尉にスカウトされたのだ。

『二人の実力を見込んでなんだけど新しく出来る部隊に参加して欲しいんだ。スバルは私の教導が受けられるし、執務官志望のティアナちゃんも現役執務官のフェイトちゃんからいろいろと学べると思うんだけど……………どうかな？』

そんな言葉でスカウトされた私達は断る理由はなく、逆に手を叩き合って喜びを表現した。

しかし……………そこは私にとって場違いな場所だった。

集まったメンバーがエリート過ぎたのだ。

僅か9歳にして魔導師ランクBのエリオにキャロ、しかもキャロには竜魂招来というレアスキルまである。

スバルに至っては才能の塊みたいなもんだし……………

後から引き抜いてきたサーロツズ兄妹の実力はレジアス中将の折り紙付き……………。

それを言えば隊長陣も異常だ。

まず筆頭にあげれるとすれば”エースオブエース”高町なのは一等空尉。

管理局でも最強と名高い砲撃型の空戦魔導師だ。

次にその親友である現役執務官であるフェイト・テストロッサ執務官。

現役執務官の中でも最多といわれる検挙率を誇る執務官での事実上のエース。

この二人が同じ部隊にいただけでも凄いことなのにもう一人、どんなでもないのがここの部隊長を勤めている。

”最後の夜天の主” 八神はやて二等陸佐。

自分の騎士であるヴォルケンリッターを従える彼女は指揮官としての才能にも恵まれており、僅か19歳にして二等陸佐という階級まで上り詰めた猛者でもある。

しかもその騎士であるヴォルケンリッターは全員がオーバーランク。

まさにエリート集団。

こんな超が付くほどエリート部隊に所属している私は…………凡人過ぎて涙が出る。

「……………でも」

私は執務官を諦めきれないし、ここにいる限り逃げもしない！！

「ランスターの弾丸に撃ち抜けないものは無いんだから……………」

私はそう呟くとさらに多くのガジェットを照準し発砲する。

『気をつけて皆!! 敵の増援よ!!』

「「「ツ!?!」」」

不意にそんな念話が全体を見ていたシャルルさんから伝わった。

「ティアナさん!!」

「私達も出ます!!」

その念話を聞いていたエリオとキャロはすぐに前線に出ようとするけど……

「待つて!ここは私とスバルで抑える!!……………スバル!!」  
「ロスシフト行けるわね?」

「もちろんだよティア!」

私はスバルを使う事で無理矢理後ろに下がらせた。

凡人の私が上を目指すにはここで頑張らなくてはならない……………

だから……………

『カートリッジをそんなにロードしたら……………』

スバルを援護する為にカートリッジをロードするとシャルさんが何かを言いかけたのだが無視する。

「これくらい大丈夫……………だって……………ランスターの弾丸に撃ち抜けないものは無いんだから!!」

オレンジ色の大量の魔力球が浮かぶ中で私はあまり上手くコントロールできないまま発射体勢に入った。

「クロスファイアー……………シュート!!」

私の掛け声とともに魔力球が一斉にスバルの引き付けたガジェットに着弾していく。

「はああああああああああああああああああああああああああああああああ!!」

そんな気合いの声とともに魔力球は次々にガジェットのボディに穴を開けて爆散させていった。

私でも……………凡人の私でも出来るんだ……………

そんな言葉が私の頭に響く。

だからだろう。

一発の魔力球が私のコントロールを離れてスバルの方へ向かっていったのは……………

「ッ！？スバル！！」

私は親友に迫る魔力球をただ見つめる事しか出来なかった。

スバルの方も直前で気が付いたようで回避出来るような状態ではない。

……………”フレンドリーファイア”……………

そんな言葉が頭を過ぎる。

不意に聞こえたそんな叫び声とともに青い影がウィングロードの上にいたスバルを弾き飛ばした。

「がああああああああああああああああああああ  
あ！！」

スバルを庇った青い影……ゼロ・サーロツズ二等空尉の右目を私の魔力球が貫いてしまったのだ……

745

熱い…………

焼けた鉄を直接右目に押し付けられたかのような痛みが俺を襲う。

「うぐっ……………ああ……………」

言葉にならないうめき声が俺の口から漏れ、赤い液体が俺の右目から流れ出ている。

「くそっ……………止まらねえ……………」

俺は右目を抑え、流れ出る赤い液体を止めようとするがまったく止まる気配がない。

仕方なく俺は自身のシステムで応急的な処置をしようとシステムを起動すると……………

バックアップシステム起動……………

……………エラー……………

補助システム起動……………

機密ファイルを確認。

ファイルを開きますか？

Y e s / N o

そんな表示が現れた。

俺はエラーが出た事に疑問を覚えつつ Y e s の方を選択すると……

承認を確認。

機密ファイルを開きます。

そんな表示とともに大量の情報が俺の中で溢れ出した。

『えっと……わたしのなまえは”たかまち　なのは”です』

舌つ足らずな声で自己紹介する艶のある栗毛の少女

『あの……ユーノ・スクライアです！……あの……その……』

内股をモジモジさせ、真っ赤な顔をしながら話す金髪緑眼の少女

『……ねえベルさん！私の母さんにも会ってくれないかな！？』

涙目になりながらそう訴えてくる金髪少女

『ありがとうベルさん 今日泊まっていってくれるなんて私嬉しい！』

車椅子に座り喜ぶ少女……………

その他にも様々な光景が脳裏に浮かんでは情報として記憶に刻まれていく。

「ぐあああああああああああああああああああああ  
あ！！」

あまりの情報量に処理が追いつかず、無意識に叫び声が出た。

しかしそれを感知する余裕を持ってない俺はそのまま叫び続け……………

……………

非常用戦闘プログラム起動。

プログラム名

”  
E  
X  
A  
M  
P  
L  
E  
S  
T  
H  
E  
N  
E  
X  
T  
”

[illegible]

視界が真紅に染まった俺はセカンドを構えて大量に存在しているガジェットに向かって突撃をかけるのだった。

## 第48話（後書き）

ご意見ご感想待ってます。

第49話（前書き）

短いよ（ノ  
丁）



「……………違う……………あれはなんか違う……………」

私は自分の考えを口に出して否定する。

”アレ”は明らかに負傷による苦痛の叫び声ではない。

私の中のどこか冷静な部分がそう言っている。

じゃあいったい何がゼロさんに起きたのか？

その疑問はゼロさんがティアの声に反応し、こっちを振り向いた瞬





「ソードアームウウウ！セツトオオオ！」

《了解 ソードアーム》

不意にゼロさんはそう言ってセカンドの形態を変化させる。

セカンドの本体……ガトリング砲とスラスターのある部分が背中に装着され、大剣の刃の部分が二つに別れて両腕に装着された。

そして……

[illegible]

ゼロさんは先程とは比べものにならないスピードでガジェット達を駆逐していった。

「機確実にその両腕に装着された刃で斬り裂き仕留めていく。」

時折ガジェットレーザーがゼロさんのＢＪにかすり傷を付けていくが本人はそんな事お構い無しに攻撃を続けている。

「大丈夫かおま……………あれは……………ゼロなのか!？」

ヴィータ副隊長が持ち場のガジェットを殲滅し終えたのか応援に来てくれた。

しかし大量展開しているガジェット相手に一方的な戦いを続けるゼロさんを見て、その足が止まった。

そして、ガジェットが斬り裂かれる瞬間に飛び散るオイルを全身に浴びながら戦い続けるゼロさんの姿を見たヴィータ副隊長がポツリとこう呟く。

「……………そんな馬鹿な……………あれは……………」 EXAMシス  
テム”？」

それは聞き慣れない言葉だった。

ヴィータ副隊長はガジェットを切り刻み続けるゼロさんを凝視し、どこか放心したような表情を浮かべている。

そして、時間にして僅か5分間。

その間、誰も動く事がないまま時間が過ぎ……………ゼロさんはガジェットをたった一人で殲滅したのだった。

ガジェットを殲滅したした後すぐにゼロさんは血を流し過ぎたのか意識を失い、倒れてしまう。

そして、そのまま医療班に応急処置を受けながら病院へと搬送された。

しかし……………

倒れる前にゼロさんが血を吐くように叫んだ言葉が耳から離れない

……………

その叫びとは……………

「…………俺の……俺の敵はどこだあああああああ  
あああああああああああああああああああああ  
あああああああああああああああああああああ！  
」

## 第49話（後書き）

ご意見感想待ってます。

## 第50話（前書き）

これはフレンドリーファイアでゼロが撃たれる前のお話

## 第50話

「スイン！遠距離からの砲撃支援を頼む……………フライトフォーム  
！！」

《了解 フライトフォーム》

ゼロはそう言ってセカンドをフライトフォームにし、陸路に行く私から離れて行く。

《装備をハンドキャノンに変更！！マスター！あの木の上が狙いやすそうだ！！》

それを確認したEz8が装備をマシンガンからハンドキャノンに切り換えてくれたので私はEz8が教えてくれた狙いの付けやすい背の高い木の上に飛び乗った。

《あそこだマスター！！11時方向！！》

「……………」

私はEz8の教えた情報に従い、フォワード陣がどこにいるのかを確認してハンドキャノンの発射体勢に入る。

《な、何をやってるんだランスターは!!》

そんなEz8の声に私は望遠システムを起動してティアナの方を見た。

《自身の制御範囲を超えたカートリッジロード……………危険過ぎる！あれでは囷役のナカジマに当たってしまうぞ!!》

Ez8は焦った様子で私に今のティアナの状態がどれほど危険なのかを伝えてくる。

「……………」

私はハンドキャノンを構え直してスバルの近くに照準を付けた。

これならティアナが誤射してもすぐに撃ち落とせる。

《撃った!!》

「……………ッ!!」

誤射を防ぐ為の狙撃の準備が終わった瞬間にEz8がそう言った。

私はハンドキャノン用力強く握り絞めてその時を待つ。

ティアナの放ったクロスファイアーは不安定ながらもガジェット達を撃ち抜いていく。

その状態で自身もクロスミラーージュで射撃を行うティアナは正直普段ティアナ自身が思っているような凡人ではなく、天才の部類に入る才能だと私は思う。

そんな事を考えていると一発の魔力球がティアナのコントロールを外れ……………スバルの方に飛んでいった。

《マスター!!》

「…………コクッ!!」

Ez8の声に素早く頷いてその魔力球に狙いを付ける。

あの程度の速度なら十分に狙撃できる範囲だ。

私は魔力球の進行方向や速度を頭の中で計算し、その上で照準する。

集中力が最大まで上がり、照準した魔力球を撃ち漏らす可能性が限りなく低い状態の中で、私は引き金を指で……………

引けなかった。

脳内に警報が鳴り響く。

《マスターへの外部からのハッキング!?》

それはEz8から伝えられた驚愕の事実。

「……………うつ……………うぁ……………く……………」

ハンドキャノンを支えることもできない程に私の頭を貫く激痛。

《マスター!!今すぐドクター達に連絡を……………なっ!?!こつちに  
も侵入を!?!マ、マス……………ター……………》

Ez8はそれつきり沈黙してしまった。

そして残されたのはEz8が沈黙してしまったが為にBJが解除されてしまった不正な侵入による頭痛に苦しむ私のみ。

「……………あ……………つつあ……………ぜ……………口……………助け……………て……………」

激痛のあまり私は今まで流したことの無い涙を流し、ゼロに助けを求めた。

『……………兄さんは渡さない……………兄さんは私と共に世界全てを統治するのだからね』

「ツ！？」

それは私の脳内に響く念話とは違う声。

ゼロを兄と言う”ソレ”は私に対する侵入を推し進めながら言葉を紡ぐ。

しかもそれは私の精神の制御をいとも簡単に崩壊させる言葉だった。

『ふむ……思った以上に君の身体は私とマッチングがいらいらしい……贗作とはいえ流石は”ガンダム”だな……この身体を私にも使わせて貰おう』

「いやあああああああああああああああああああああ  
あああああああああああああああああああああ！助けて！……  
…助けてゼロ！！……………」ベルフエゴール！！！」

恥も外聞もなくゼロに助けを求める私。

しかし、ソレによる侵食は止まらない。

『大丈夫だ……君が消えたりする事は無いよ……そんな事をすれば兄さんや他の者達に気が付かれてしまうからね……私にもこの身体を使わせて貰う……それだけだよ……』

[illegible]

その言葉とともに最大級の激痛が私を襲う。

脳内にある回路が全て焼き切れそうなほどの激痛が私を苦しめ……意識を刈り取った。

「……………助……………けて……………ぜ……………口……………」

無意識にそんな呟きをこぼしながら……………

## 第50話（後書き）

皆様のご意見感想待ってます。

番外編 4（前書き）

完成（「。」「」

# 番外編4

月夜の闇の中で瞬く火花。

それは朽ち果てた廃墟の中での美しい火の花。

何度も何度も何度も………それこそ永遠に続いているかのような幻想的で美しい火花は、俺と槍を持つ一人の武人を照らし出す。

互いに刃を交えるたびに笑みがこぼれ、高ぶる心を抑え切れない。

[illegible]

L

俺の持つ大剣型の俺専用デバイス……セカンドリバイが奴のもつ  
槍型のデバイスとぶつかって派手な火花を撒き散らす。

そしてそのまま鰐ぜり合いとなり、**膠着状態**になった。

俺は戦闘機人としてのスペックを使いセカンドに全体重を込めて

「墜ちろおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお  
おおおおおおおお！！」

奴を押し切ろうとセカンドを思いっきり横に薙ぎ払う。

そんな俺の強引な引き離し方に力負けした奴は

「くうっ…………やるな…………だが負けん！」

背後にある壁を蹴り、その勢いを生かして突撃をかけた。

「フッ…………来い！！」

その突撃を見た俺はさらに笑みを深くし、奴を迎え撃つのだった。

何故俺と奴が戦う事になったのか……………

事の始まりは4時間程前に遡る。

~~~~~

「……………？型を一機使って不意打ちか……………どういづつも
りだクアットロ……………納得のいくように説明しろ」

俺はその日不機嫌だった。

何故なら、クアットロが管理局の未来のエース候補を親父殿が作った
ステルス防衛型のメカである？型を勝手に使って襲撃、撃墜した
事が分かったのだ。

「ひうつ！？……………え、えと……………？型の性能のテストをしようと
……………」

クアットロは殺気混じりに話す俺に怯えながらも小さな声で詰まり
ながら答える。

しかしそのクアットロの答えに俺はさらにクアットロに向ける殺気

を強める事になった。

何故なら……

「性能のテストだと？……出来上がったばかりの貴重な先行量産型……三機の内の一機を使つてか？」

そう、これが俺の怒る理由。

親父殿がせっかく作り上げた新型のメカの数少ない先行量産型の一機を勝手に持ち出し、しかも大破させてしまったのだ。

まあ完全に大破してくれたおかげでこちらの新たな戦力である？型を解析されてもあまり情報は手に入らないだろうが、これは大問題である。

「……クアットロ……」

故に俺はクアットロに殺気の籠った視線を向け続けた。

「あ……う……あ……」

一方クアットロの方は狼狽した様子で言葉が出てこない。

そんな状態がどのくらい続いたのだろうか？

「……………はぁ……………そのくらいにしてあげてくださいベルフェゴール」

その空気に耐え兼ねたのかブロンド髪の女性がため息混じりに俺を止める。

「……………ドゥーエ……………」

俺はブロンド髪の女性……………ドゥーエの方を見るとドゥーエは肩を竦めて

「起きてしまった事は仕方がない……………クアットロも反省しているようだからもう許してあげたらどうです？」妹”をいじめるような真似をするのは格好悪いですよ？」

苦笑しながらそう言って俺を諭した。

「……………悪い……………」

諭された俺は眉をしかめながら……………詫びの意味を込めてクアットロの頭を撫でた。

「……………へ？え！？ベルフェゴール”兄様”！？」

クアットロは突然の俺の行動に驚いているようで顔を真っ赤にしながら目を白黒させている。

何故クアットロが俺の兄と呼ぶのか？

それにはある理由があった。

それは……………

親父殿が俺の製造し始めた時期がドゥーエより少し前の時期だったということ。

つまり目覚めるのは遅かったが、俺はドゥーエよりも少し前の時期に製造された戦闘機人であり、トーレやチンク、クアットロにとつては俺は兄なのだ。

しかも”この身体”で目覚めてからの稼動時間は短いものの、俺の記憶にはないが俺の素体となった存在の稼動時間を含めるとかなり長い時間動いていたらしい。

「……………はあ……………すまん、大人げなかったな」

俺はため息を吐きつつクアットロをいたわるように頭を撫で続けた。

「え？えええ！？べべべべルフエゴール兄様！！そそそそそんな事ないですわ！！全部私が悪いんですわ！！」

クアットロは顔を真っ赤にしたまま慌てたように両手をばたつかせ、俺にそう言ってくる。

俺はそんなクアットロに

「いや……………俺が悪かった……………よくよく考えればいずれ敵対するかもしれない管理局のエース候補を潰すのは利に適っている……………？型の性能テストもやらないといけなかでたしな……………本当……………」

悪かった」

笑いかけながらそう言った。

「ベルフェゴール兄様……………」

クアットロは小さく俺の名を呟き、どこか熱に浮かされたかのような表情をして見つめている。

その様子を見ていたドゥーエは苦笑し……………俺の腕を取って豊かな胸を押し付けていた。

「……………ドゥーエ？」

俺はそのドゥーエの行動が理解出来ずに戸惑いを覚える。

今思えば最初に俺がドゥーエに会った時もこんな感じだったの思いう出ず。

それは俺が目覚めてしばらくした頃に親父殿が外で活動していたドゥーエに帰省するように言ったのがきっかけだった。

「初めまして、ドゥーエです……………結婚してください」

ドゥーエはそう言って俺の両手をしっかりと握った後、鞆から入籍

届けと実印を取り出す。

「「「ゑ?」「」」」

突然過ぎるドゥーエの奇行に固まる俺、トーレ、チンク。

「な!? ドゥーエお姉様!? 抜け駆けはするいですわ!」

何故か意味不明な言動をするクアットロ。

「はっはっはっは! これは孫を期待していいのかな?」

さらに意味深な発言をする親父殿。

その後はカオスだったとだけ言っておこう。

主に入籍届けと実印を俺に突き付けるドゥーエと顔を真っ赤にして
叫び続けるクアットロに孫が見たいという親父殿がな……………

話が脱線したな……………

とにかくドゥーエの行動がやり過ぎだった事だ。

そんな訳で俺とクアットロ、ドゥーエはそれまでいた待機室を出て、話をしながらウーノやトーレ、チンクに親父殿がいるコントロールルームへと歩いていったのだが……………

通路内に警報が鳴り響く。

「……ッ!?」

瞬時に俺達は互いに顔を見合わせ、コントロールルームへ走った。

そして、コントロールルームへ着くとすでにトーレがIS……ラン
ドインパルスを起動し、チンクがスティングガーを手に持って戦闘準備が完了している。

ウーノも自身のIS……フロース・セクレタリーを起動して壁一面にあるモニターの情報を纏めていた。

親父殿もそのモニターの一つを見つめて険しい表情を浮かべている。

「いったいどうしたんだ親父殿!？」

俺はとりあえず近くにいた親父殿に事情を聞いてみると親父殿はモニターを睨んだまま

「……………招かれざるお客さんだよ」

そう呟いた。

それを聞いた俺は自身の本性を隠す為に親父殿に作ってもらった俺専用のデバイス…………セカンドリバイを握り絞めて親父殿が見つめるモニターを見る。

そこには明らかに管理局の局員とおぼしき部隊がこちらに侵入している様子が確認できた。

その中には明らかに通常の局員とは違う雰囲気を持つ実力者が三人、確認することができる。

「……………あの男……………できる」

俺はそこに実力が飛び抜けて高そうな鎗型のデバイスを持つ男を睨んだ。

俺は親父殿の方を向くと

「……………出来るかい？」

親父殿はどこか不安げな表情を浮かべながら俺を見ていた。

その言葉を聞いた俺は

「当たり前だろ？……………誰の息子だと思ってんだよ」

セカンドを起動し、B Jを纏って一人コントロールルームを出て行くのだった。

俺はコントロールルームを出た後にセカンドのフライトフォームを使い、隠されていたメインの施設を抜けて擬装に使っている廃墟の中を進んで……………一つの広間に降り立ちセカンドをソードフォームにする。

そしてセカンドをそのまま肩に担いで待っていると

「クイント！メガーヌ！……………クソッ！」

そんな声とともにあの槍型のデバイスを持つ男が広間の中に駆け込んできた。

どうやら親父殿達が奴らを分断したようで、うまい具合にあの男だけを俺の下へ誘い込んだらしい。

「……………貴様は……………雇われた傭兵か？」

男はセカンドを起動した状態の俺を見てそう呟く。

その声にはどこか焦りのようなものが感じられる。

そんな奴を見つめながら俺は

「そんなの今は関係ないだろ？今ここにいるのは俺……………すなわちお前の敵だ！」

セカンドを構えて奴と対峙した。

するとその宣言を聞いた奴は自身の槍を握り絞めて

「押し切らせてもらっ」

そう言った。

俺はその言葉を聞いて……………

奴とほぼ同時に切り込むのだった。

~~~~~

「くっ！」

「このっ！」

俺達は互いにもう何度目になるのか分からない鏝ぜり合いをしていた。

奴は強い。

そう感じる場面が何度あった事か……

そう思うたびに何故が高まっていく心をそのままに、俺はセカンドを振るい続ける。

「カートリッジロード!!」

俺達は同時にカートリッジをロードし、込める力を魔力で強化していく。

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおお  
おおおおおおおおおおおおおおおおおお  
おおおおおお!!」

互いのデバイスが触れ合う部分からは動かしてもいないのに美しい火花が大輪の花を咲かせている。

互いに一步も引くことはない。

やがてロードしたカートリッジの効果が切れてきたのを見計らい俺達は後方に飛ぶことで互いにその場を離れた。

「.....」

「.....」

俺達は互いに無言で武器を構え続ける。

しかしこんな事にいつまでも時間をかける訳にはいかない。

分断した他の局員達がトーレ達と戦っている事を考えると少しでも早く向こうの応援に回りたいのだ。

その為には目の前にいる武人を圧倒する必要がある。

「……………認めるよ」

「ん？」

俺の呟きに奴が反応する。

恐らく警戒しての事だろう。

だから俺は……………

「あんたに手加減は無理だ……………今の俺の全力でいかせてもらう！」

そう言って……………

非常用戦闘プログラム起動

プログラム名

EXAMシステム

視界が赤く染まり、EXAMの文字が浮かび上がる。

「……………お前を……………倒す……………」

切り札を切ったのだった。



番外編 4（後書き）

ご意見ご感想待ってます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4567t/>

---

魔法少女リリカルなのは～悪役面の主人公～

2011年10月9日20時11分発行